

# 道草

夏目漱石



一冊堂青空文庫



道草

夏目漱石

一

健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さえ感じた。

彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着していた。彼はそれを忌んだ。一日も早くその臭を振り落とし落さなければならぬと思つた。そうしてその臭のうちに潜んでいる彼の誇りと満足にはかえつて気が付かなかつた。

彼はこうした気分を有つた人でありがちな落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二返ずつ規則のように往来した。

ある日小雨が降つた。その時彼は外套も雨具も着けずに、ただ傘を差しただけで、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思い懸けない人にはたりと出会つた。その人は根津権現の裏門の坂を上つて、彼と反対に北へ向いて歩

いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。そうして思わず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をしてその人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍この男の眼鼻立を確かめる必要があつた。それで御互が二、三間の距離に近づいた頃また眸をその人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めていた。

往來は静であつた。二人の間にはただ細い雨の糸が絶間なく落ちてゐるだけなので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらしてまた真正面を向いたまま歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色なく、じつと彼の通り過ぎるのを見送つていた。健三はその男の顔が彼の歩調につれて、少しづつ動いて回るのに気が着いた位であつた。

彼はこの男に何年会わなかつたろう。彼がこの男と縁を切つたのは、彼がまだ廿歳になるかならない昔の事であつた。それから今日までに十五、六年の月日が経つてゐるが、その間彼らはずいぞ一度も顔を合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見るとまるで變つていた。黒い髭を生して山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさえ隔世の感が起らないと

も限らなかつた。しかしそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。彼はどう勘定しても六十五、六であるべきはずのその人の髪の毛が、何故今でも元の通り黒いのだろうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通しているその人の特色も、彼には異なる気分を与える媒介となつた。

彼は固よりその人に出会う事を好まなかつた。万一出会つてもその人が自分より立派な服装でもしていてくれれば好いと思つていた。しかし今目前見たその人は、あまり裕福な境遇にいるとは誰が見ても決して思えなかつた。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織なり着物なりについて判断したところ、どうしても中流以下の活計を営んでいる町家の年寄としか受取れなかつた。彼はその人の差していた洋傘が、重そうな毛繻子であつた事にまで気が付いていた。

その日彼は家へ歸つても途中で会つた男の事を忘れなかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つていたその人の眼付に悩まされた。しかし細君には何にも打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙っている夫に対しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

次の日健三はまた同じ時刻に同じ所を通った。その次の日も通った。けれども帽子を被らない男はもうどこからも出て来なかった。彼は器械のようにまた義務のように何時もの道を往つたり来たりした。

こうした無事の日が五日続いた後、六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然また根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅やかした。それがこの前とほぼ同じ場所で、時間も殆どこの前と違わなかつた。

その時健三は相手の自分に近付くのを意識しつつ、何時もの通り器械のようにまた義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正反対であつた。何人をも不安にしなればやまないほどの注意を双眼に集めて彼を凝視した。隙さえあれば彼に近付こうとするその人の心が曇りした眸のうちにありありと読まれた。出来るだけ容赦なくその傍を通り抜けた健三の胸には変な予覚が起つた。

「とてもこれだけでは済むまい」

しかしその日家へ帰つた時も、彼はついに帽子を被らない男の事を細君に話さずにし

まった。

彼と細君と結婚したのは今から七、八年前で、もうその時分にはこの男との関係がとくの昔に切れていたし、その上結婚地が故郷の東京でなかったので、細君の方ではじかにその人を知るはずがなかった。しかし噂としてだけならあるいは健三自身の口から既に話していたかも知れず、また彼の親類のものから聞いて知っていないとも限らなかつた。それはいずれにしても健三にとって問題にはならなかつた。

ただこの事件に関して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事実が一つあつた。五、六年前彼がまだ地方にいる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。その時彼は変な顔をしてその手紙を読んだ。しかしいくら読んでも読んでも読み切れなかつた。半紙廿枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はついにそれを細君の手に渡してしまつた。

その時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に説明する必要があつた。それからその女に關聯して、是非ともこの帽子を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。しかし機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れてい

た。細君は女の事だからまだ判然はつきり覚えているだろうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問い訊たして見る気も起らなかつた。彼はこの長い手紙を書いた女と、この帽子を被らない男とを一所に並べて考えるのが大嫌だいきらひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介なかだちとなるからであつた。

幸い彼の目下の状態はそんな事に屈托くつたくしている余裕を彼に与えなかつた。彼は家へ歸つて衣服を着換えると、すぐ自分の書齋へ這入はいつた。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上で自分のする事が山のように積んであるような気持でいるのである。けれども實際かというのと、仕事をするよりも、しなければならぬという刺戟しげきの方が、遥かに強く彼を支配していた。自然彼はいらいらしなければならなかつた。

彼が遠い所から持つて来た書物の箱をこの六畳の中で開けた時、彼は山のような洋書の裡うちに胡坐あぐらをかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片端かたはしから取り上げては二、三頁ぺいずつ読んだ。それがため肝心の書齋の整理は何時まで経つても片付かなかつた。しまいはこの体ていたらくを見るに見かねた或友人あるが来て、順序にも冊数そんすうにも頓着とんじやくなく、あるだけの書物をさつさと書棚の上に並べてしまつた。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じて

いた。

三

健三は実際その日その日の仕事に追われていた。家へ帰ってからも気楽に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを讀んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考えたりしたかった。それで彼の心は殆んど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙がしがっている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断わったが、彼は心のうちで、他人にはどうしてそんな暇があるのだろうと驚ろいた。そうして自分の時間に対する態度が、あたかも守銭奴のそれに似通っている事には、まるで気がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼は臍氣にその淋しさを感ずる場合さえあった。けれども一方ではま

た心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索寞さくぼくたる曠野あらのの方角へ向けて生活の路みちを歩いて行きながら、それがかえって本来だとばかり心得ていた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。

彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

「教育が違うんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があつた。

「やっぱり手前味噌よ」

これは何時でも細君の解釈であつた。

気の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかつた。そういわれる度に氣不味きまづい顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心しんから忌々いまいましく思った。ある時は叱しかり付けた。またある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癩癬かんしゃくが細君の耳みみに空から威張いばりをする人の言葉のように響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するに過ぎなかつた。

彼には一人の腹違はらちがひの姉と一人の兄があるぎりであつた。親類といつたところでの二

軒より外に持たない彼は、不幸にしてその二軒ともあまり親しく往來ゆききをしていなかった。自分の姉や兄と疎遠になるという変な事實は、彼に取つても余り氣持の好いいものではなかった。しかし親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三、四回彼らと顔を合せたという記憶も、彼には多少の言訳になつた。もし帽子を被かぶらない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木せんだぎの町を毎日二返規則正しく往來するだけで、当分外の方角へは足を向けずにしまつたろう。もしその間あいだに身体からだの樂に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢ししを畳の上に横たえて半日の安息を貪むさぼるに過ぎなかつたろう。

しかし次の日曜が来たとき、彼はふと途中で二度会つた男の事を思い出した。そうして急に思い立つたように姉の宅うちへ出掛けた。姉の宅は四ツ谷よやの津つの守坂かみざかの横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫というのは健三の從兄いとこにあたる男だから、つまり姉にも從兄であつた。しかし年齢は同年おなじとしか一つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。この夫がもと四ツ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼が其所そこをやめた今日こんにちでも、まだ馴染なじみの多い土地を離れるのが厭いやだといつて、姉は今の勤先に不便なのも構わず、やつぱり元の古ぼけた家に住んでるのである。

#### 四

この姉は喘息持であつた。年が年中ぜえぜえいつていた。それでも生れ付が非常な痛性なので、よほど苦しくないと決して凝としていなかつた。何か用を拵えて狭い家の中を始終ぐるぐる廻つて歩かないと承知しなかつた。その落付のないがさつな態度が健三の眼には如何にも氣の毒に見えた。

姉はまた非常に饒舌る事の好きな女であつた。そうしてその喋舌り方に少しも品位というものがなかつた。彼女と対坐する健三はきつと苦い顔をして黙らなければならなかつた。

「これが己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でもこういう述懐が起つた。

その日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまわしているこの姉を見出した。

「まあ珍らしく能く来てくれたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲団を勧めて縁側へ手を洗に行つた。

健三はその留守に座敷のなかを見廻わした。欄間には彼が子供の時から見覚えのある

古ぼけた額が懸っていた。その落款らくかんに書いてある筒井憲つついけんという名は、たしか旗本はたもとの書家か何かで、大変字が上手なんだと、十五、六の昔此所ここの主人から教えられた事を思い出した。彼はその主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。そうして年からいえば叔父甥おじおいほどの相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲すもうをとつては姉から怒おこられたり、屋根へ登つて無花果いちじくを搦もいで食つて、その皮を隣の庭へ投げたため、尻しりを持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買つて遣やるといつて彼を騙だましたなり何時まで経つても買つてくれなかつたのを非常に恨めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩けんかをして、もう向うから謝罪あやまつて来ても勘忍してやらないと覚悟を極きめたが、いくら待つていても、姉が詫あやまらないので、仕方なしにこちらからのこのこ出掛けて行つたくせに、手持無沙汰てもちぶざたなので、向うで御這入おはいりというまで、黙つて門口かどぐちに立つていた滑稽けいもあつた。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた。そうしてそれほど世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有もつ事が出来にくくなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身体からだの具合はどうです。あんまり非道ひどく起る事もありませんか」

彼は自分の前に坐すわった姉の顔を見ながらこう訊たずねた。

「ええ有難う。御蔭いんさまで陽氣やうきが好いいもんだから、まあどうかこうか家の事ことだけは遣つてるんだけれども、——でもやつぱり年としが年としだからね。とても昔むかしのようにながせいに働はたらく事は出来ないのさ。昔健ちゃんけんちゃんの遊あそびに来てくれた時とき分にや、随分尻しりツ端はし折よりで、それこそ御釜おかまの御尻おしりまで洗あったもんだが、今いまじゃとてもそんな元氣げんきはありやしない。ただ御蔭いん様さまでこう遣つつて毎日牛乳ごうにゅうも飲のんでるし……」

健三は些さ少しながら月々げつげついくらかの小遣こづかいを姉あねに遣やる事を忘わすれなかつたのである。

「少し瘦やせたようですね」

「なにこりや私あたしの持前もちまえだから仕方がない。昔むかしから肥ふとった事ことのない女おんななんだから。やつぱり癩かんが強いもんだからね。癩かんで肥ふとる事が出来ないんだよ」

姉は肉にくのない細ほそい腕うでを捲まくつて健三けんさんの前まえに出でして見みせた。大きな落おち込こんだ彼女の眼めの下したを薄黒うすくろい半円形はんえんけいの暈かざが、怠だるそうな皮かわで物憂ものうげに染そめていた。健三けんさんは黙もくつてそのぼさぼさした手の平てのひらを見詰みめた。

「でも健ちゃんけんちゃんは立派りっぺいになつて本ほん当とうに結構けつこうだ。御前ごまえさんが外国がいこくへ行く時ときなんか、もう二度にどと生きて会あう事は六むずかしかしかろうと思おもつたのに、それでもよくまあ達者たつしやで帰かえつて来き

られたのね。御父さんや御母さんが生きて御出だつたらさぞ御喜びだろう」

姉の眼にはいつか涙が溜つていた。姉は健三の子供の時分、「今に姉さんに御金が出たら、健ちゃんに何でも好きなものを買って上げるよ」と口癖のようにいつていた。そうかと思うと、「こんな偏窟じゃこの子はとても物にやならない」ともいつた。健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思い浮べて、心の中で苦笑した。

## 五

そんな古い記憶を喚び起こすにつけても、久しく会わなかつた姉の老けた様子が一層健三の眼についた。

「時に姉さんはいくつでしたかね」

「もう御婆さんさ。取って一だもの御前さん」

姉は黄色い疎らな歯を出して笑つて見せた。実際五十一とは健三にも意外であつた。

「すると私とは一廻以上違うんだね。私やまた精々違つて十か十一だと思つていた」

「どうして一廻どころか。健ちゃんとは十六違うんだよ、姉さんは。良人が羊の三碧で

姉さんが四緑しろくなんだから。健ちゃんたしは慥しちせきか七赤しちせきだったね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰くつて見て御覽ごらん、きつと七赤しちせきだから」

健三はどうして自分の星を繰くるのか、それさえ知らなかった。年齢としの話はそれぎりやめてしまった。

「今日は御留守ごりゆうなんですか」と比田ひだの事を訊きいて見た。

「昨夕ゆうぐも宿直とまりでね。なに自分の分ぶんだけなら月に三度か四度よどで済よむんだけれども、他ひとに頼たのまれるもんだからね。それに一晚いちばんでも余計よけい泊とまりりさえすればやつぱりいくらかになるだろう、それでつい他ひとの分ぶんまで引受ひきうける気きにもなるのさ。この頃ころじゃあつちへ寐ねるのとこつちへ帰かえると、まあ半々はんはん位くらいなものだろう。ことによると、向むかへ泊とまりる方がかえつて多いかも知れないよ」

健三は黙もくつて障子しょうじの傍そばに据すえてある比田ひだの机こを眺ながめた。硯箱すずりばこや状袋じょうふくろや巻紙まきしがきちりと行儀ぎやうぎよく並ならんでいる傍そばに、簿記用ぼけいようの帳面ちやうめんが赤い脊皮せがわをこちらへ向むかけて、二、三冊さんさふ立て懸かけてあつた。それから綺麗きれいに光あかりつた小さい算盤そろばんもその下したに置いてあつた。

樽つわきによると比田ひだはこの頃ころ変かな女おんなに關係かけをつけて、それを自分の勤め先きんめさきのつい近くに

困っているという評番ひょうばんであった。宿直とまりだ宿直だといって宅うちへ帰らないのは、あるいはそのせいじゃなからうかと健三には思えた。

「比田さんは近頃どうです。大分だいぶん年を取ったから元とは違つて真面目まじめになつたでしょう」

「なにやツぱり相変らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて来た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席よせだ、やれ芝居しばだ、やれ相撲だつて、御金さえありや年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇体なもんで、年のせいだか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優やさしくなつたようだよ。もとは健ちゃんも知つてる通りの始末で、随分烈はげしかつたもんだがね。蹴けつたり、敲たたいたり、髪の毛を持つて座敷中引摺廻ひつづりしたり……」

「その代り姉さんも負けてる方じゃなかつたんだからな」

「なに妾あなや手出しなんかした事あ、ついの一度だつてありやしない」

健三は勝気な姉の昔を考え出してつい可笑おかしくなつた。二人の立ち廻りは今姉の自白するように受身のものばかりでは決してなかつた。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だつた。それにしてもこの利かぬ気の姉が、夫に騙だまされて、彼が宅へ帰らない以上、きつと会社へ泊つているに違いないと信じ切つているのが妙ふびんに不憚ふびんに思われて

来た。

「久しぶりに何か奢りましようか」と姉の顔を眺めながらいった。

「ありがと、今御鮎をそういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてって御くれ」

姉は客の顔さえ見れば、時間に関係なく、何か食わせなければ承知しない女であった。健三は仕方がないから尻を落付けてゆっくり腹の中に持って来た話を姉に切り出す気になった。

## 六

近頃の健三は頭を余計遣い過ぎるせいか、どうも胃の具合が好くなかった。時々思い出したように運動して見ると、胸も腹もかえって重くなるだけであった。彼は要心して三度の食事以外にはなるべく物を口へ入れないように心掛ていた。それでも姉の悪強には敵わなかった。

「海苔巻なら身体に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思つて

取ったんだから、是非食べて御くれな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張って、好い加減烟草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が余り饒舌るので、彼は何時までも自分のいいたい事がいえなかった。訊きたい問題を持っていないながら、こう受身な会話ばかりしているのが、彼には段々むず痒くなつて来た。しかし姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食わせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三がこの前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣ろうかとい出した。

「あんなものあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持って御出でよ。なに比田だつて要りゃしないやね、汚ない達磨なんか」

健三は貰うとも貰わないともいわずにただ苦笑していた。すると姉は何か秘密話でもするように急に調子を低くした。

「実は健ちゃん、御前さんが帰つて来たら、話そう話そうと思つて、つい今日まで黙つてたんだがね。健ちゃんも帰りたてでさぞ忙がしかろうし、それに姉さんが出掛けて行くにしたところで、御住さんがいちゃ、少し話し悪い事だしね。そうかつて、手紙を書

こうにも御存じの無筆だろう……」

姉まへおきの前置は長たらしくもあり、また滑稽こっけいでもあった。小さい時分いくら手習をさせても記憶おぼえが悪くつて、どんなに平易やさしい字も、とうとう頭へ這入はいらずじまいに、五十の今日こんにちまで生きて来た女だと思つと、健三にはわが姉ながら気の毒でもありまたうら恥ちずかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一体どんな話なんです。実は私わたしも今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「そうかいそれじゃ御前さんの方のから先へ聴くのが順だつたね。何故なぜ早く話さなかつたの」

「だつて話せないんだもの」

「そんなに遠慮えんりょしないでもいいやね。姉弟きょうだいの間じゃないか、御前さん」

姉は自分の多弁たべんが相手の口を塞ふさいでいるのだという明白めいぱくな事実には毫ごうも気が付いていなかった。

「まあ姉さんの方から先へ片付けましょう。何ですか、あなたの話つていうのは」

「実は健ちゃんにはまことに気の毒で、いい悪いんだけど、あたしも段々年を取つ

て身体は弱くなるし、それに良人があの通りの男で、自分一人さえ好けりや女房なんかどうなつたつて、己の知つた事じゃないつて顔をしているんだから。——尤も月々の取高が少ない上に、交際もあるんだから、仕方がないといえればそれまでだけれどもね：  
：

姉のいう事は女だけに随分曲りくねっていた。なかなか容易な事で目的地へ達しそうになかつたけれども、その主意は健三によく解つた。つまり月々遣る小遣をもう少し増してくれというのだろうと思つた。今でさえそれをよく夫から借りられてしまうという話を耳にしている彼には、この請求が憐れでもあり、また腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつてこの身体じゃどうせ長い事もあるまいから」

これが姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭だとはいいかねた。

## 七

彼はこれから宅へ歸つて今夜中に片付けなければならぬ明日の仕事をもつていた。

時間の価値というものを少しも認めないこの姉と対坐して、何時までも、べんべんと喋舌つているのは、彼にとつて多少の苦痛に違なかつた。彼は好加減に帰ろうとした。そうして帰る間際になつてやつと帽子を被らない男の事をいい出した。

「実はこの間島田に会つたんですがね」

「へえどこで」

姉は吃驚したような声を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。

「太田の原の傍です」

「じゃ御前さんのじき近所じゃないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」

「掛けるつて、別に言葉の掛けようもないんだから」

「そうさね。健ちゃんの方から何とかいわなきや、向で口なんぞ利けた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来るだけ健三の意を迎えるような調子であつた。彼女は健三に「どんな服装をしていたい」と訊き足した後で、「じゃやッぱり楽でもないんだね」といった。其所には多少の同情も籠つて見えるように見えた。しかし男の昔を話し出した時にはさも

さも悪らしそうな語氣を用い始めた。

「なんぼ因業だつて、あんな因業な人ったらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取つて行くつて、いくら言訳をいつても、坐り込んで動かないんだもの。しまいにこつちも腹が立ったから、御氣の毒さま、御金はありませんが、品物で好ければ、御鍋でも御釜でも持つてつて下さいつていつたらね、じゃ釜を持つてくつていうんだよ。あきれるじゃないか」

「釜を持つて行くつたつて、重くつてとても持てやしないでしょう」

「ところがあの業突張の事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。それからその日の御飯をあたしに炊かせまいと思つて、そういう意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄つて好い事あないはずだあね」

健三の耳にはこの話がただの滑稽としては聞こえなかつた。その人と姉との間に起つたこんな交渉のなかに引絡まつている古い自分の影法師は、彼に取つて可笑しいというよりもむしろ悲しいものであつた。

「私や島田に二度会つたんですよ、姉さん。これから先また何時会うか分らないんだ」

「いいから知らん顔をして御出でよ。何度会つたつて構わないじゃないか」

「しかしわざわざ彼所あそこいらを通つて、私の宅うちでも探しているんだか、また用があつて通りがかりに偶然出ツくわしたんだか、それが分らないんでね」

この疑問は姉にも解けなかつた。彼女はただ健三に都合の好きさそうな言葉を無意味に使つた。それが健三には空御世辞からおせじのごとく響いた。

「こちらへはその後まるで来ないんですか」

「ああこの二、三年はまるつきり来ないよ」

「その前は？」

「その前はね、ちよくちよくつてほどでもないが、それでも時々は来たのさ。それがまた可笑しいんだよ。来ると何時でも十一時頃でね。鰻飯うなぎめしかなにか食べさせないと決して帰らないんだからね。三度の御まんまをひと一かたけでも好いいから他ひとの家うちで食べようつていうのがつまりあの人の腹なんだよ。そのくせ服装ななんかかなりなものを着ているんだがね。……」

姉のいう事は脱線しがちであつたけれども、それを聴いている健三には、やはり金銭上の問題で、自分が東京を去つたあとも、なお多少の交際が二人の間に持続されていたのだという見当はついた。しかしそれ以上何も知る事は出来なかつた。目下の島田につ

いては全く分らなかつた。

八

「島田は今でも元の所に住んでいるんだろうか」

こんな簡単な質問さえ姉には判然答えられなかつた。健三は少し的が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所を突き留めようとはまでは思つていなかった。で、大した失望も感じなかつた。彼はこの場合まだそれほどの手数を尽す必要がないと信じていた。たとい尽すにしたところで、一種の好奇心を満足するに過ぎないとも考えていた。その上今の彼はこういう好奇心を軽蔑しなければならなかつた。彼の時間はそんな事に使用するには余りに高価すぎた。

彼はただ想像の眼で、子供の時分見たその人の家と、その家の周囲とを、心のうちに思い浮べた。

其所には往来の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いていた。水の変らないその堀の中は腐つた泥で不快に濁つていた。所々に蒼い色が湧いて厭な臭さえ彼の鼻を襲つた。

彼はその汚きたならしい一廓いっかくを——様さまの御屋敷という名で覚えていた。

堀の向う側には長屋がずっと並んでいた。その長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあった。石垣とすれすれに建てられたこの長屋がどこまでも続いているので、御屋敷のなかはまるで見えなかった。

この御屋敷と反対の側には小さな平家ひらやが疎まばらに並んでいた。古いのも新しいのもごちゃごちゃに交まじっていたその町並は無論不揃ふそろであった。老人の歯のように所々が空いていた。その空いている所を少しばかり買って島田は彼の住居すまいを拵しらえたのである。

健三はそれが何時出来上ったか知らなかった。しかし彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであった。四間よましかない狭い家だったけれども、木口きぐちなどはかなり吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があった。六畳の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狭い庭に、大き過ぎるほど立派な御影みかげの石燈籠いしどうろうが据えてあった。綺麗きれいな好きな島田は、自分で尻端しりはしお折おりをして、絶えず濡雑ぬれぞうきん巾きんを縁側えんがわや柱はしらへ掛けた。それから跣足はだしになつて、南向の居間の前裁せんざいへ出て、草筆くさむしりをした。あるときは鋤くわを使つて、門口かどぐちの泥溝どろぼも浚あらいつた。その泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸かつていた。

島田はまたこの住居すまい以外に粗末な貸家を一軒建てた。そうして双方の家の間を通り抜

けて裏へ出られるように三尺ほどの路を付けた。裏は野とも畠とも片のつかない湿地であつた。草を踏むとじくじく水が出た。一番凹んだ所などはしよっちゅう浅い池のようになつていた。島田は追々其所へも小さな貸家を建てるつもりでいるらしかった。しかしその企ては何時までも実現されなかつた。冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つてやろうなどといつていた。……

健三はこういう昔の記憶をそれからそれへと繰り返した。今其所へ行つて見たら定めし驚ろくほど變つてゐるだろうと思ひながら、彼はなお二十年前の光景を今日の事のよゝうに考へた。

「ことによると、良人では年始状位まだ出してるかも知れないよ」

健三の帰る時、姉はこんな事をいって、暗に比田の戻るまで話して行けと勧めたが、彼にはそれほどの必要もなかつた。

彼はその日無沙汰見舞かたがた市ヶ谷の薬王寺前にいる兄の宅へも寄つて、島田の事を訊いて見ようかと考へていたが、時間の遅くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないという気が次第に強くなつたのとで、それなり駒込へ歸つた。その晩はまた翌日の仕事に忙殺されなければならなかつた。そうして島田の事はまるで忘れてしまつた。

彼はまた平生へいぜいの我に帰った。活力の大部分を挙げて自分の職業に使う事が出来た。彼の時間は静かに流れた。しかしその静かなうちには始終いらいらするものがあつて、絶えず彼を苦しめた。遠くから彼を眺めていなければならなかつた細君は、別に手の出しようもないので、澄ましていた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思えなかつた。細君はまた心の中で彼と同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなるほど、夫婦間の交渉は、用事以外に少なくならなければならぬはずだというのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢い健三を一人書齋に遺して置いて、子供だけを相手にした。その子供たちはまた滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入ると、きつと何か悪戯いたずらをして健三に叱しかられた。彼は子供を叱るくせに、自分の傍そばへ寄り付かない彼らに対して、やはり一種の物足りない心持を抱いだいていた。

一週間後の日曜が来た時、彼はまるで外出しなかつた。気分を変えるため四時頃風呂ふろへ行つて帰つたら、急にうっとりした好いい氣持に襲われたので、彼は手足を畳の上へ伸

ばしたまま、つい仮寐うたたねをした。そうして晩食ばんめしの時刻になつて、細君から起されるまでは、首を切られた人のように何事も知らなかつた。しかし起きて膳ぜんに向つた時、彼には微かな寒気が脊筋せすじを上から下へ伝わって行くような感じがあつた。その後で烈はげしい嚏くしゃみが二つほど出た。傍かたわらにいる細君は黙もくつていた。健三も何もいわなかつたが、腹の中ではこゝろした同情に乏しい細君に対する厭いやな心持を意識しつゝ箸はしを取つた。細君の方ではまた夫が何故なぜ自分に何もかも隔意なく話して、能働のうどうてき的に細君らしく振舞わせないのかと、その方をかえつて不愉快に思つた。

その晩彼は明らかに多少風邪かぜ気味であるという事に気が付いた。用心して早く寐ねようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過まで起きていた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆な寐ねていた。熱い葛湯くずゆでも飲んで、発汗したい希望をもつていた健三は、やむをえずそのまま冷たい夜具の裏うちに潜もぐり込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寐付が大変悪かつた。しかし頭腦の疲労はほどなく彼を深い眠の境に誘つた。

翌日あくるひ眼を覺した時は存外安静であつた。彼は床の中で、風邪はもう癒なほつたものと考えた。しかしいよいよ起きて顔を洗う段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位からだ身体が倦だ怠るくなつてきた。勇氣を鼓こして食卓に着いて見たが、朝食あさめしは少しも旨うまくなかつた。いつ

もは規定として三膳食べるところを、その日は一膳で済ました後、梅干を熱い茶の中に入れてふうふう吹いて呑んだ。しかしその意味は彼自身にも解らなかつた。この時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしていたが、別に何にもいわなかつた。彼にはその態度がわざと冷淡に構えている技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳を二度も三度もして見せた。それでも細君は依然として取り合わなかつた。

健三はさつさと頭から白襦衣を被つて洋服に着換えたなり例刻に宅を出た。細君は何時もの通り帽子を持つて夫を玄関まで送つて来たが、この時の彼には、それがただ形式だけを重んずる女としか受取れなかつたので、彼はなお厭な心持がした。

外ではしきりに悪感がした。舌が重々しくぱさつて、熱のある人のように身体全体が倦怠かつた。彼は自分の脈を取つて見て、その早いのに驚ろいた。指頭に触れるピンピンという音が、秒を刻む袂時計の音と錯綜して、彼の耳に異様な節奏を伝えた。それでも彼は我慢して、するだけの仕事を外でした。

彼は例刻に宅へ歸つた。洋服を着換える時、細君は何時もの通り、彼の不斷着を持つたまま、彼の傍に立つていた。彼は不快な顔をしてそちらを向いた。

「床を取つてくれ。寐るんだ」

「はい」

細君は彼のいうがままに床を延べた。彼はすぐその中に入って寐た。彼は自分の風邪気の事を一口も細君にいわなかった。細君の方でも一向其所に注意していない様子を見た。それで双方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞いでうつらうつらしていると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりですか」

「飯なんか食いたくない」

細君はしばらく黙っていた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行こうとはしなかつた。

「あなた、どうかenasುತ್ತたんですか」

健三は何にも答えずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めていた。細君は無言のまま、そつとその手を彼の額の上に加えた。

晩になって医者 came。ただの風邪だろうという診察を下して、水薬と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲ましてもらった。

翌日は熱がなお高くなった。医者 of 注意によつて護謨の氷嚢を彼の頭の上に載せた細君は、蒲団の下に差し込むニッケル製の器械を下女が買ってくるまで、自分の手で落ちないようにそれを抑えていた。

魔に襲われたような気分が二、三日つづいた。健三の頭にはその間の記憶というものが殆んどない位であった。正気に帰つた時、彼は平気な顔をして天井を見た。それから枕元に坐っている細君を見た。そうして急にその細君の世話になつたのだという事を思い出した。しかし彼は何にもいわずにまた顔を背けてしまつた。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなたどうなすつたんです」

「風邪を引いたんだつて、医者がいうじゃないか」

「そりゃ解つてます」

会話はそれで途切れてしまつた。細君は厭な顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らしてまた細君を呼び戻した。

「己おれがどうしたというんだい」

「どうしたって、——あなたが御病気だから、私わたくしだってこうして氷嚢を更かえたり、薬を注ついだりして上げるんじゃないやありませんか。それをあっちへ行けの、邪魔だのって、あんまり……」

細君は後をいわずに下を向いた。

「そんな事をいった覚はない」

「そりゃ熱の高い時仰おつしやった事ですから、多分覚えちゃいらっしやらないでしょう。けれども平生へいぜいからそう考えてさえいらっしやらなければ、いくら病気だって、そんな事を仰しやる訳がないと思えますわ」

こんな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な真実が潜んでいるだろうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑えつけたがる男であった。事実の問題を離れて、単に論理の上から行くと、細君の方がこの場合も負けであった。熱に浮かされた時、魔睡薬に酔った時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思っている事ばかり物語るとは限らないのだから。しかしそうした論理は決して細君の心を服するに足りなかつた。

「よござんす。どうせあなたは私を下女様に取り扱うつもりでいらつしやるんだから。自分一人さえ好ければ構わないと思つて、……」

健三は座を立った細君の後姿を腹立たしそうに見送つた。彼は論理の権威で自己を伴いっわつてゐる事にはまるで気が付かなかつた。学問の力で鍛え上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底しんぞこから大人しく従い得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

その晩細君は土鍋どなべへ入れた粥かゆをもつて、また健三の枕元まくらもとに坐すわつた。それを茶碗ちやわんに盛りながら、「御起おおきになりませんか」と訊きいた。

彼の舌にはまだ苔こけが一杯生えていた。重苦しいような厚ぼつたいような口の中へ物を入れる気には殆ほとんどなれなかつた。それでも彼は何故なぜだか床の上に起き返つて、細君の手から茶碗を受取ろうとした。しかし舌障したざわりの悪い飯粒いひつぶが、ざらざらと咽喉のどの方へ滑り込んで行くだけなので、彼はたつた一膳ぜんで口を拭ぬぐつたなり、すぐ故もとの通り横になつた。

「まだ食しよつき氣きが出でませんね」

「少しも旨くない」

細君は帯の間から一枚の名刺を出した。

「こういう人が貴方の寐でいらしやるうちに来たんですが、御病気だから断つて帰しました」

健三は寐ながら手を出して、鳥の子紙に刷つたその名刺を受取つて、姓名を読んで見たが、まだ会つた事も聞いた事もない人であつた。

「何時来たのかい」

「たしか一昨日でしたらう。ちよつと御話ししようと思つたんですが、まだ熱が下らないから、わざと黙つていました」

「まるで知らない人だがな」

「でも島田の事でちよつと御主人に御目にかかりたいつて来たんだそうですよ」

細君はとくに島田という二字に力を入れてこういいながら健三の顔を見た。すると彼の頭にこの間途中で会つた帽子を被らない男の影がすぐひらめいた。熱から覚めた彼は、それまでこの男の事を思い出す機会がまるでなかつたのである。

「御前島田の事を知つてるのかい」

「あの長い手紙が御常おつねさんって女から届いた時、貴方が御話しなすつたじゃありませんか」

健三は何とも答えずに一旦下へ置いた名刺をまた取り上げて眺めた。島田の事をその時どれほど詳しく彼女に話したか、それが彼には不確ふたしかであった。

「ありや何時だったかね。よッぽど古い事だろう」

健三はその長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思い出して苦笑した。

「そうね。もう七年位になるでしょう。私あたしたちがまだ千本通りにいた時分ですから」

千本通りというのは、彼らがその頃住んでいた或ある都会の外れにある町の名であった。

細君はしばらくして、「島田の事なら、あなたに伺おまにわないでも、御兄おにいさんからも聞いて知ってますわ」といった。

「兄がどんな事をいったかい」

「どんな事って、——なんでも余あんまり善くない人だっていう話じゃありませんか」

細君はまだその男の事について、健三の心を知りたい様子であった。しかし彼にはまた反対にそれを避けたい意向があった。彼は黙って眼を閉じた。盆に載せた土鍋と茶碗を持って席を立つ前、細君はもう一度こういった。

「その名刺の名前の人はまた来るそうですよ。いずれ御病気が御癒りになつたらまた伺いますからって、帰って行つたそうですから」

健三は仕方なしにまた眼を開いた。

「来るだろう。どうせ島田の代理だと名乗る以上はまた来るに極つてるさ」

「しかしあなた御会いになつて？ もし来たら」

実をいうと彼は会いたくなかつた。細君はなおの事夫をこの変な男に会わせたくなかつた。

「御会いにならない方が好いでしよう」

「会つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三はそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないので考えた。

## 十二

健三の病気は日ならず全快した。活字に眼を曝したり、万年筆を走らせたり、または

腕組をしてただ考えたりする時が再び続くようになった頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄関先に現われた。

健三は鳥の子紙に刷った吉田虎吉という見覚のある名刺を受取って、しばらくそれを眺めていた。細君は小さな声で「御会いになりますか」と訊ねた。

「会うから座敷へ通してくれ」

細君は断りたさそうな顔をして少し躊躇していた。しかし夫の様子を見てとった彼女は、何もいわずにまた書齋を出て行った。

吉田というのは、でっぶり肥った、かっぶくの好い、四十恰好の男であった。縮の羽織を着て、その頃まで流行った白縮緬の兵児帯にぴかぴかする時計の鎖を巻き付けていた。言葉使いから見ても、彼は全くの町人であった。そうかといって、決して堅気の商人とは受取れなかった。「なるほど」というべきところを、わざと「なある」と引張ったり、「御尤も」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いかさま」と答えたりした。

健三には会見の順序として、まず吉田の身元から訊いてかかる必要があった。しかし彼よりは能弁な吉田は、自分の方で聞かれない先に、素性の概略を説明した。

彼はもと高崎たかさきにいた。そうして其所そこにある兵營しゆつにゆうに出入して、糧秣かいばを納めるのが彼の商しょう買ばいであつた。

「そんな関係から、段々將校方の御世話になるようになりまして。その内でも柴野しばのの旦那には特別御贖負ごひいきになつたものですから」

健三は柴野という名を聞いて急に思い出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつた。

「その縁故で島田を御承知なんですな」

二人はしばらくその柴野という士官について話し合つた。彼が今高崎にいない事や、もつと遠くゆたかの西の方へ転任してから幾年目になるといふ事や、相変らずの大酒たいしゆで家計があまり裕ゆたかでないといふ事や、すべてこれらは、健三に取つて耳新たよりらしい報知たよりに違あつかんなかつたが、同時に大した興味を惹ひく話題にもならなかつた。この夫婦に対して何らの悪感あつかんも抱いだいていない健三は、ただそうかと思つて平氣に聞いているだけであつた。しかし話が本筋に入つて、いよいよ島田の事を持ち出された時彼は、自然厭いやな心持がした。

吉田はしきりにこの老人の窮迫の状を訴え始めた。

「人間があまり好過たまたぎるもんですから、つい人に騙だまされてみんな損すつちまうんです。と

でも取れる見込のないのにむやみに金を出してやったり何かするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでしようか。あんまり慾張るからじゃありませんか」

たとい吉田のいう通り老人が困窮しているとしたところで、健三にはこうより外に解積の道はなかった。しかも困窮というからしが既に怪しかった。肝心の代表者たる吉田も強いてその点は弁護しなかった。「あるいはそうかも知れませんが」といったなり、後は笑に紛らしてしまった。そのくせ月々若干か貢いで遣つてくれる訳には行くまいかという相談をすぐその後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の経済事状を打ち明けて、この一面識しかない男に話さなければならなくなった。彼は自己の手に入る百二、三十円の月収が、どう消費されつつあるかを詳しく説明して、月々あとに残るものは零だという事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なある」と「いかさま」を時々使つて、神妙に健三の弁解を聴いた。しかし彼がどこまで彼を信用して、どこから彼を疑い始めているか、その点は健三にも分らなかつた。ただ先方はどこまでも下手に出る手段を主眼としていらっしゃるらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請がましい様子は噫にも出さなかつた。

これで吉田の持つて来た用件の片が付いたものと解釈した健三は、心のうちで暗あんに彼の帰るのを予期した。しかし彼の態度は明らかにこの予期の裏を行った。金の問題にはそれぎり触れなかったが、毒にも薬にもならない世間話を何時までも続けて動かなかった。そうして自然天然話頭わととうをまた島田の身の上に戻して来た。

「どんなものでしょう。老人も取る年で近頃は大変心細そうな事ばかりいつていますが、——どうかして元通りの御交際おつきあいは願えないものでしょうか」

健三はちよつと返答に窮した。仕方なしに黙つて二人の間に置かれた烟草盆タバコぼんを眺めていた。彼の頭のなかには、重たそうに毛繻子けじゅすの洋傘こうもりをさして、異様の瞳を彼の上に据えたその老人の面影がありありと浮かんだ。彼はその人の世話になつた昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に人格の反射から来るその人に対しての嫌悪けんおの情も禁ずる事が出来なかつた。両方の間に板挟みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。

「手前も折角こうして上がったものですから、これだけはどうぞ曲げて御承知を願ひたいもので」

吉田の様子はいよいよ丁寧になった。どう考えても交際つきあひのは厭いやでならなかつた健三は、またどうしてもそれを断ことわるのを不義理と認めなければ済すまなかつた。彼は厭いやでも正しい方に従したがおうと思おもひ極きまめた。

「そういう訳わけなら宜よろしゅう御座ございます。承知むねの旨むじを向むけ伝えて下さい。しかし交際は致いたしても、昔むかしのような関係ではとても出来できませんから、それも誤解ごかいのないように申し伝えして下さい。それから私わたしの今の状況では、私わたしの方かたから時々出掛でかけて行って老人らうじんに慰藉いしげを与えるなんて事は六むずかしいのですが……」

「するとまあただ御出入おでいりをさせて頂くという訳わけになりますな」  
健三には御出入おでいりという言葉ことばを聞きくのが辛つらかつた。そうだともしやないともいいかねて、また口くちを閉しじた。

「いえなにそれで結構けいこうで、——昔むかしと今いまとは事情じやうけいもまるで違ちがいますから」  
吉田は自分の役目やくめが漸おだく済すんだという顔付かほづをしてこういつた後あと、今いままで持もち扱あつていた烟草たばこ入いを腰こしへさしたなり、さつさと歸かへつて行いつた。

健三は彼かれを玄關げんかんまで送り出だすと、すぐ書齋しよさいへ入いつた。その日の仕事しごとを早く片付かたけようという氣きがあるので、いきなり机つくえへ向むかつたが、心のどこかに引懸ひかりが出来できて、なかなか

思う通りに抄取らなかつた。

其所へ細君がちよつと顔を出した。「あなた」と二返ばかり声を掛けたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君がそのまま黙つて引込んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方まで続けた。

平生よりは遅くなつて漸く夕食の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換わした。

「先刻来た吉田つて男は一体何なんですか」と細君が訊いた。

「元高崎で陸軍の用達か何かしていたんだそうだ」と健三が答えた。

問答は固よりそれだけで尽きるはずがなかつた。彼女は吉田と柴野との関係やら、彼と島田との間柄やらについて、自分に納得の行くまで夫から説明を求めようとした。

「どうせ御金か何か呉れていうんでしよう」

「まあそうだ」

「それで貴方どうなすつて、——どうせ御断りになつたでしょうね」

「うん、断つた。断るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分らの家の経済状態を別々に考へた。月々支出している、また支

出しなければならぬ金額は、彼に取つて随分苦しい労力の報酬であると同時に、それで凡てを賄つて行く細君に取つても、少しも裕なものとはいわれなかつた。

#### 十四

健三はそれぎり座を立とうとした。しかし細君にはまだ訊きたい事が残つていた。

「それで素直に帰つて行つたんですか、あの男は。少し変ね」

「だって断られれば仕方がないじゃないか。喧嘩をする訳にも行かないんだから」

「だけど、また来るんでしょう。ああして大人しく帰つて置いて」

「来ても構わないさ」

「でも厭ですわ、蒼蠅くつて」

健三は細君が次の間で先刻の会話を残らず聴いていたものと察した。

「御前聴いてたんだらう、悉皆」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかつた。

「じゃそれで好いじゃないか」

健三はこういったなりまた立つて書齋へ行こうとした。彼は独断家であった。これ以上細君に説明する必要は始めからないものと信じていた。細君もそうした点において夫の権利を認める女であった。けれども表面<sup>おもてむき</sup>夫の権利を認めるだけに、腹の中には何時も不平があった。事々<sup>ことごと</sup>について出て来る権柄<sup>けんべい</sup>ずくな夫の態度は、彼女に取って決して心持の好いものではなかった。何故<sup>なぜ</sup>もう少し打ち解けてくれないのかという気が、絶えず彼女の胸の奥に働らいた。そのくせ夫を打ち解けさせる天分も技倆<sup>ぎりょう</sup>も自分に充分具えていないという事実には全く無頓着<sup>むとんじやく</sup>であった。

「あなた島田と交際<sup>つきあ</sup>つても好いと受合<sup>うま</sup>つていらしたようですね」

「ああ」

健三はそれがどうしたといった風の顔付をした。細君は何時でも此<sup>こ</sup>所<sup>こ</sup>まで来て黙つてしまうのを例にしていた。彼女の性質として、夫がこういう態度に出ると、急に厭気<sup>いやき</sup>がさして、それから先一步<sup>ますます</sup>も前へ出る気になれないのである。その不愛想な様子がまた夫の氣質に反射して、益<sup>ます</sup>彼を権柄<sup>けんべい</sup>ずくにしがちであった。

「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構わなないじゃないか、己<sup>おれ</sup>一人で極め  
たつて」

「そりや私わたくしに対して何も構かまって頂たまかなくつても宜よろござんす。構かまってくれつたつて、どうせ構かまって下さる方かたじゃないんだから、……」

学問をした健三の耳には、細君のいう事がまるで脱線であった。そうしてその脱線はどうしても頭の悪い証拠しやうことしか思われなかった。「また始はじまった」という気が腹の中でした。しかし細君はすぐ当の問題に立ち戻もどつて、彼の注意を惹ひかなければならないような事をいい出した。

「しかし御父さまに悪いでしょう。今になつてあの人と御交際おつきあひになつちやあ」

「御父さまつて己おれのおやじかい」

「無論あな貴方たの御父さまですわ」

「己のおやじはどうに死んだじゃないか」

「しかし御亡おつくなりになる前、島田とは絶交だから、向後こうご一切付合つきあひをしちやならないつて仰おつしやつたそうじゃありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩けんかをして義絶ぎだつした当時の光景をよく覚えていた。しかし彼は自分の父に対してさほど情愛じやうあいの籠こもつた優しい記憶きおくを有もつていなかった。その上絶交ぜつこう云々うんんについても、そう嚴重じやうじやうにいい渡わたされた覚おぼえはなかつた。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話したつもりはないがな」

「貴方じゃありません。御兄おあにいさんに伺ったんです」

細君の返事は健三に取って不思議でも何でもなかった。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を与えなかった。

「おやじは阿爺おやじ、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶するだけの根拠がないんだから」

こういい切った健三は、腹の中でその交際つきあいが厭で厭で堪らないのだという事実を意識した。けれどもその腹の中はまるで細君の胸に映らなかった。彼女はただ自分の夫がまた例の頑固を張り通して、徒らいとずに皆なの意見に反対するのだとばかり考えた。

## 十五

健三は昔その人に手を引かれて歩いた。その人は健三のために小さい洋服を拵こじらえてくれた。大人さえあまり外国の服装に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供ボタンの着るスタイルなどにはまるで頓着とんじやんしなかった。彼の上着には腰のあたりに釦ボタンが二つ並

んでいて、胸は開いたままであった。霜降の羅紗も硬くごわごわして、極めて手触が粗かった。ことに洋袴は薄茶色に豎溝の通った調馬師でなければ穿かないものであった。しかし当時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子もその頃の彼には珍らしかった。浅い鍋底のような形をしたフェルトをすぼりと坊主頭へ頭巾のように被るのが、彼に大した満足を与えた。例の如くその人に手を引かれて、寄席へ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚ろきながら心配そうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫でまわして見た事もあった。

その人はまた彼のために尾の長い金魚をいくつも買つてくれた。武者絵、錦絵、二枚つづき三枚つづきの絵も彼のいうがままに買つてくれた。彼は自分の身体にあう緋緘しの鎧と竜頭の兜さえ持っていた。彼は日に一度位ずつその具足を身に着けて、金紙で拵えた采配を振り舞わした。

彼はまた子供の差す位な短かい脇差の所有者であった。その脇差の目貫は、鼠が赤い唐辛子を引いて行く彫刻で出来上つていた。彼は銀で作つたこの鼠と珊瑚で拵えたこの唐辛子とを、自分の宝物のように大事がつた。彼は時々この脇差が抜いて見たくなつ

た。また何度も抜こうとした。けれども脇差は何時も抜けなかった。——この封建時代の裝飾品もやはりその人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。

彼はまたその人に連れられて、よく船に乗った。船にはきつと腰蓑こしみのを着けた船頭がいて網を打った。いなだの鰯ぼらだのが水際まで来て跳ね躍おどる様が小さな彼の眼に白金しろがねのような光を与えた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕こいで行つて、海鯽かいずというものまで捕った。そういう場合には高い波が来て舟を揺り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。そうして舟の中へ寐ねてしまう事が多かつた。彼の最も面白がつたのは河豚ふぐの網にかかつた時であつた。彼は杉箸すぎばしで河豚の腹をかんから太鼓たいこのように叩たたいて、その膨ふくれたり怒つたりする様子を見て楽しんだ。……

吉田と会見した後の健三の胸には、ふとこうした幼時の記憶が続々湧わいて来る事があつた。凡すべてそれらの記憶は、断片的な割に鮮明あざやかに彼の心に映るものばかりであつた。そうして断片的ではあるが、どれもこれも決してその人と引き離す事は出来なかつた。零碎れいさいの事実を手繰たぐり寄せれば寄せるほど、種が無尽蔵にあるように見えた時、またその無尽蔵にある種の各自おのおののうちには必ず帽子を披かぶらない男の姿が織り込まれているという事を発見した時、彼は苦しんだ。

「こんな光景をよく覚えておくせに、何故自分の有つていたその頃の心が思い出せないのだろう」

これが健三にとって大きな疑問になった。実際彼は幼少の時分これほど世話になった人に対する当時のわが心持というものをまるで忘れてしまった。

「しかしそんな事を忘れるはずがないんだから、ことによると始めからその人に対してだけは、恩義相応の情合が欠けていたのかも知れない」

健三はこうも考えた。のみならず多分この方だろうと自分を解釈した。

彼はこの事件について思い出した幼少の時の記憶を細君に話さなかった。感情に脆い女の事だから、もしそうでもしたら、あるいは彼女の反感を和らげるに都合が好かろうとさえ思わなかった。

## 十六

待ち設けた日がやがて来た。吉田と島田とはある日の午後連れ立って健三の玄関に現れた。

健三はこの昔の人に対してどんな言葉を使つて、どんな応対をして好いか解らなかつた。思慮なしにそれらを極めてくれる自然の衝動が今の彼にはまるで欠けていた。彼は二十余年も会わない人と膝を突き合せながら、大した懐かしみも感じ得ずに、むしろ冷淡に近い受答えばかりしていた。

島田はかねて横風だという評判のある男であつた。健三の兄や姉は単にそれだけでも彼を忌み嫌っている位であつた。実は健三自身も心のうちでそれを恐れていた。今の健三は、単に言葉遣いの末でさえ、こんな男から自尊心を傷けられるには、あまりに高過ぎると、自分を評価していた。

しかし島田は思つたよりも鄭寧であつた。普通初見の人が挨拶に用いる「ですか」とか、「ません」とかいうてには、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないように見えた。健三はむかしその人から健坊々々と呼ばれた幼い時分を思い出した。関係が絶えてからも、会いさえすれば、やはり同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「しかしこの調子なら好いだらう」

健三はそれで、出来るだけ不快の顔を二人に見せまいと力めた。向うもなるべく穏か

に帰るつもりと見えて、少しも健三の気を悪くするような事はいわなかった。それがために、当然双方の間に話題となるべき懐旧談なども殆ど出なかった。従って談話はややともすると途切れがちになった。

健三はふと雨の降った朝の出来事を考えた。

「この間二度ほど途中で御目にかかりましたが、時々あの辺を御通りになるんですか」  
「実はあの高橋の総領の娘が片付いている所がついこの先にあるもんですから」

高橋というのは誰の事だか健三には一向解らなかつた。

「はあ」

「そら知ってるでしょう。あの芝の」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其所の家は何でも神主か坊主だという事を健三は子供心に聞いて覚えているような気もした。しかしその親類の人には、要さんという彼とおない年位な男に二、三遍会ったぎりりで、他のものに顔を合せた記憶はまるでなかつた。

「芝というと、たしか御藤さんの妹さんに当る方の御嫁にいらした所でしたね」

「いえ姉ですよ。妹ではないんです」

「はあ」

「要三だけは死にましたが、あとの姉妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら総領のは、多分知っておいでだろう、——へ行つたんです」

——という名前はなるほど健三に耳新しいものではなかった。しかしそれはもうよほど前に死んだ人であつた。

「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さん叔父さんて重宝がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のように此所の前を通ります」

健三は昔この男につれられて、池の端の本屋で法帖を買ってもらつた事をわれ知らず思い出した。たとい一銭でも二銭でも負けさせなければ物を買つた例のないこの人は、その時も僅か五厘の釣銭を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかった。董其昌の折手本を抱えて傍に佇立んでいる彼に取つてはその態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だろう」

健三はこう考えながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに気

が付かないらしかった。

十七

「でも御蔭さまで、本を遺して行つてくれたもんですから、あの男が亡くなつても、あとはまあ困らないで、どうにかこうにか遣つて行けるんです」

島田は——の作つた書物を世の中の誰でもが知っていなければならぬはずだといった風の口調でこういった。しかし健三は不幸にしてその著書の名前を知らなかつた。字引か教科書だろうとは推察したが、別に訊いて見る気にもならなかつた。

「本というものは実に有難いもので、一つ作つて置くとそれが何時までも売れるんですからね」

健三は黙つていた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るような事をいった。

「御祝儀は済んだが、——が死んだ時後が女だけだもんだから、実は私が本屋に懸け合ひましてね。それで年々いくらと極めて、向うから収めさせるようにしたんです」

「へえ、大したもんですな。なるほどどうも学問をなさる時は、それだけ資金もとでが要るよ  
うで、ちよつと損な気もしますが、さて仕上げで見ると、つまりその方が利廻りの好い  
訳になるんだから、無学のものとはとても敵かないませんな」

「結局得ですよ」

彼らの応対は健三に何の興味も与えなかつた。その上いくら相槌あいつちを打とうにも打たれ  
ないような変な見当へ向いて進んで行くばかりであつた。手持無沙汰な彼は、やむをえ  
ず二人の顔を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

その庭はまた見苦しく手入の届かないものであつた。何時緑をとつたか分らないよう  
な一本の松が、息苦しうに蒼黒い葉あおぐろを垣根の傍そばに茂らしている外ほかに、木らしい木は殆  
どなかつた。箒ほうきに馴染なじまない地面は小石交まじりに凸凹でこぼこしていた。

「こちらの先生も一つ御儲おもうけになつたら如何いかがです」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない訳に行かなかつた。仕方なしに「え  
え儲たくわけたいものですね」といつて跋ぼつを合せた。

「なに訳はないんです。洋行まですりゃ」

これは年寄の言葉であつた。それがあたかも自分で学資でも出して、健三を洋行させ

たように聞こえたので、彼は厭いやな顔をした。しかし老人は一向そんな事に頓着とんじやくする様子も見えなかった。迷惑めいわくそうな健三の体ていを見ても澄すましていた。しまいに吉田が例の烟草タバコ入いれを腰へ差して、「では今日はこれこんにちで御暇おひとまを致いたす事にしましょうか」と催促せいきしたので、彼は漸やうやうく帰る気きになつたらしかつた。

二人を送り出してまたちよつと座敷へ戻つた健三は、再び座蒲団ざぶとんの上に坐つたまま、腕組うでぐみをして考えた。

「一体何のために来たのだろう。これじゃ他ひとを厭いやがらせに来るのと同じ事だ。あれで向むかは面白いのだろうか」

彼の前には先刻さつき島田の持つて来た手土産てみやげがそのまま置いてあつた。彼はぼんやりその粗末そまつな菓子折かしせを眺めた。

何にもいわずに茶碗ちやわんだの烟草盆タバコを片付け始めた細君は、しまいに黙つて坐つている彼の前に立つた。

「あなたまだ其処そこに坐つていらつしやるんですか」

「いやもう立つても好い」

健三はすぐ立上たちあがろうとした。

「あの人たちはまた来るんでしょうか」

「来るかも知れない」

彼はこう言い放ったまま、また書齋へ入った。一しきり箒で座敷を掃く音が聞えた。それが済むと、菓子折を奪り合う子供の声が出た。凡てがやがて静になつたと思う頃、黄昏の空からまた雨が落ちて来た。健三は買おう買おうと思ひながら、ついまだ買わずにいるオヴァーシューの事を思い出した。

十八

雨の降る日が幾日も続いた。それがからりと晴れた時、染付けられたような空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しい思いをして、縫針にばかり氣をとられていた細君は、縁鼻へ出てこの蒼い空を見上げた。それから急に筆筒の抽斗を開けた。彼女が服装を改ためて夫の顔を覗きに来た時、健三は頬杖を突いたまま盆槍汚ない庭を眺めていた。

「あなた何を考えていらつしやるの」

健三はちよつと振り返つて細君の余所行姿を見た。その刹那に爛熟した彼の眼はふとした新らし味を自分の妻の上に見出した。

「どこかへ行くのかい」

「ええ」

細君の答は彼に取つて余りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの佻びしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜しくつて御蒼蠅いでしようから」

その日曜の午後を健三は独り静かに暮らした。

細君の歸つて来たのは、彼が夕飯を済ましてまた書齋へ引き取つた後なので、もう灯が点いてから一、二時間経つていた。

「ただ今」

遅くなりましたとも何ともいわない彼女の無愛嬌が、彼には氣に入らなかつた。彼はちよつと振り向いただけで口を利かなかつた。するとそれがまた細君の心に暗い影を投げる媒介となつた。細君もそのまま立つて茶の間の方へ行つてしまつた。

話をする機会はそれぎり二人の間に絶えた。彼らは顔さえ見れば自然何かいいたくな

るような仲の好い夫婦でもなかった。またそれだけの親しみを現わすには、御互が御互に取ってあまりに陳腐過ぎた。

二、三日経ってから細君は始めてその日外出した折の事を食事の時話題に上せた。

「此間宅へ行ったら、門司の叔父に会いましたね。随分驚ろいしまいました。まだ台湾にいるのかと思ったら、何時の間にか帰って来ていますもの」

門司の叔父というのは油断のならない男として彼らの間に知られていた。健三がまだ地方にいる頃、彼は突然汽車で遣つて来て、急に入用が出来たから、是非とも少し都合してくれまいかと頼むので、健三は地方の銀行に預けて置いた貯金を些少ながら用立てたら、立派に印紙を貼った証文を後から郵便で送つて来た。その中に「但し利子の儀は」という文句まで書き添えてあったので、健三はむしろ堅過ぎる人だと思つたが、貸した金はそれぎり戻つて来なかつた。

「今何をしているのかね」

「何をしているんだか分りやしません。何とかの会社を起すんで、是非健三さんにも賛成してもらいたいから、その内上るつもりだつていつてました」

健三にはその後を訊く必要もなかつた。彼が昔し金を借りられた時分にも、この叔父

は何かの会社を建てているとかいいうので彼はそれを本當にしていた。細君の父もそれを疑わなかった。叔父はその父を旨く説きつけて、門司まで引張って行った。そうしてこれが今建築中の会社だといって、縁もゆかりもない他人の建てている家を見せた。彼は実にこの手段で細君の父から何千かの資本を捲き上げたのである。

健三はこの人についてこれ以上何も知りたがらなかった。細君もいうのが厭らしかった。しかし何時もの通り会話は其所で切れてしまわなかった。

「あの日はあまり好い御天気だったから、久しぶりで御兄さんの所へも廻って来ました」

「そうか」

細君の里は小石川台町で、健三の兄の家は市ヶ谷薬王寺前だから、細君の訪問は大した迂回でもなかった。

## 十九

「御兄さんに島田の来た事を話したら驚ろいていらつしやいましたよ。今更来られた義

理じゃないんだって。健三もあんなものを相手にしなければ好いのにつて」

細君の顔には多少諷諫の意が現われていた。

「それを聞きに、御前わざわざ薬王寺前へ廻ったのかい」

「またそんな皮肉を仰しやる。あなたはどうしてそう他のする事を悪くばかり御取りになるんでしょう。妾あんまり御無沙汰をして済まないと思つたから、ただ帰りにちよつと伺つただけですわ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに交際の義理を立てているようなものなので、いかな健三もこれには苦情をいう余地がなかつた。

「御兄さんは貴夫のために心配していらつしやるんですよ。ああいう人と交際いだし、またどんな面倒が起らないとも限らないからつて」

「面倒つてどんな面倒を指すのかな」

「そりや起つて見なければ、御兄さんにだつて分りつ子ないでしょうけれども、何しろ碌な事はないと思つていらつしやるんでしょう」

碌な事があるうとは健三にも思えなかつた。

「しかし義理が悪いからね」

「だって御金を遣<sup>や</sup>って縁を切った以上、義理の悪い訳はないじゃありませんか」

手切の金は昔し養育料の名前の下<sup>もと</sup>に、健三の父の手から島田に渡されたのである。それはたしか健三が廿二の春であった。

「その上その御金をやる十四、五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅<sup>うち</sup>へ引き取られていらしたんでしょ」

いくつの年からいくつの年まで、彼が全然島田の手で養育されたのか、健三にも判然<sup>はつきり</sup>分らなかつた。

「三つから七つまでですって。御兄<sup>おあにい</sup>さんがそう御仰<sup>おつしや</sup>いましたよ」

「そうかしら」

健三は夢のように消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡<sup>めがね</sup>で見るような細かい絵が沢山出た。けれどもその絵にはどれを見ても日付がついていなかった。

「証文にちゃんとそう書いてあるそうですから大丈夫間違はないでしょう」

彼は自分の離籍に関する書類というものを見た事がなかった。

「見ない訳はないわ。きっと忘れていらつしやるんですよ」

「しかし八ツで宅へ帰ったにしたところで復籍するまでは多少往来もしていたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたという訳でもないんだからね」

細君は口を噤んだ。それが何故だか健三には淋しかった。

「己も実は面白くないんだよ」

「じゃ御止しになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になってあんな人と交際うのは。一体どういう気なんでしょう、先方は」

「それが己には些とも解らない。向でもさぞ詰らないだろうと思うんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思って遣って来たに違いないから、用心しなくっちゃいけないっていつていらつしやいましたよ」

「しかし金は始めから断つちまったんだから、構わないさ」

「だってこれから先何をいい出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初からこうした予感が働らいていた。其所を既に防ぎ止めたとばかり信じていた理に強い健三の頭に、微かな不安がまた新らしく萌した。

その不安は多少彼の仕事の上に即いて廻った。けれども彼の仕事はまたその不安の影をどこかへ埋めてしまふほど忙がしかつた。そうして島田が再び健三の玄関へ現れる前に、月は早くも末になつた。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ会計簿を持って彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を挙げて細君の手に委ねるのを例にしていた健三には、それが意外であつた。彼はいまだかつて月末に細君の手から支出の明細書を突き付けられた例がなかつた。

「まあどうにかしているんだろう」

彼は常にこう考えた。それで自分に金の要る時は遠慮なく細君に請求した。月々買う書物の代価だけでも随分の多額に上る事があつた。それでも細君は澄ましていた。経済に暗い彼は時として細君の放漫をさえ疑つた。

「月々の勘定はちゃんとして己に見せなければいけないぜ」

細君は厭な顔をした。彼女自身からいえば自分ほど忠実な経済家はどこにもいない気なのである。

「ええ」

彼女の返事はこれぎりであった。そうして月末つきすえが来ても会計簿はついに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好い時はそれを黙認した。けれども悪い時は意地になつてわざと見せろと逼せまる事があつた。そのくせ見せられるとごちゃごちゃしてなかなか解らなかつた。たとい帳面づらは細君の説明を聴いて解るにしても、實際月に肴さかなをどれだけ食たものか、または米がどれほど要いつたものか、またそれが高過ぎるのか、安過ぎるのか、更に見当が付かなかつた。

この場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通したただけであつた。

「何か變つた事でもあるのかい」

「どうかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向について詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日きょうまで遣やつて来られたものだね」

「実は毎月まいげつ余らないんです」

余ろうとは健三にも思えなかつた。先月末すえに旧い友達ふるが四、五人でどこかへ遠足に行くとかいので、彼にも勧誘の端書をよこした時、彼は二円の会費がないだけの理由で、同行を断つた覺おぼえもあつた。

「しかしかつかつ位には行きそうなものだがな」

「行っても行かなくつても、これだけの収入で遣つて行くより仕方がないんですけれども」

細君はいい悪そうに、箆笥の抽匣にしまつて置いた自分の着物と帯を質に入れた顛末を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼らの晴着を風呂敷へ包んで、こっそり外へ持つて出たりまた持つて入つたりしたのをよく目撃した。他に知れないように気を配りがちな彼らの態度は、あたかも罪を犯した日影者のように見えて、彼の子供心に淋しい印象を刻み付けた。こうした聯想が今の彼を特更に侘びしく思わせた。

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾を潜つた事のない彼は、自分より貧苦の経験に乏しい彼女が、平気でそんな所へ出入するはずがないと考えた。

「いいえ頼んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆さんです。あすこには通いつけの質屋の帳面があつて便利ですか

ら

健三はその先を訊かなかつた。夫が碌な着物一枚さえ拵えてやらないのに、細君が自分の宅から持つてきたものを質に入れて、家計の足にしなければならぬというのは、夫の恥に相違なかつた。

二十一

健三はもう少し働らこうと決心した。その決心から来る努力が、月々幾枚かの紙幣に変形して、細君の手に渡るようになったのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内隠袋から出して封筒のまま畳の上へ放り出した。黙つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐその紙幣の出所を知つた。家計の不足はかくの如くにして無言のうちに補なわれたのである。

その時細君は別に嬉しい顔もしなかつた。しかしもし夫が優しい言葉に添えて、それを渡してくれたなら、きっと嬉しい顔をする事が出来たろうにと思つた。健三はまたもし細君が嬉しそうにそれを受取つてくれたら優しい言葉も掛けられたろうにと考えた。

それで物質的の要求に応ずべく工面されたこの金は、二人の間に存在する精神上の要求を充たす方便としてはむしろ失敗に帰してしまつた。

細君はその折の物足らなさを回復するために、二、三日経つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵えようと思つんですが、これはどうでしょう」

細君の顔は晴々しく輝やいていた。しかし健三の眼にはそれが下手な技巧を交えているように映つた。彼はその不純を疑がつた。そうしてわざと彼女の愛嬌に誘われまいとした。細君は寒そうに座を立つた。細君の座を立つた後で、彼は何故自分の細君を寒がらせなければならぬ心理状態に自分が制せられたのかと考へて益不愉快になつた。

細君と口を利く次の機会が来た時、彼はこういつた。

「己は決して御前の考へているような冷刻な人間じゃない。ただ自分の有つてゐる温かい情愛を堰き止めて、外へ出られないように仕向けるから、仕方なしにそうするのだ」

「誰もそんな意地の悪い事をする人はいないじゃありませんか」

「御前はしよつちゆうしているじゃないか」

細君は恨めしそうに健三を見た。健三の論理はまるで細君に通じなかつた。

「貴夫あなたの神経は近頃よつぽど変ね。どうしてもつと穩当むだんに私わたしを觀察して下さらないのでしよう」

健三の心には細君の言葉に耳を傾かたむける余裕がなかった。彼は自分に不自然ひじやな冷かさに對して腹立たしいほどの苦痛を感じていた。

「あなたは誰も何にもしないのに、自分一人で苦しんでいらつしやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底するまで話し合う事のついに出来ない男女おんなによのような気がした。従つて二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかつた。

健三の新たに求めた余分の仕事は、彼の学問なり教育なりに取つて、さして困難のもではなかつた。ただ彼はそれに費やす時間と努力とを厭いとつた。無意味に暇を潰つぶすという事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きていゝうちに、何かし終おそせる、またし終おそせなければならぬと考える男であつた。

彼がその余分の仕事を片付けて家に帰るときは何時でも夕暮になつた。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄関の格子を手荒く開けた。すると奥から出て来た細君が彼の顔を見るなり、「あなたあの人がまた来ましたよ」といった。細君

は島田の事を始終あの人あの人と呼んでいたので、健三も彼女の様子と言葉から、留守のうちに誰が来たのかほぼ見当が付いた。彼は無言のまま茶の間へ上<sup>あが</sup>つて、細君に扶<sup>たす</sup>けられながら洋服を和服に改めた。

二十二

彼が火鉢<sup>ひばち</sup>の傍<sup>そば</sup>に坐<sup>すわ</sup>つて、烟草<sup>タバコ</sup>を一本吹かしていると、間もなく夕飯<sup>ゆうめし</sup>の膳<sup>ぜん</sup>が彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上<sup>あが</sup>つたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位この質問は突然であつた。ちよつと驚<sup>おどろ</sup>ろいて健三の顔を見た彼女は、返事を待ち受けている夫の様子から始めてその意味を悟<sup>さと</sup>つた。

「あの人ですか。——でも御留守でしたから」

細君は座敷へ島田を上げなかつたのが、あたかも夫の氣<sup>き</sup>に障<sup>さむ</sup>る事でもしたような調子で、言訳がましい答をした。

「上げなかつたのかい」

「ええ。ただ玄関でちよつと」

「何とかいつていたかい」

「どうに伺うはずだったけれども、少し旅行していたものだから御不沙汰をして済みませんって」

「済みませんという言葉が一種の嘲弄のように健三の耳に響いた。」

「旅行なんぞするのかな、田舎に用のある身体とも思えないが。御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何ともいいませんでした。ただ娘の所で来てくれって頼まれたから行つて来たつていいました。大方あの御縫さんて人の宅なんでしょう」

御縫さんの嫁いた柴野という男には健三もその昔会つた覚があつた。柴野の今の任地先もこの間吉田から聞いて知つていた。それは師団か旅団のある中国辺の或都会であつた。

「軍人なんですか、その御縫さんて人の御嫁に行つた所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間を置いたあとでこんな間を掛けた。

「能く知ってるね」

「何時か御兄さんから伺いましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野と御縫さんの姿を並べて考えた。柴野は肩の張った色の黒い人であったが、眼鼻立からいうとむしろ立派な部類に属すべき男に違なかつた。御縫さんはまたすらりとした恰好の好い女で、顔は面長の色白という出来であつた。ことに美くしいのは睫毛の多い切長のその眼のように思われた。彼らの結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜つた記憶を有つていた。その時柴野は隊から帰つて来た身体を大きくして、長火鉢の猫板の上にある洋盃から冷酒をぐいぐい飲んだ。御縫さんは白い肌をあらわに、鏡台の前で鬢を撫でつけていた。彼はまた自分の分として取り配けられた握り鮓をしきりに皿の中から撮んで食べた。……

「御縫さんて人はよつぽど容色が好いんですか」

「何故」

「だって貴夫の御嫁にするつて話があつたんだそうじゃありませんか」

なるほどそんな話もない事はなかつた。健三がまだ十五、六の時分、ある友達を往来へ待たせて置いて、自分一人ちよつと島田の家へ寄ろうとした時、偶然門前の泥溝に掛

けた小橋の上に立つて往来を眺めていた御縫さんは、ちよつと微笑しながら出合頭の健三に会釈した。それを目撃した彼の友達は独乙語を習い始めの子供であつたので、「フラウ門に倚つて待つ」といつて彼をひやかした。しかし御縫さんは年齒からいうと彼より一つ上であつた。その上その頃の健三は、女に對する美醜の鑑別もなければ好悪も有たなかつた。それから羞恥に似たような一種妙な情緒があつて、女に近寄りたがる彼を、自然の力で、護謨球のように、かえつて女から弾き飛ばした。彼と御縫さんとの結婚は、他に面倒のあるなしを差措いて、到底物にならないものとして放棄されてしまつた。

## 二十三

「貴夫どうしてその御縫さんて人を御貰いにならなかつたの」

健三は膳の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕るかされた人のように。

「まるで問題にやならない。そんな料簡は島田にあつただけなんだから。それに己はまだ子供だつたしね」

「あの人の本当の子じゃないんでしょう」

「無論さ。御縫さんは御藤さんの連れっ子だもの」

御藤さんというのは島田の後妻の名であった。

「だけど、もしその御縫さんて人と一所になっていらしたら、どうでしょう。今頃は」

「どうなってるか判らないじゃないか、なって見なければ」

「でも殊によると、幸福かも知れませぬわね。その方が」

「そうかも知れない」

健三は少し忌々しくなった。細君はそれぎり口を噤んだ。

「何故そんな事を訊くのだい。詰らない」

細君は窘なめられるような気がした。彼女にはそれを乗り越すだけの勇気がなかった。

「どうせ私は始めっから御氣に入らないんだから……」

健三は箸を放り出して、手を頭の中に突込んだ。そうして其所に溜っている雲脂をこしごし落し始めた。

二人はそれなり別々の室へやで別々の仕事をした。健三は御機嫌ようと挨拶あいさつに来た子供の去った後で、例の如く書物を読んだ。細君はその子供を寐ねかした後で、昼の残りの縫物を始めた。

御縫さんの話がまた二人の間の問題になったのは、中一日置いた後あとの事で、それも偶然の切ツ懸けからであった。

その時細君は一枚の端書を持って、健三の部屋へ這入はいって来た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものようにそのまま立ち去ろうともせず、彼の傍そばに腰を卸した。健三が受取った端書を手に持ったなり何時までも読みそうにしないので、我慢しきれなくなつた細君はついに夫を促した。

「あなたその端書は比田ひださんから来たんですよ」

健三は漸ようやく書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出来たんですって」

なるほど端書には島田の事で会いたいからちよつと来てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあった。わざわざ彼を呼び寄せる失礼も鄭寧ていねいに詫わびてあった。

「どうしたんでしょう」

「まるで判明わからないね。相談でもなかりうし。こつちから相談を持ち懸けた事なんかまるでないんだから」

「みんなで交際つきあつちやいけないいつて忠告でもなさるんじやなくつて。御兄おあにいさんもいらつしやると書いてあるでしょう、其所そこに」

端書には細君のいつた通りの事がちゃんと書いてあつた。

兄の名前を見た時、健三の頭にふとまた御縫さんの影が差した。島田が彼とこの女を一所にして、後まで両家の関係をつなごうとした如く、この女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたいような希望を有もつていたらしかつたのである。

「健ちゃんの宅うちとこんな間柄にならないとね。あたしも始終健ちゃんの家うちへ行かれるんだけれども」

御藤さんが健三にこんな事をいつたのも、顧りみれば古い昔であつた。

「だつて御縫さんが今嫁かたづいてる先は元からの許嫁いしなすけなんですよ」

「許嫁でも場合によつたら断る気だつたんだろうよ」

「一体御縫さんはどつちへ行きたかつたんでしょう」

「そんな事が判明わかるもんか」

「じゃ御兄おあにいさんの方はどうなの」

「それも判明らんさ」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の間に応ぜられるような人情がかった材料が一つもなかった。

## 二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答えた。そうして指定の日が来た時、約束通りまた津つの守坂かみざかへ出掛けた。

彼は時間に対して頗すこぶる正確な男であった。一面において愚直に近い彼の性格は、一面においてかえって彼を神経的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寐ねるまで、始終時間に追ひ懸けられているようなものであった。

彼は途々みちみち自分の仕事について考えた。その仕事は決して自分の思い通りに進行していなかった。一步目的へ近付くと、目的はまた一步彼から遠ざかって行つた。

彼はまた彼の細君の事を考えた。その当時強烈であつた彼女の歎ヒステリ私リ的里は、自然と軽

くなつた今でも、彼の胸になお暗い不安の影を投げてやまなかつた。彼はまたその細君の里の事を考えた。経済上の圧迫が家庭を襲おうとしているらしい気配が、船に乗つた時の鈍い動揺を彼の精神に与える種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考えなければならなかつた。凡てが頹廢の影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分を併せて考えなければならなかつた。

姉の家へ来た時、彼の心は沈んでいた。それと反対に彼の気は興奮していた。

「いやどうもわざわざ御呼び立て申して」と比田が挨拶した。これは昔の健三に対する彼の態度ではなかつた。しかし變つて行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たるこの人にだけ優者になり得たという誇りは、健三にとって満足であるよりも、むしろ苦痛であつた。

「ちよつと上がろうにも、どうにもこうにも忙がしくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も実は頼まれたんですけれども、貴方と御約束があるから、断わつてやつとの事で今帰つて来たところで」

比田のいうところを黙つて聴いていると、彼が変な女をその勤先の近所に囲っている

という噂はまるで嘘のようであった。

古風な言葉で形容すれば、ただ算筆に達者だという事の外に、大した学問も才幹もない彼が、今時の会社で、そう重宝がられるはずがないのに。——健三の心にはこんな疑問さえ湧いた。

「姉さんは」

「それに御夏がまた例の喘息でね」

姉は比田のいう通り針箱の上に載せた括り枕に倚りかかって、ぜいぜいいつていた。茶の間を覗きに立った健三の眼に、その乱れた髪の毛がむごたらしく映った。

「どうです」

彼女は頭を真直に上る事さえ叶わないで、小さな顔を横にしたまま健三を見た。挨拶をしようと思う努力が、すぐ咽喉に障ったと見えて、今まで多少落ち付いていた咳嗽の発作が一度に来了。その咳嗽は一つがまだ済まないうちに、後から後から仕切りなしに出て来るので、傍で見えていても気が退けた。

「苦しそうだな」

彼は独り言のようにこう囁やいて、眉を顰めた。

見馴れない四十恰好がっこうの女が、姉うしろの後から脊中せなかを撫なつている傍そばに、一本の杉箸すぎばしを添えた水飴みずあめの入物が盆の上に載せてあった。女は健三に会釈した。

「どうも一昨日おとといからね、あなた」

姉はこうして三日も四日も不眠絶食の姿で衰おとろえて行つたあと、また活作用の弾力で、じりじり元へ戻るのを、年来の習慣としていた。それを知らない健三ではなかったが、目前まのあたりこの猛烈な咳嗽せきと消え入るような呼息遣いきづかいとを見ていると、病気に罹かかつた当人よりも自分の方がかえつて不安で堪たらなくなつた。

「口を利こうとすると咳嗽を誘い出すでしょう。静かにしていらっしゃい。私わたしはあつちへ行くから」

発作の一仕切収まつた時、健三はこういつて、またもとの座敷へ歸つた。

## 二十五

比田は平気な顔をして本を読んでいた。「いえなにまた例の持病ですから」といつて、健三の慰問にはまるで取り合あわなかつた。同じ事を年に何度となく繰り返して行く

うちに、自然と末枯れて来る気の毒な女房の姿は、この男にとって毫も感傷の種にならないように見えた。実際彼は三十年近くも同棲して来た彼の妻に、ただの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であった。

健三の這入って来るのを見た彼は、すぐ読み懸けの本を伏せて、鉄縁の眼鏡を外した。

「今ちよつと貴方が茶の間へ行っていていらした間に、下らないものを読み出したんです」

比田と読書——これはまた極めて似つかわしくない取合わせであった。

「何ですか、それは」

「なに健ちゃんなんぞの読むもんじゃありません、古いもんで」

比田は笑いながら、机の上に伏せた本を取って健三に渡した。それが意外にも『常山紀談』だったので健三は少し驚ろいた。それにしても自分の細君が今にも絶息しそうな勢で咳き込んでいるのを、まるで余所事のように聴いて、こんなものを平気で読んでいられるところが、如何にも能くこの男の性質をあらわしていた。

「私や旧弊だからこういう古い講談物が好きでしてね」

彼は『常山紀談』を普通の講談物と思つてゐるらしかった。しかしそれを書いた湯浅常山ようせんを講釈師と間違えるほどでもなかつた。

「やッぱり学者なんでしょうね、その男は。曲亭馬琴きよくていばきんとどっちでしょう。私や馬琴の『八犬伝』も持つてゐるんだが」

なるほど彼は桐の本箱の中に、日本紙へ活版で刷つた予約の『八犬伝』を綺麗きれいに重ね込んでいた。

「健ちゃんは『江戸名所図絵』を御持ちですか」

「いいえ」

「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げましょうか。なにしろ江戸といつた昔の日本橋にほんばしや桜田さくらだがすっかり分るんだからね」

彼は床の間の上にある別の本箱の中から、美濃紙版みのがみの浅黄あさぎの表紙をした古い本を一、二冊取り出した。そうしてあたかも健三を『江戸名所図絵』の名さえ聞いた事のない男のように取扱つた。その健三には子供の時分その本を蔵くらから引き摺ずり出して来て、頁ページから頁へと丹念に挿絵さしえを拾つて見て行くのが、何よりの楽しみであつた時代の、懐かしい記憶があつた。中にも駿河町するがちようという所に描かいてある越後屋えちじやの暖簾のれんと富士山とが、彼の記憶

を今代表する焼点しやうてんとなった。

「この分ではとてもその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接関係のない本などを読んでいる暇は、薬にしたくつても出て来こない」

健三は心のうちでこう考えた。ただ焦燥あせりに焦燥あせりってばかりいる今の自分が、恨めしくもありまた気の毒でもあった。

兄が約束の時間までに顔を出さないの、比田はその間を繋つなぐためか、しきりに書物の話をつづけようとした。書物の事なら何時いづまで話していても、健三にとって迷惑にならないという自信でも持っているように見えた。不幸にして彼の知識は、『常山紀談』を普通の講談ものとして考える程度であった。それでも彼は昔し出た『風俗画報』を一冊残とらず綴とじて持っていた。

本の話が尽きた時、彼は仕方なしに問題を変えた。

「もう来そうなもんですね、長ちやうさんも。あれほどいつてあるんだから忘れるはずはないんだが。それに今日は明けの日だから、遅くとも十一時頃までには帰らなきやならないんだから。何むかならちよつと迎むかいに遣やりましようか」

この時また変化が来たと見えて、火の着くように咳き入る姉の声が茶の間の方で聞こ

えた。

二十六

やがて門口かどぐちの格子こうしを開けて、沓脱くつぬぎへ下駄げだを脱ぐ音がした。

「やつと来たようですぜ」と比田ひだがいった。

しかし玄関を通り抜けたその足音はすぐ茶の間へ這入はいった。

「また悪いの。驚ろいた。ちつとも知らなかった。何時いつから」

短かい言葉が感投詞かんとうしのようにまた質問しつもんのように、座敷ざしきに坐すわっている二人の耳に響いた。その声は比田の推察すいさつ通りやつぱり健三けんぞうの兄であった。

「長さん、先刻さつきから待つてるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から声を掛けた。女房にようばうの喘息ぜんそくなどはどうなつても構わないといった風のその調子ていしが、如何いかにもこの男の特性をよく現わしていた。「本当に手前勝手な人だ」とみんなからいわれるだけあって、彼はこの場合にも、自分の都合より外に何にも考えていないように見えた。

「今行きますよ」

長太郎も少し癩だと見えて、なかなか茶の間から出て来なかった。

「重湯でも少し飲んだら好いでしょう。厭？でもそう何にも食べなくつちや身体が疲れるだけだから」

姉が息苦しくつて、受答えが出来かねるので、脊中を撫っていた女が一口ごとに適宜な挨拶をした。平生健三よりは親しくその宅へ出入する兄は、見馴れないこの女とも近付と見えた。そのせいか彼らの応対は容易に尽きなかった。

比田はぷりつと膨れていた。朝起きて顔を洗う時のように、両手で黒い顔をごしごし擦った。しまいに健三の方を向いて、小さな声でこんな事をいった。

「健ちゃんあれだから困るんですよ。口ばかり多くってね。こつちも手がなから仕方なしに頼むんだが」

比田の非難は明らかに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」

「そら梳手の御勢ですよ。昔し健ちゃんの遊びに来る時分、よくいたじゃありませんか、宅に」

「へええ」

健三には比田の家でそんな女に会った覚が全くなかった。

「知りませんね」

「なに知らない事があるもんですか、御勢だもの。あいつはね、御承知の通りまことに親切で実意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋舌るのが病なんだから」  
よく事情を知らない健三には、比田のいう事が、ただ自分だけに都合のいい誇張のよ  
うに聞こえるばかりで、大した感銘も与えなかつた。

姉はまた咳き出した。その発作が一段落片付くまでは、さすがの比田も黙っていた。  
長太郎も茶の間を出て来なかつた。

「何だか先刻より劇しいようですね」

少し不安になつた健三は、そういいながら席を立とうとした。比田は一も二もなく留  
めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見るとちよつ  
と吃驚しますがね。私なんざあもう年来馴れっ子になつてから平気なもんですよ。実  
際またあれを一々苦にしているようじゃ、とても今日まで一所に住んでる事は出来ませ

んからね」

健三は何とも答える訳に行かなかつた。ただ腹の中で、自分の細君が歇私的里ヒステリックの発作に冒された時の苦しい心持を、自然の対照として描き出した。

姉の咳嗽せきが一収りひとつかひ収った時、長太郎は始めて座敷へ顔を出した。

「どうも済みません。もつと早く来るはずだったが、生憎あいにく珍らしく客があつたもんだから」

「来たか長さん待つてたほい。冗談じゃないよ。使でも出そうかと思つてたところで」

比田は健三の兄に向つてこの位な気安い口調で話の出来る地位にあつた。

## 二十七

三人はすぐ用談に取り掛つた。比田ひだが最初に口を開いた。

彼はちよつとした相談事にも仔細しさいぶる男であつた。そうして仔細しさいぶればぶるほど、自分の存在が周囲から強く認められると考えているらしかつた。「比田さん比田さん」

て、立てて置きさえすりゃ好いんだ」と皆なが蔭で笑っていた。

「時に長さんどうしたもんだろう」

「そう」

「どうもこりゃ天から筋が違うんだから、健ちゃんに話をするまでもなからうと思うんだがね、私わたしゃ」

「そうさ。今更そんな事を持ち出して来たって、こつちで取り合う必要もないだろうじゃないか」

「だから私も突つ跳ねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、まるで自分の殺した子供を、もう一返生べんかしてくれって、御寺様へ頼みに行くようなものだから御止およしなさいって。だけど大將いくら何といっても、坐り込んで動いじかないんだからね、仕方がない。しかしあの男がああやって今頃私の宅うちへのんこのしゃあで遣やつて来るのも、実はと  
いうと、やつぱり昔し○の關係れいがあつたからの事さ。だつてそりゃ昔しも昔し、ずっと昔しの話でさあ。その上ただで借りやしましね、……」

「またただで貸す風でもなしね」

「そうさ。口じゃ親類付合だとか何とかいつてくるくせに、金にかけちゃあかの他人より

阿漕あこぎなんだから」

「来た時にそういつて遣れば好いのに」

比田と兄との談話はなかなか元へ戻つて来なかつた。ことに比田は其所そこに健三のいるのさえ忘れてしまったように見えた。健三は好加減いかげんに何とか口を出さなければならなくなつた。

「一体どうしたんです。島田がこちらへでも突然伺つたんですか」

「いやわざわざ御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋舌しゃべつて済みません。

——じゃ長さん私から健ちゃんに一応その顛末てんまつを御話しする事にしようか」

「ええどうぞ」

話しは意外にも単純であつた。——ある日島田が突然比田の所へ来た。自分も年を取つて頼りにするものがないので心細いという理由もとの下に、昔し通り島田姓に復帰してもらいたいからどうぞ健三にそう取り次いでくれと頼んだ。比田もその要求の突飛とつびなのに驚ろいて最初は拒絶した。しかし何といつても動かないので、ともかくも彼の希望だけは健三に通じようと受合つた。——ただこれだけなのである。

「少し変ですねえ」

健三にはどう考えても変としか思われなかった。

「変だよ」

兄も同じ意見を言葉にあらわした。

「どうせ変にや違ない、何しろ六十以上になって、少しやきが廻ってるからね」

「慾よくでやきが廻りやしないか」

比田も兄も可笑おかしそうに笑ったが、健三は独りその仲間へ入る事が出来なかった。彼は何時まで変だと思ふ気分おんに制せられていた。彼の頭から判断すると、そんな事は到底ありようはずがなかった。彼は最初に吉田が来た時の談話を思い出した。次に吉田と島田が一所に来た時の光景を思い出した。最後に彼の留守に旅先から帰ったといつて、島田が一人で訪ねて来た時の言葉を思い出した。しかしどこをどう思い出しても、其所そこからこんな結果が生れて来ようとは考えられなかった。

「どうしても変ですな」

彼は自分のために同じ言葉をもう一度繰り返して見た。それから漸やっと気を換えてこういった。

「しかしそりや問題にやならないでしょう。ただ断りさえすりゃ好いんだから」

健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合わなかった。従つてそれを片付けるのも容易であつた。ただ簡単に断りさえすれば済んだ。

「しかし一旦は貴方あなたの御耳まで入れて置かないと、私の落度わたくしになりますからね」と比田は自分を弁護するようにいつた。彼はどこまでもこの会合を真面目まじめなものにしなければ気が済まないらしかった。それで言う事も時によつて変化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違えば何をするか分らないんだから、用心しなくつちやいけませんよ」

「焼が廻つてるなら構わないじゃないか」と兄が冗談半分に彼の矛盾を指摘すると、比田はなお真面目になつた。

「焼が廻つてるから怖いんです。なに先が当り前の人間なら、私わたしだつてその場ですぐ断つちまいますあ」

こんな曲折は会談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり比田が代表者として島田の要求を断るといふ事になつた。それは三人が三人ながら始めから予期し

ていた結局なので、其所へ行き着くまでの筋道は、健三から見ると、むしろ時間の空費に過ぎなかった。しかし彼はそれに対して比田に礼を述べる義理があった。

「いえ何御礼なんぞ御仰られると恐縮します」といった比田の方はかえって得意であった。誰が見ても宅へも帰らずに忙がしがっている人の様子とは受取れないほど、調子づいて来た。

彼は其所にある塩煎餅を取ってやたらにぼりぼり噛んだ。そうしてその相間々々には大きな湯呑へ茶を何杯も注ぎ易えて飲んだ。

「相変らず能く食べますね。今でも鰻飯を二つ位遣るんでしよう」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちゃんの見ている前で天ぷら蕎麦を五杯位ぺろりと片付けたもんでしたかね」

比田はその頃から食気の強い男であった。そうして余計食うのを自慢にしていた。それから腹の太いのを賞められたがって、時機さえあれば始終叩いて見せた。

健三は昔しこの人に連れられて寄席などに行つた帰りに、能く二人して屋台店の暖簾を潜って、鮓や天麩羅の立食をした当時を思い出した。彼は健三にその寄席で聴いたし、かおどりとかいう三味線の手を教えたり、またはさばを読むという隠語などを習い覚え

させたりした。

「どうもやっぱり立食に限るようですね。私もこの年になるまで、段々方々食って歩いて見たが。健ちゃん、一遍軽井沢で蕎麦を食って御覧なさい、騙されたと思つて。汽車の停つてるうちに、降りて食うんです、プラットフォームの上へ立つてね。さすが本場だけあつて旨うがすぜ」

彼は信心を名として能く方々遊び廻る男であつた。

「それよか、善光寺の境内に元祖藤八拳指南所という看板が懸つていたには驚ろいたね、長さん」

「這入つて一つ遣つて来やしないか」

「だつて束修が要るんだからね、君」

こんな談話を聞いていると、健三も何時か昔の我に帰つたような心持になつた。同時に今の自分が、どんな意味で彼らから離れてどこに立つているかも明らかに意識しなければならなくなつた。しかし比田は一向そこに気が付かなかつた。

「健ちゃんはたしか京都へ行つた事がありますね。彼所に、ちんちらでんき皿持てこ汁飲ましょつて鳴く鳥がいるのを御存じですか」などと訊いた。

先刻さつきから落付おちついていた姉が、また劇はげしく咳せき出した時、彼は漸ようやく口を閉じた。そうしてさもなくさくさしたといわぬばかりに、左右の手の平を揃そろえて、黒い顔をこすごしごし擦こすつた。

兄と健三はちよつと茶の間の様子を覗のぞきに立つた。二人とも発作の静まるまで姉の枕元すわに坐すわっていた後で、別々に比田の家を出た。

## 二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控えている事を遂に忘れることが出来なくなつた。

この世界は平生へいぜいの彼にとつて遠い過去のものであつた。しかしいざという場合には、突然現在に変化しなければならぬ性質を帯びていた。

彼の頭には願仁坊主がんにんぼうずに似た比田の毬栗頭いかりあたまが浮いたり沈んだりした。猫のように顎あごの詰つつた姉の息苦しく喘あえいでいる姿が薄暗く見えた。血の氣の竭つきかけた兄に特有なひすばった長い顔も出たり引込ひっこんだりした。

昔しこの世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から独り脱け出してし

まった。そうして脱け出したまま永く東京の地を踏まなかった。彼は今再びその中へ後戻りをして、久しぶりに過去の臭を嗅いだ。それは彼に取って、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭らしさとを齎す混合物であった。

彼はまたその世界とはまるで関係のない方角を眺めた。すると其所には時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有った青年がいた。彼はその人々の笑いに耳を傾むけた。未来の希望を打ち出す鐘のように朗かなその響が、健三の暗い心を躍らした。

或日彼はその青年の一人に誘われて、池の端を散歩した帰りに、広小路から切通しへ抜ける道を曲った。彼らが新らしく建てられた見番の前へ来た時、健三はふと思ひ出したように青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分とまるで縁故のない或女の事が閃いた。その女は昔し芸者をしていた頃人を殺した罪で、二十年余も牢屋の中で暗い月日を送った後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るようになったのである。

「さぞ辛いだろう」

容色を生命とする女の身になったら、殆んど堪えられない淋しみが其所にあるに違ないと健三は考えた。しかしいくらでも春が永く自分の前に続いているとしか思わない伴

の青年には、彼の言葉が何ほどの効果にもならなかった。この青年はまだ二十三、四であった。彼は始めて自分と青年との距離を悟って驚ろいた。

「そういう自分もやっぱりこの芸者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分にこういい渡した。若い時から白髪が生えたる性質の彼の頭には、気のせいかな頃めつきり白い筋が増えて来た。自分はまだまだだと思つているうちに、十年は何時の間にか過ぎた。

「しかし他事じゃないね君。その実僕も青春時代を全く牢獄の裡で暮したのだから」  
青年は驚ろいた顔をした。

「牢獄とは何です」

「学校さ、それから図書館さ。考えると両方ともまあ牢獄のようなものだね」

青年は答えなかった。

「しかし僕がもし長い間の牢獄生活をつづけなければ、今日の僕は決して世の中に存在していないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば弁解的であった。半ば自嘲的であった。過去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、その現在の自分の上に、是非とも未来の自分を築き上げなけ

ればならなかった。それが彼の方針であった。そうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれどもその方針によつて前へ進んで行くのが、この時の彼には徒らに老ゆるという結果より外に何物をも持ち来さないように見えた。

「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」

「そんな事はありません」

彼の意味はついに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚当時の自分と、どんなに變つて、細君の眼に映るだろうかを考えながら歩いた。その細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪の毛なども氣の引けるほど抜ける事があつた。そうして今は既に三番目の子を胎内に宿していた。

### 三十

家へ帰ると細君は奥の六畳に手枕をしたなり寐ていた。健三はその傍に散らばつてゐる赤い片端だの物指だの針箱だのを見て、またかという顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出し

てからまた横になる日も少なくなはなかつた。こうしてあくまで眠りを貪むさばらないと、頭が痺しびれたようになって、その日一日何事をしてても判然はつきりしないというのが、常に彼女の弁解であつた。健三はあるいはそうかも知れないと思つたり、またはそんな事があるものかと考えたりした。ことに小言こごとをいつたあとで、寐ねられるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞ふてね寐ねをするんだ」

彼は自分の小言こごとが、歇私ヒステリー的里性しりせうの細君こまぎみに対して、どう反応するかを、よく観察してやる代りに、単なる面当つらあてのために、こうした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釈して、苦々くさしい囁つぶやきを口の内くちのちで洩もらす事がよくあつた。

「何故なぜ夜早く寐ねないんだ」

彼女は宵よつ張はであつた。健三にこういわれる度に、夜は眼まなこが冴さえて寐ねられないから起きているのだという答弁こたへをきつとした。そうして自分の起きていたい時までには必ず起きて縫物ぬいものの手をやめなかつた。

健三はこうした細君こまぎみの態度を悪にくんだ。同時に彼女の歇私ヒステリー的里性しりせうを恐れた。それからもしや自分の解釈が間違まちがつていはしまいかという不安にも制させられた。

彼は其所そこに立つたまま、しばらく細君の寐顔を見詰めていた。肱ひじの上に載せられたその横顔はむしろ蒼白あおしろかった。彼は黙もくって立たっていた。御住おすみという名前さえ呼ばなかつた。

彼はふと眼を転じて、あらわな白い腕かひなの傍に放り出された一束ひとたばの書物かきものに気を付けた。それは普通の手紙の重なり合ったものでもなければ、また新らしい印刷物を一纏ひとまとめに括くくつたものとも見えなかつた。惣体そうたいが茶色がかつて既に多少の時代を帯びている上に、古風なかんじん撚よりで丁寧な結び目がしてあつた。その書もの一端は、殆ほとんど細君の頭の下に敷かれていと思われれる位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮おほぎつていた。

彼はわざわざそれを引き出して見る気にもならず、また眼を蒼白あおしろい細君の額ひたいの上に注ついだ。彼女の頬ほおは滑り落ちるようにこけていた。

「まあ御瘦おやせなすつた事」

久しぶりに彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚ろいたように、こんな評を加えた事があつた。その時健三は何故なぜだかこの細君を瘦すくせさせた凡すべての源因が自分一人にあるような心持がした。

彼は書齋に入いつた。

三十分も経つたと思う頃、門口かどぐちを開ける音がして、二人の子供が外から帰つて来た。坐すわっている健三の耳には、彼らと子守との問答が手に取るように聞こえた。子供はやがて馳かけ込むように奥へ入った。其所ではまた細君が蒼蠅うるさいといつて、彼らを叱しかる声が出た。

それからしばらくして細君は先刻さつき自分の枕元にあつた一束の書ものを手に持つたまま、健三の前にあらわれた。

「先ほど御留守に御兄おにいさんがいらつしやいましたね」

健三は万年筆の手を止めて、細君の顔を見た。

「もう帰つたのかい」

「ええ。今ちよつと散歩に出掛ましたから、もうじき帰りましようつて御止めしたんですけれども、時間がなからつて御上おあがりになりませんでした」

「そうか」

「何でも谷中やなかに御友達とかの御葬式があるんですつて。それで急いで行かないと間に合わないから、上つていられないんだと仰おつしやいました。しかし帰りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、帰つたら待つてるようにいつてくれつて、いい置いて

いらつしやいました」

「何の用なのかね」

「やっぱりあの人の事なんだそうです」

兄は島田の事で来たのであった。

三十一

細君は手に持った書付かきつけの束を健三の前に出した。

「これを貴夫あなたに上げてくれと仰おつしやいました」

健三は怪訝けげんな顔をしてそれを受取った。

「何だい」

「みんなあの人に関係した書類なんだそうです。健三に見せたら参考になるだろうと  
思つて、用筆筒ようだんすの抽匣ひきだしの中にしまつて置いたのを、今日出きようして持つて来たつて仰おつしいま  
した」

「そんな書類があつたのかしら」

彼は細君から受取った一括りの書付を手に載せたまま、ぼんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何も意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにしてほぼ二寸もあつたが、風の通らない湿気た所に長い間放り込んであつたせい、虫に食われた一筋の痕が偶然健三の眼を懐古的にした。彼はその不規則な筋を指の先でざらざら撫でて見た。けれども今更鄭寧に絡げたかんじん撚の結び目を解いて、一々中を検ためる気も起らなかつた。

「開けて見たつて何が出て来るものか」

彼の心はこの一句でよく代表されていた。

「御父さまが後々のためにちゃんと一纏めにして取つて御置になつたんですつて」

「そうか」

健三は自分の父の分別と理解力に対して大した尊敬を払つていなかった。

「おやじの事だからきつと何でもかんでも取つて置いたんだらう」

「しかしそれもみんな貴夫に対する御親切からなんでしょう。あんな奴だから己のいなくなつた後に、どんな事をいつて来ないとも限らない、その時にはこれが役に立つつて、わざわざ一纏めにして、御兄さんに御渡になつたんだそうですよ」

「そうかね、己は知らない」

健三の父は中気で死んだ。その父のまだ達者でいるずっと前から、彼はもう東京にいなかった。彼は親の死目にさえ会わなかった。こんな書付が自分の眼に触れないで、長い間兄の手元に保管されていたのも、別段の不思議ではなかった。

彼は漸やく書類の結目を解いて一所に重なっているものを、一々ほごし始めた。手続き書と書いたものや、取り替え一札の事と書いたものや、明治二十一年子一月約定金請取の証と書いた半紙二つ折の帳面やらが順々にあらわれて来た。その帳面のしまいは、右本日受取右月賦金は皆済相成候事と島田の手蹟で書いて黒い判がべたりと捺してあった。

「おやじは月々三円か四円ずつ取られたんだな」

「あの人にですか」

細君はその帳面を逆さまに覗き込んでいた。

「ズていくらになるかしら。しかしこの外にまだ一時に遣ったものがあるはずだ。おやじの事だから、きっとその受取を取って置いたに違ない。どこかにあるだろう」

書付はそれからそれへと続々出て来た。けれども、健三の眼にはどれもこれもごちや

ごちゃして容易に解らなかつた。彼はやがて四つ折にして一纏めに重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小学校の卒業証書まで入れてある」

その小学校の名は時によつて變つていた。一番古いものには第一大学区第五中学区第八番小学などという朱印が押してあつた。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまつた」

「よつぽど古いものね」

証書のうちには賞状も二、三枚交つていた。昇り竜と降り竜で丸い輪廓を取つた真中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に断つてあつた。

「書物も貰つた事があるんだがな」

彼は『勸善訓蒙』だの『輿地誌略』だのを抱いて喜びの余り飛んで宅へ歸つた昔を思い出した。御褒美をもらう前の晩夢に見た蒼い竜と白い虎の事も思い出した。これらの遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。

細君にはこの古臭い免状がなおの事珍らしかつた。夫の一旦下へ置いたのをまた取り上げて、一枚々々鄭寧に剥繰つて見た。

「変ですわね。下等小学第五級だの六級だのつて。そんなものがあつたんでしようか」  
「あつたんだね」

健三はそのまま外の書付に手を着けた。読みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「これを御覧、とても読む勇氣がないね。ただでさえ判明らないところへ持つて来て、むやみに朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合について必要な下書らしいものが細君の手に渡された。細君は女だけあつて、綿密にそれを読み下した。

「貴夫の御父さまはあの島田つて人の世話をなすつた事があるのね」

「そんな話は己も聞いてはいるが」

「此所に書いてありますよ。——同人幼少にて勤向相成りがたく当方へ引き取り五カ年

間養育致候縁合を以てと」

細君の読み上げる文章は、まるで旧幕時代の町人が町奉行か何かへ出す訴状のように聞こえた。その口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴した。その父から、將軍の鷹狩たかがりに行く時の模様などを、それ相当の敬語で聞かされた昔も思い合された。しかし事実の興味が主として働らきかけている細君の方ではまるで文体などに頓着とんじやくしなかった。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣られたのね。此所にそう書いてありますよ」  
健三は因果な自分を自分で憐れんだ。平気な細君はその続きを読み出した。

「右健三三歳のみぎり養子に差遣し置候処平吉儀妻常と不和を生じ、遂に離別と相成候につき当時八歳の健三を当方へ引き取り今日まで十四力年間養育致し、——あとは真赤まっかでござちやござちやして読めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を読もうと企てた。健三は腕組をして黙って待っていた。細君はやがてくすくす笑い出した。

「何が可笑しいんだ」

「だって」

細君は何にもいわずに、書付を夫の方に向け直した。そうして人さし指の頭で、細かく割註わりちゅうのように朱で書いた所を抑えた。

「ちよつと其所そこを読んで御覧なさい」

健三は八の字を寄せながら、その一行を六むずかしそうに読み下した。

「取扱とい所勤務中遠山藤とと申ます後家ごけへ通とじ合あい候さうろうが事の起り。――何だ下らない」

「しかし本当なんでしょう」

「本当は本当さ」

「それが貴夫の八ツの時なのね。それから貴夫は御自分の宅うちへ御帰りになつた訳ね」

「しかし籍を返さないんだ」

「あの人が？」

細君はまたその書付を取り上げた。読めない所はそのままにして置いて、読める所だけ眼を通して、自分のまだ知らない事実が出て来るだろうという興味が、少なからず彼女の好奇心を唆そそつた。

書付のしまいの方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて実家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印形いんぎょうを濫用らんようして金を借り散らした例などが挙げ

てあった。

いよいよ手を切る時に養育料として島田に渡した金の証文も出て来た。それには、かかる上は健三離縁本籍と引替に当金——円御渡し被下、くだされ残金——円は毎月三十日限り月賦にて御差入のつもり御対談云々と長たらしく書いてあった。

「凡て変挺な文句ばかりだね」

「親類取扱人比田寅八ひだとらはちつて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでしよう」

健三はついこの間会った比田の万事に心得顔な様子と、この証文の文句とを引き比べて見た。

### 三十三

葬式の帰りに寄るかも知れないといった兄は遂に顔を見せなかった。

「あんまり遅くなったから、すぐ御帰りになったんでしよう」

健三にはその方が便宜であった。彼の仕事は前の日か前の晩を潰して調べたり考えた

りしなければ義務を果す事の出来ない性質のものであった。従つて必要な時間を他に食  
い削られるのは、彼に取つて甚しい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏めにして、元のかんじん擦で括ろうとした。彼  
が指先に力を入れた時、そのかんじん擦はぶつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だつて書付の方は虫が食つてる位ですもの、貴夫」

「そういえばそうかも知れない。何しろ抽斗に投げ込んだなり、今日まで放つて置いた  
んだから。しかし兄貴も能くまあこんなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも  
売るくせに」

細君は健三の顔を見て笑い出した。

「誰も買ひ手がないでしょう。そんな虫の食つた紙なんか」

「だがさ。能く紙屑籠の中へ入れてしまわなかつたという事さ」

細君は赤と白で擦つた細い糸を火鉢の抽斗から出して来て、其所に置かれた書類を新  
らしく絡げた上、それを夫に渡した。

「己おれの方にやしまつて置く所がないよ」

彼の周囲は書物で一杯になっていた。手文庫には文ふみ殻からとノートがぎつしり詰っていた。空地くうちのあるのは夜具蒲団やぐふとんのしまつてある一けん間の戸棚だけであった。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄おにいさんは二、三日うちきつとまたいらつしやいますよ」

「あの事ことでかい」

「それもそうですけれども、今日御葬式きようにいらつしやる時に、袴はかまが要いるから借してくれて、此所ここで穿はいていらしたんですもの。きつとまた返しにいらつしやるに極きまつていますわ」

健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、ちよつと考えさせられた。始めて学校を卒業した時彼はその兄から貰もらつたべろの薄羽織うすばおりを着て友達と一所に池いけの端はたで写真を撮つた事をまだ覚えていた。その友達の一人いちにんが健三に向つて、この中で一番先に馬車へ乗るものは誰たれだろうといった時に、彼は返事をしないで、ただ自分の着ている羽織さびを淋さびしそうに眺めた。その羽織は古い縞ろの紋付に違なかつたが、悪くいえば申し訳のために破けずにいる位な見すばらしい程度のものであった。懇意な友人の

新婚披露ひろうに招かれて星が岡ほしおかの茶寮さりように行つた時も、着るものがないので、袴羽織すべとも凡て兄のを借りて間に合せた事もあつた。

彼は細君の知らないこんな記憶を頭の中に呼び起した。しかしそれは今の彼を得意にするよりもかえつて悲しくした。今昔こんじやくの感——そういう在来あききたりの言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧わいた。

「袴位ありそうなものだがね」

「みんな長い間に失くして御しまいなすつたんでしよう」

「困るなあ」

「どうせ宅うちにあるんだから、要る時に貸して上げさいすりやそれで好いいでしょう。毎日使うものじゃなし」

「宅にある間はそれで好いいがね」

細君は夫に内所ないしょで自分の着物を質に入れたついでこの間の事件を思い出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陥らないものでもないという悲観的な哲学があつた。

昔の彼は貧しいながら一人で世の中に立っていた。今の彼は切り詰めた余裕のない生活をしている上に、周囲のものからは、活力の心棒のように思われていた。それが彼に

は辛なまけかった。自分のようなものが親類中で一番好くなっていると考えられるのはなおさら情なさけなかつた。

### 三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の真中にある或ある大きな局へ勤めていた。その宏こ壯そうな建物のなかに永い間憐あわれな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。「僕なんぞはもう老朽らうきうなんだからね。何しろ若くつて役に立つ人が後から後からと出て来るんだから」

その建物のなかには何百という人間が日となく夜よとなく烈はげしく働らいていた。気力の尽きかけた彼の存在はまるで形のない影のようなものに違なかつた。

「ああ厭いやだ」

活動を好まない彼の頭には常にこんな観念が潜んでいた。彼は病身であつた。年齒としより早く老けた。年齒より早く干乾ひからびた。そうして色沢いろつやの悪い顔をしながら、死ににでも行く人のように働いた。

「何しろ夜寐ないんだから、身体に障ってね」

彼はよく風邪を引いて咳嗽をした。ある時は熱も出た。するとその熱が必ず肺病の前兆でなければならぬように彼を脅かした。

實際彼の職業は強壯な青年にとつても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。そうして夜通し起きて働らかなければならなかつた。翌日の朝彼はぼんやりして自分の宅へ歸つて来た。その日一日は何をする勇氣もなく、ただぐたりと寐て暮らす事さえあつた。

それでも彼は自分のためまた家族のために働らくべく余儀なくされた。

「今度は少し危険いようだから、誰かに頼んでくれないか」

改革とか整理とかいう噂のあるたびに、健三はよくこんな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れている時などは、わざわざ手紙で依頼して来た事も一返や二返ではなかつた。彼はその都度誰それにといつて、わざわざ要路の人を指名した。しかし健三にはただ名前が知れているだけで、自分の兄の位置を保証してもらはうほどの親しみのあるものは一人もなかつた。健三は頼杖を突いて考えさせられるばかりであつた。

彼はこうした不安を何度となく繰り返しながら、昔しから今日まで同じ職務に従事し

て、動きもしなければ発展もしなかった。健三よりも七つばかり年上な彼の半生は、あたかも変化を許さない器械のようなもので、次第に消耗して行くより外には何の事実も認められなかった。

「二十四、五年もあんな事をしてる間には何か出来そうなものだがね」

健三は時々自分の兄をこんな言葉で評したくなつた。その兄の派出所で勉強嫌であつた昔も眼の前に見えるようであつた。三味線を弾いたり、一絃琴を習つたり、白玉を丸めて鍋の中へ放り込んだり、寒天を煮て切溜で冷したり、凡ての時間はその頃の彼に取って食う事と遊ぶ事ばかりに費やされていた。

「みんな自業自得だといえ、まあそんなものさね」

これが今の彼の折々他に洩す述懐になる位彼は怠け者であつた。

兄弟が死に絶えた後、自然健三の生家の跡を襲ぐようになった彼は、父が亡くなるのを待って、家屋敷をすぐ売り払ってしまった。それで元からある借金を済して、自分は小さな宅へ這入った。それから其所に納まり切らない道具類を売払った。

間もなく彼は三人の子の父になった。そのうちで彼の最も可愛がつていた惣領の娘が、年頃になる少し前から悪性の肺結核に罹つたので、彼はその娘を救うために、あら

ゆる手段を講じた。しかし彼のなし得る凡ては残酷な運命に対して全くの徒勞に歸した。二年越煩った後で彼女が遂に斃れた時、彼の家の箆筒はまるで空になっていた。儀式に要る袴は無論、ちよつとした紋付の羽織さえなかった。彼は健三の外国で着古した洋服を貰つて、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

### 三十五

二、三日経つて健三の兄は果して細君の予想通り袴を返しに來た。

「どうも遅くなつて御氣の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に双方の端を折返して小さく畳んだ袴を、風呂敷の中から出して細君の前に置いた。大の見栄坊で、ちよつとした包物を持つのも厭がった昔に比べると、今の兄は全く色氣が抜けていた。その代り膏氣もなかった。彼はばさばさした手で、汚れた風呂敷の隅を抓んで、それを鄭寧に折つた。

「こりゃ好い袴だね。近頃拵えたの」

「いいえ。なかなかそんな勇氣はありません。昔からあるんです」

細君は結婚のときこの袴を着けて勿体らしく坐つた夫の姿を思いだした。遠い所で極簡略に行われたその結婚の式に兄は列席していなかった。

「へええ。そうかね。なるほどそういわれるとどこかで見たいような気もするが、しかし昔のものはやっぱり丈夫なんだね。ちっとも敗んでいないじゃないか」

「滅多に穿かないんですもの。それでも一人でいるうちに能くそんな物を買う気になれたのね、あの人が。私今でも不思議だと思えますわ」

「あるいは婚礼の時に穿くつもりでわざわざ持えたのかも知れないね」

二人はその時の異様な結婚式について笑いながら話し合つた。

東京からわざわざ彼女を伴つて来た細君の父は、娘に振袖を着せながら、自分は一通りの礼装さえ調べていなかった。セルの単衣を着流しのままでしまいには胡坐さえ掻いた。婆さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方ではなおの事困つた。彼は結婚の儀式について全くの無方針であつた。もともと東京へ帰つてから貰うという約束があつたので、媒酌人もその地にはいなかった。健三は参考のためこの媒酌人が書いて送つてくれた注意書のようなものを読んで見た。それは立派な紙に楷書で認められた厳めしいものには違なかつたが、中には『東鑑』などが例に引いてあるだけで、何の實用

にも立たなかつた。

「雌蝶めちようも雄蝶おちようもあつたもんじやないのよ貴方あなた。だいち御盃おざかすきの縁が欠けているんですもの」

「それで三々九度を遣つたのかね」

「ええ。だから夫婦中ふうふなかがこんなにがたびしするんでしょ」

兄は苦笑した。

「健三もなかなかの氣六きむずかしやだから、御住おすみさんも骨が折れるだろう」

細君はただ笑っていた。別段兄の言葉に取り合う氣色けしきも見えなかつた。

「もう帰りそうなものですがね」

「今日は待つてて例の事件を話して行かなくっちゃあ、……」

兄はまだその後をいおうとした。細君はふいと立つて茶の間へ時計を見に這入はいつた。其所そこから出て来た時、彼女はこの間の書類を手にしていた。

「これが要いるんでしょ」

「いえそれはただ参考までに持つて来たんだから、多分要るまい。もう健三に見せてくれただんでしょ」

「ええ見せました」

「何と違ってたかね」

細君は何とも答えようがなかった。

「随分沢山色々な書付が這入っていますわね。この中には」

「御父さんが、今に何か事があるといけないって、丹念に取って置いたんだから」

細君は夫から頼まれてその中の最も大切な一部分を彼のために代読した事はいわなかった。兄もそれぎり書類について語らなくなった。二人は健三の帰るまでの時間をただの雑談に費やした。その健三は約三十分ほどして帰って来た。

### 三十六

彼が何時もの通り服装を改めて座敷へ出た時、赤と白と擦り合せた細い糸で括られた例の書類は兄の膝の上にあった。

「先達ては」

兄は油気の抜けた指先で、一度解きかけた糸の結び目を元の通りに締めた。

「今ちよつと見たらこの中には君に不必要なものが紛れ込んでいるね」

「そうですか」

この大事そうにしまい込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄はまた自分の弟がそれほど熱心にそれを調べていない事に気が付いた。

「御由およしの送籍願おんせきが這入こつてるんだよ」

御由およしというのは兄の妻さいの名であつた。彼がその人と結婚する当時に必要であつた区長宛の願書が其所そこから出て来きようとは、二人とも思いがけなかつた。

兄は最初の妻さいを離別りべつした。次の妻に死なれた。その二度目の妻が病氣の時、彼は大して心配の様子もなく能く出歩いいた。病症が悪阻つわりだから大丈夫という安心もあるらしく見えたが、容体ようたいが險悪けんあくになつて後も、彼は依然としてその態度を改める様子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻つまに対する仕打とも解釈した。健三もあるいはそうだろうと思つた。

三度目の妻を迎える時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。しかし弟には一言の相談もしなかつた。それがため我がの強い健三の、兄に対する不平が、罪もない義姉あねの方にまで影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭いやだと主

張して、気の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌けない人だろう」

陰で批評の口にするこうした言葉は、彼を反省させるよりもかえって頑固にした。習俗を重んずるために学問をしたような悪い結果に陥って自ら知らなかった彼には、とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊があった。彼は慚愧の眼をもつて当時の自分を回顧した。

「送籍願が紛れ込んでいるなら、それを御返しするから、持って行ったら好いでしよう」

「いいえ写しだから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の糸に手も触れなかった。健三はふとその日附が知りたくなつた。

「一体何時頃でしたかね。それを区役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄はこれだけいったぎりであつた。その唇には微笑の影が差した。最初も二返目も失敗って、最後にやっと自分の氣に入つた女と一所になつた昔を忘れるほど、彼は耄碌していなかつた。同時にそれを口へ出すほど若くもなかつた。

「御幾年でしたかね」と細君が訊いた。

「御由ですか。御由は御住さんと一つ違ですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答えずに、先刻から膝の上に置いた書類の帯を急に解き始めた。

「まだこんなものが這入っていたよ。これも君にや関係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚ろいたが、こら」

彼はごたごたした故紙の中から、何の雑作もなく一枚の書付を取り出した。それは喜代子という彼の長女の出産届の下書であった。「右者本月二十三日午前十一時五十分出生致し候」という文句の、「本月二十三日」だけに棒が引懸けて消してある上に、虫の食った不規則な線が筋違に入っていた。

「これも御父さんの手蹟だ。ねえ」

彼はその一枚の反故を大事らしく健三の方へ向け直して見せた。

「御覧、虫が食ってるよ。尤もそのはずだね。出産届ばかりじゃない、もう死亡届まで出ているんだから」

結核で死んだその子の生年月を、兄は口のうちに静かに読んでいた。

兄は過去の人であった。華美な前途はもう彼の前に横わつていかなかった。何かに付けて後を振り返りがちな彼と対峙している健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻されるような気がした。

「淋しいな」

健三は兄の道伴になるには余りに未来の希望を多く持ち過ぎた。そのくせ現在の彼もかなり淋しいものに違なかつた。その現在から順に推した未来の、当然淋しかるべき事も彼にはよく解つていた。

兄はこの間の相談通り島田の要求を断つた旨を健三に話した。しかしどんな手続きでそれを断つたのか、また先方がそれに対してどんな挨拶をしたのか、そういう細かい点になると、全く要領を得た返事をしなかつた。

「何しろ比田からそういつて来たんだから慥たろう」

その比田が島田に会いに行つて話を付けたとも、または手紙で会見の始末を知らせて遣つたとも、健三には判明らなかつた。

「多分行ったんだろうと思うがね。それともあの人の事だから、手紙だけで済ましてしまったのか。其所はつい聴いて来るのを忘れたよ。尤もあの後一返姉さんの見舞かたがた行った時にや、比田が相変らず留守だったので、つい会う事が出来なかつたのさ。しかしその時姉さんの話じゃ、何でも忙がしいんで、まだそのままにしてあるようだっていつてたがね。あの男も随分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知っている比田も無責任の男に相違なかつた。その代り頼むと何でも引き受ける性質であつた。ただ他から頭を下げて頼まれるのが嬉しくつて物を受合いたがる彼は、頼み方が気に入らないと容易に動かなかつた。

「しかしこんだの事なんざあ、島田がじかに比田の所へ持ち込んだからねえ」

兄は暗に比田自身が先方へ出向いて話し合を付けなければ義理の悪いような事をいつた。そのくせ彼はこんな場合に決して自分で懸合事などに出掛ける人ではなかつた。少し気を遣わなければならぬ面倒が起ると必ず顔を背けた。そうして事情の許す限り凝と辛防して独り苦しんだ。健三にはこの矛盾が腹立たしくも可笑しくもない代りに何となく気の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他から見たらどこか似ているのかも知れない」

こう思うと、兄を気の毒がるのは、つまり自分を気の毒がるのと同じ事にもなった。

「姉さんはもう好いんですか」

問題を変えた彼は、姉の病気について経過を訊ねた。

「ああ。どうも喘息ぜんそくつてもものは不思議だねえ。あんなに苦しんでいても直癒じきなおるんだから」

「もう話が出来ますか」

「出来るどころか、なかなか能く喋舌しゃべつてね。例の調子で。——姉さんの考じや、島田は御縫おぬいさんの所へ行つて、智慧ちえを付けられて来たんだらうっていうんだがね」

「まさか。それよりあの男だからあんな非常識な事をいつて来るのだと解釈する方が適當でしょう」

「そう」

兄は考えていた。健三は馬鹿らしいという顔付をした。

「でなければね。きつと年を取つて皆なから邪魔にされるんだらうって」

健三はまだ黙っていた。

「何しろ淋さむしいには違ないんだね。それもあいつの事だから、人情で淋さむしいんじゃないな

い、慾よくで淋しいんだ」

兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手宛てあてが届く事をどうしてか知っていた。

「何でも金鷄きんしくんじょう勲章の年金か何かを御藤おふじさんが貰もらってるんだとさ。だから島田もどこからか貰わなくっちゃ淋しくって堪らなくなつたんだろうよ。何なんしろあの位慾張よくばってるんだから」

健三は慾で淋しがってる人に対して大した同情も起し得なかつた。

### 三十八

事件のない日がまた少し続いた。事件のない日は、彼に取つて沈黙の日に過ぎなかつた。

彼はその間に時々己おのれの追憶たどを辿るべく余儀なくされた。自分の兄を気の毒がりつつも、彼は何時の間にか、その兄と同じく過去の人となつた。

彼は自分の生命を兩断しようとして試みた。すると綺麗きれいに切り棄すてられべきはずの過去が、かえつて自分を追掛おっかけて来た。彼の眼は行手を望んだ。しかし彼の足は後あとへ歩きが

ちであつた。

そうしてその行き詰りには、大きな四角な家が建つていた。家には幅の広い階子段はしごだんのついた二階があつた。その二階の上も下も、健三の眼には同じように見えた。廊下で囲まれた中庭もまた真四角まっしかくであつた。

不思議な事に、その広い宅うちには人が誰も住んでいなかった。それを淋さみしいとも思わずにいられるほどの幼ない彼には、まだ家というものの経験と理解が欠けていた。

彼はいくつとなく続いている部屋だの、遠くまで真直まっすぐに見える廊下だのを、あたかも天井の付いた町のように考えた。そうして人の通らない往来を一人で歩く気でそこいら中馳かけ廻つた。

彼は時々表二階おもてにかいへ上あつて、細い格子こうしの間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛はらがけを掛けたりした馬が何匹も続いて彼の眼の前を過ぎた。路みちを隔てた真ん向うには大きな唐から金の仏様があつた。その仏様は胡坐あぐらをかいて蓮台れんだいの上に坐すわつていた。太い錫杖しゃくじょうを担いでいた、それから頭に笠かさを被かぶつていた。

健三は時々薄暗い土間どまへ下りて、其所そこからすぐ向側むこうがわの石段を下りるために、馬の通る往来を横切つた。彼はこうしてよく仏様へ攀よじ上のぼつた。着物の襷ひだへ足を掛けたり、錫杖

の柄へ捉まったりして、後から肩に手が届くか、または笠に自分の頭が触れると、その先はもうどうする事も出来ずにまた下りて来た。

彼はまたこの四角な家と唐金の仏様の近所にある赤い門の家を覚えていた。赤い門の家は狭い往来から細い小路を二十間も折れ曲って這入った突き当りにあった。その奥は一面の高藪で蔽われていた。

この狭い往来を突き当って左へ曲ると長い下り坂があった。健三の記憶の中に出てくるその坂は、不規則な石段で下から上まで畳み上げられていた。古くなって石の位置が動いたためか、段の方々には凸凹があった。石と石の罅隙からは青草が風に靡いた。それでも其所は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿のまま、何度かその高い石段を上ったり下ったりした。

坂を下り尽すとまた坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黒く見えた。丁度その坂と坂の間の、谷になった窪地の左側に、また一軒の萱葺があつた。家は表から引込んである上に、少し右側の方へ片寄っていたが、往来に面した一部分には掛茶屋のような雑な構が拵えられて、常には二、三脚の床几さえ体よく据えてあつた。

葭簣の隙から覗くと、奥には石で囲んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つて

あつた。水の上に差し出された両端りょうたんを支える二本の棚柱たなばしらは池の中に埋まつていた。周囲まわりには躑躅つづじが多かつた。中には緋鯉ひしぎの影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻影まぼろしのように赤くするその魚うおを健三は是非捕りたいと思つた。

或日彼は誰も宅にいない時を見計みはからつて、不細工な布袋竹ほていちくの先へ一枚糸を着けて、餌えさと共に池の中に投げ込んだら、すぐ糸を引く気味の悪いものに脅かされた。彼を水の底に引つ張り込まなければやまないその強い力が二の腕まで伝つた時、彼は恐ろしくなつて、すぐ竿さおを放り出した。そうして翌日あくるひ静かに水面に浮いている一尺しやく余りの緋鯉を見出した。彼は独り怖がつた。……

「自分はその時分誰と共に住んでいたのだろうか」

彼には何らの記憶もなかつた。彼の頭はまるで白紙のようなものであつた。けれども理解力の索引に訴えて考えれば、どうしても島田夫婦と共に暮したといわなければならなかつた。

それから舞台が急に変わった。淋しい田舎が突然彼の記憶から消えた。

すると表に櫺子窓の付いた小さな宅が朧気に彼の前にあらわれた。門のないその宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。そうして右にも左にも折れ曲つていった。

彼の記憶がぼんやりしているように、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光とその家とを連想する事が出来なかつた。

彼は其所で疱瘡をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘い出したのだとかいう話であつた。彼は暗い櫺子のうちで転げ廻つた。惣身の肉を所嫌わず掻き撈つて泣き叫んだ。

彼はまた偶然広い建物の中に幼い自分を見出した。区切られているようで続いている仕切のうちには人がちらほらいた。空いた場所の畳だか薄縁だかが、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く淋しく見せた。彼は高い所にいた。其所で弁当を食つた。そうして油揚の胴を干瓢で結えた稲荷鮎の恰好に似たものを、上から下へ落した。彼は勾欄につまつて何度も下を覗いて見た。しかし誰もそれを取つてくれるものはなかつた。伴の大人はみんな正面に気を取られていた。正面ではぐらぐらと柱が揺れて大きな宅が潰れ

た。するとその潰れた屋根の間から、髭を生やした軍人が威張つて出て来た。——その頃の健三はまだ芝居というものの観念を有つていなかったのである。

彼の頭にはこの芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられていた。突然鷹が向うに見える青い竹藪の方へ筋違に飛んで行った時、誰だか彼の傍に居るものが、「外れた外れた」と叫びだした。すると誰だかまた手を叩いてその鷹を呼び返そうとした。——健三の記憶は此所でぶつりと切れていた。芝居と鷹とどっちを先に見たのか、それさえ彼には不分明であった。従つて彼が田圃や藪ばかり見える田舎に住んでいたのと、狭苦しい町内の往来に向いた薄暗い宅に住んでいたのと、どっちが先になるのか、それも彼にはよく判明らなかった。そうしてその時代の彼の記憶には、殆んど人というものの影が働らいていなかった。

しかし島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であった。

その時夫婦は変な宅にいた。門口から右へ折れると、他の塀際伝いに石段を三つほど上らなければならなかった。そこからは幅三尺ばかりの露地で、抜けると広くて賑やかな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反対に二、三段下りる順になっていた。する

と其所に長方形の広間があつた。広間に沿うた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。その上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり来たりした。河岸には柵を結つた中へ薪が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地は、だらだら下りに水際まで続いた。石垣の隙間からは弁慶蟹がよく銚を出した。

島田の家はこの細長い屋敷を三つに区切つたものの真中にあつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の広間がその店になつていたらしく思われるけれども、その持主の何者であつたか、またどうして彼が其所を立ち退いたものか、それらは凡て健三の知識の外に横わる秘密であつた。

一頃その広い部屋をある西洋人が借りて英語を教えた事があつた。まだ西洋人を異人という昔の時代だったので、島田の妻の御常は、化物と同居でもしているように気味を悪がつた。尤もこの西洋人は上靴を穿いて、島田の借りている部屋の縁側までのそのそ歩いてくる癖を有つていた。御常が癩の気味だとかいつて蒼い顔をして寐ていると、其所の縁側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、またはただ手真似だけか、健三にはまるで解つていなかった。

西洋人は何時の間にか去つてしまつた。小さい健三がふと心付いて見ると、その広い室は既に扱所といふものになつていた。

扱所といふのは今の区役所のようなものらしかつた。みんなが低い机を一列に並べて事務を執つていた。テーブルや椅子が今日のように広く用いられない時分の事だつたので、畳の上に長く坐るのが、それほど不便でもなかつたのだらう、呼び出されるものも、また自分から遣つて来るものも、悉く自分の下駄を土間へ脱ぎ捨てて掛り掛りの机の前へ畏まつた。

島田はこの扱所の頭であつた。従つて彼の席は入口からずつと遠い一番奥の突当りに設けられた。其所から直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓の際までに、人の数が何人いたか、机の数が幾脚あつたか、健三の記憶は慥かにそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居と扱所とは、もとより細長い一つ家を仕切つたまでの事なので、彼は出勤といわず退出といわず、少なからぬ便宜を有つていた。彼には天気の良い時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す臆劫を省く事が出来た。彼は自宅から縁側

伝いで勤めに出た。そうして同じ縁側を歩いて宅へ帰った。

こういう関係が、小さい健三を少なからず大胆にした。彼は時々公けの場所へ顔を出して、みんなから相手にされた。彼は好い気になって、書記の硯箱の中にある朱墨を弄ったり、小刀の鞘を払って見たり、他に蒼蠅がられるような悪戯を続けざまにした。

島田はまた出来る限りの専横をもつて、この小暴君の態度を是認した。

島田は吝嗇な男であった。妻の御常は島田よりもなお吝嗇であった。

「爪に火を点すつてえのは、あの事だね」

彼が実家に帰ってから後、こんな評が時々彼の耳に入った。しかし当時の彼は、御常が長火鉢の傍へ坐つて、下女に味噌汁をよそつて遣るのを何の気もなく眺めていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女が可哀そうだ」

彼の実家のものは苦笑した。

御常はまた飯櫃や御菜の這入っている戸棚に、いつでも錠を卸ろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きつと蕎麦を取り寄せて食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代り飯時が来ても決して何時ものように膳を出さなかつた。それを当然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なる

のを見て、大いに驚ろいた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議な位寛大であった。外へ出る時は黄八丈の羽織を着せたり、縮緬の着物を買うために、わざわざ越後屋まで引つ張って行ったりした。その越後屋の店へ腰を掛けて、柄を折り分けている間に、夕暮の時間が逼ったので、大勢の小僧が広い間口の雨戸を、両側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな声を揚げて泣き出した事もあつた。

彼の望む玩具は無論彼の自由になつた。その中には写し絵の道具も交つていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜こんだ。彼は新しい独楽を買つてもらつて、時代を着けるために、それを河岸際の泥溝の中に浸けた。ところがその泥溝は薪積場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は独楽の失くなるのが心配さに、日に何遍となく扱所の土間を抜けて行って、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹の穴を棒で突ツついた。それから逃げ損なつたものの甲を抑えて、いくつも生捕りにして袂へ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそから貰い受けた一人っ子として、異数の取

扱あつかいを受けていたのである。

四十一

しかし夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜ひそんでいた。

彼らが長火鉢ながひばちの前で差向すわいに坐り合う夜寒よさむの宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「御前おとっの御父おとっさんは誰たれだい」

健三は島田の方を向いて彼を指ゆびした。

「じゃ御前おとっの御母おつかさんは」

健三はまた御常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事を外の形で訊きいた。

「じゃ御前おとっの本当の御父おとっさんと御母おつかさんは」

健三は厭々いやいやながら同じ答を繰り返すより外に仕方がなかった。しかしそれが何故なぜだか彼らを喜よろこばした。彼らは顔を見合せて笑った。

或時はこんな光景が殆んど毎日のように三人の間に起つた。或時は単にこれだけの問答では済まなかつた。ことに御常は執濃かつた。

「御前はどこで生れたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門——高敷で蔽われた小さな赤い門の家を挙げて答えなければならなかつた。御常は何時この質問を掛けても、健三が差支なく同じ返事の出来るように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓着しなかつた。

「健坊、御前本当は誰の子なの、隠さずにそう御いい」

彼は苦しめられるような心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙つていたくなつた。

「御前誰が一番好きだい。御父ッさん？ 御母さん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向うの望むような返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまま棒のように立ツていた。それをただ年齒の行かないためとのみ解積した御常の觀察は、むしろ簡単に過ぎた。彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪んだのである。

夫婦は全力を尽して健三を彼らの専有物にしようと力めた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかった。従つて彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を奪われるのと同じ結果に陥つた。彼には既に身体からだの束縛があつた。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影響を投げた。

夫婦は何かに付けて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。それで或時は「御父ッさんが」という声を大きくした。或時はまた「御母さんが」という言葉に力を入れた。御父ッさんと御母さんを離れたただの菓子を食べたり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込もうとする彼らの努力は、かえつて反対の結果をその子供の上に引き起した。健三は蒼蠅うるさがつかつた。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「御父ッさんが」とか「御母さんが」とかが出るたびに、健三は己れ独りの自由を欲しがつた。自分の買つてもらはう玩具おもちゃを喜んだり、錦絵にしきえを飽かず眺めたりする彼は、かえつてそれらを買つてくれる人を嬉うれしがらなくなつた。少なくとも両つふたつものを綺麗きれいに切り

離して、純粹な楽しみに耽りたかつた。

夫婦は健三を可愛がつていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されていた。金の力で美しくしい女を囲っている人が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動する事が出来ずに、ただ健三の歡心を得るために親切を見せなければならなかつた。そうして彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。しかも自から知らなかつた。

## 四十二

同時に健三の氣質も損われた。順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。そうしてその陥欠を補うものは強情の二字に外ならなかつた。

彼の我儘には日増に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往来でも道端でも構わずに、すぐ其所へ坐り込んで動かなかつた。ある時は小僧の脊中から彼の髪の毛を力に任せて撈り取つた。ある時は神社に放し飼の鳩をどうしても宅へ持つて帰るのだと主張してやまなかつた。養父母の寵を欲しいままに専有し得る狭い世界の中に起きたり

寐たりする事より外に何にも知らない彼には、凡ての他人が、ただ自分の命令を聞くために生きているように見えた。彼はいえば通るとばかり考えるようになった。

やがて彼の横着はもう一步深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦りながら縁側へ出た。彼は毎朝寐起に其所から小便をする癖を有っていた。ところがその日は何時もより眠かったので、彼は用を足しながらつい途中で寐てしまった。そうしてその後を知らなかった。

眼が覚めて見ると、彼は小便の上に転げ落ちていた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かった。大通りから河岸の方へ滑り込んでいる地面の中途に当るので、普通の倍ほどあった。彼はその出来事のためにとうとう腰を抜かした。

驚ろいた養父母はすぐ彼を千住の名倉へ伴れて行つて出来るだけの治療を加えた。しかし強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は醋の臭のする黄色いどろどろしたものを毎日局部に塗つて座敷に寐ていた。それが幾日続いたか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覽」

御常は毎日のように催促した。しかし健三は動けなかつた。動けるようになってもわざと動かなかつた。彼は寐ながら御常のやきもきする顔を見てひそかに喜こんだ。

彼はしまいに立つた。そうして平生へいぜいと何の異なる所なく其所いら中歩き廻った。すると御常の驚ろいて嬉うれしがりようが、如何いかにも芝居じみた表情に充ちていたので、彼はいつそ立たずにもう少し寐ねていればよかつたという気になった。

彼の弱点が御常の弱点とまともに相搏あいうつ事も少なくなかつた。

御常は非常に嘘うそを吐く事の巧うまい女であつた。それからどんな場合でも、自分に利益があるとき見えれば、すぐ涙を流す事の出来る重宝な女であつた。健三をほんの小供だと思つて気を許していた彼女は、その裏面をすっかり彼に曝露ばくろして自みづから知らなかつた。

或日一人の客と相對して坐つていた御常は、その席で話題のばに上つた甲という女を、傍はたで聴いていても聴きづらいほど罵ののつた、ところがその客が歸つたあとで、甲がまた偶然彼女を訪ねて来た。すると御常は甲に向つて、そろそろしい御世辞を使い始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞ほめていた所だというような不必要な嘘まで吐ついた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な小供の正直をそのまま甲の前に披瀝ひれきした。甲の歸つたあとで御常は大變に怒おこつた。

「御前と一所にいと顔から火の出るような思をしなくつちやならない」

健三は御常の顔から早く火が出れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌う心が我知らず常にどこかに働らいていた。いくら御常から可愛がられても、それに酬<sup>むく</sup>いるだけの情<sup>じやう</sup>合<sup>あひ</sup>がこつちに出て来<sup>き</sup>得<sup>え</sup>ないような醜<sup>みにく</sup>いものを、彼女は彼女の人格<sup>うぢ</sup>の中に蔵<sup>かく</sup>していたのである。そうしてその醜<sup>みにく</sup>いものを一番能<sup>よ</sup>く知っていたのは、彼女の懐<sup>なごみ</sup>に温められて育<sup>だ</sup>つた駄<sup>だ</sup>々<sup>だ</sup>子<sup>こ</sup>に外ならなかつたのである。

#### 四十三

その中<sup>うち</sup>変<sup>へん</sup>な現象<sup>げんじやう</sup>が島田と御常との間に起<sup>お</sup>つた。

ある晩健三がふと眼を覚まして見ると、夫婦は彼の傍<sup>そば</sup>ではげしく罵<sup>のの</sup>り合<sup>あ</sup>つていた。出来事は彼に取<sup>と</sup>つて突然<sup>とつぜん</sup>であつた。彼は泣き出した。

その翌晩も彼は同じ争<sup>まじ</sup>いの声で熟睡を破<sup>やぶ</sup>られた。彼はまた泣いた。

こうした騒<sup>さわ</sup>がしい夜が幾つとなく重なつて行くに連れて、二人の罵<sup>のの</sup>る声は次第に高<sup>たか</sup>まつて来た。しまいには双方とも手を出し始めた。打<sup>う</sup>つ音、踏<sup>ふ</sup>む音、叫<sup>こゑ</sup>ぶ音が、小さな

彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すとやんだ二人の喧嘩が、今では寐ようが覚めようが、彼に用捨なく進行するようになった。

幼稚な健三の頭では何のために、ついで見馴れないこの光景が、毎夜深更に起るのか、まるで解釈出来なかつた。彼はただそれを嫌った。道徳も理非も持たない彼に、自然はただそれを嫌うように教えたのである。

やがて御常は健三に事実を話して聞かせた。その話によると、彼女は世の中で一番の善人であつた。これに反して島田は大変な悪ものであつた。しかし最も悪いのは御藤さんであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいう言葉を使うとき、御常は口惜しくつて堪まらないという顔付をした。眼から涙を流した。しかしそうした劇烈な表情はかえつて健三の心持を悪くするだけで、外に何の効果もなかつた。

「あいつは讐だよ。御母さんにも御前にも讐だよ。骨を粉にしても仇討をしなくっちゃ」

御常は歯をぎりぎり噛んだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。

彼は始終自分の傍にいて、朝から晩まで彼を味方にしたがる御常よりも、むしろ島田の方を好いた。その島田は以前と違つて、大抵は宅にいない事が多かつた。彼の帰る時

刻は何時も夜更よふけらしかつた。従つて日中は滅多に顔を合せる機会がなかつた。

しかし健三は毎晩暗い灯火ともしびの影で彼を見た。その険悪な眼と怒いかりに顫ふるえる唇とを見た。咽喉のどから渦捲うずまく烟けむりのように洩もれて出るその憤りの声を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴つれて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飲まない代りに大変甘いものを嗜たしなんだ。ある晩彼は健三と御藤さんの娘の御縫おぬいさんとを伴れて、賑にぎやかな通りを散歩した帰りに汁粉屋しるこやへ寄つた。健三の御縫おぬいさんに会つたのはこの時が始めてであつた。それで彼らは碌ろくに顔さえ見合せなかつた。口はまるで利かなかつた。

宅へ歸つた時、健三は御常から、まず島田にどこへ伴れて行かれたかを訊きかれた。それから御藤さんの宅へ寄りはいかないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行つたという詰問を受けた。健三は島田の注意にかかわらず、事実をありのままに告げた。しかし御常の疑いはそれでもなかなか解けなかつた。彼女はいろいろな鎌かまを掛けて、それ以上の事実を釣り出そうとした。

「あいつも一所なんだろう。本当を御おいい。いえば御母おつかさんが好いものを上げるから御おいい。あの女も行つたんだらう。そうだらう」

彼女はどうしても行つたといわせようとした。同時に健三はどうしてもいうまいと決心した。彼女は健三を疑つた。健三は彼女を卑しんだ。

「じゃあの子に御父ツさんが何とといったい。あの子の方に余計口を利くかい、御前の方にかい」

何の答もしなかつた健三の心には、ただ不愉快の念のみ募つた。しかし御常は其所で留まる女ではなかつた。

「汁粉屋で御前をどっちへ坐らせたい。右の方かい、左の方かい」

嫉妬から出る質問は何時まで経つても尽きなかつた。その質問のうちに自分の人格を会釈なく露わして顧り見ない彼女は、十にも足りないわが養い子から、愛想を尽かされて毫も気が付かずにいた。

#### 四十四

間もなく島田は健三の眼から突然消えて失くなった。河岸を向いた裏通りと賑かな表通りとの間に挟まっていた今までの住居も急にどこへか行ってしまった。御常とたった

二人ぎりになった健三は、見馴れない変な宅の中に自分を見出だした。

その家の表には門口に縄暖簾を下げた米屋だか味噌屋だかがあった。彼の記憶はこの大きな店と、茹でた大豆とを彼に連想せしめた。彼は毎日それを食った事をいまだに忘れずにいた。しかし自分の新らしく移った住居については何の影像も浮かべ得なかった。「時」は綺麗にこの佻びしい記念を彼のために払い去ってくれた。

御常は会う人ごとに島田の話をした。口惜しい口惜しいといって泣いた。

「死んで崇つてやる」

彼女の権幕は健三の心をますます彼女から遠ざける媒介となるに過ぎなかった。

夫と離れた彼女は健三を自分一人の専有物にしようとした。また専有物だと信じていた。

「これからは御前一人が依怙だよ。好いかい。確かりしてくれなくっちゃいけないよ」  
こう頼まれるたびに健三はいい渋った。彼はどうしても素直な子供のように心持の好い返事を彼女に与える事が出来なかった。

健三を物にしようという御常の腹の中には愛に駆られる衝動よりも、むしろ慾に押し出される邪気が常に働いていた。それが頑是ない健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快

な影を投げた。しかしその他の点について彼は全くの無我夢中であった。

二人の生活は僅かの間しか続かなかつた。物質的の欠乏が原因になつたのか、または御常の再縁が現状の変化を余儀なくしたのか、年齒の行かない彼にはまるで解らなかつた。何しろ彼女はまた突然健三の眼から消えて失くなつた。そうして彼は何時の間にか彼の実家へ引き取られていた。

「考えるとまるで他の身の上のようだ。自分の事とは思えない」

健三の記憶に上せた事相は余りに今の彼と懸隔していた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思い浮べなければならなかつた。しかも或る不快な意味において思い浮べなければならなかつた。

「御常さんて人はその時にあの波多野とかいう宅へまた御嫁に行つたんでしうか」

細君は何年前か夫の所へ御常から来た長い手紙の上書をまだ覚えていた。

「そうだろうよ。己も能く知らないが」

「その波多野という人は大方まだ生きてるんでしうね」

健三は波多野の顔さえ見た事がなかつた。生死などは無論考えの中になかつた。

「警部だつていうじゃありませんか」

「何んだか知らないね」

「あら、貴夫あなたが自分でそう御仰おっしゃったくせに」

「何時いつ」

「あの手紙を私わたくしに御見せになった時よ」

「そうかしら」

健三は長い手紙の内容を少し思い出した。その中には彼女が幼い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立ててあった。乳がないので最初からおじやだけで育てた事だの、下性げしやうが悪くって寐小便ねしやうべんの始末に困った事だの、凡すべてそうした顛末てんまつを、飽きるほど委くわしく述べた中に、甲府こうふとかにいる親類の裁判官が、月々彼女に金を送ってくれるので、今では大變仕合しあわせだと書いてあった。しかし肝心の彼女の夫が警部であったかどうか、其所そこになると健三には全く覚がなかった。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きているかも分りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、また御常の事ともつかず、こんな問答が取り換わされた。

「あの人が不意に遣つて来たように、その女の人も、何時突然訪ねて来ないとも限らないわね」

細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり黙っていた。

#### 四十五

健三も細君も御常の書いた手紙の傾向をよく覚えていた。彼女とはさして縁故のない人ですら、親切に毎月いくらかずつの送金をしてくれるのに、小さい時分あれほど世話になって置きながら、今更知らん顔をしていられた義理でもあるまいといった風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

その時彼はこの手紙を東京にいる兄の許に送った。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し気を付けるように先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が来た。もともと養家先を離縁になつて、他家へ嫁に行った以上は他人である、その上健三はその養家さえ既に出してしまった後なのだから、今になつて直接本人へ文通などされては困るという理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、その返事

には書いてあった。

御常の手紙はその後ごふつり来なくなつた。健三は安心した。しかしどこかに心持の悪い所があつた。彼は御常の世話を受けた昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に彼女を忌み嫌う念は昔の通り変らなかつた。要するに彼の御常に対する態度は、彼の島田に対する態度と同じ事であつた。そうして島田に対するよりも一層嫌悪の念が劇はげしかつた。

「島田一人でもう沢山なところへ、また新らしくそんな女が遣やつて来られちゃ困るな」

健三は腹の中でこう思った。夫の過去について、それほど知識のない細君の腹の中はなおの事であつた。細君の同情は今その生家の方にばかり注がれていた。もとかなりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を続けた結果、漸だんだん々々経済上の苦境に陥いつて来たのである。

健三は時々宅うちへ話しに来る青年と対坐たいざして、晴々しい彼らの様子と自分の内面生活とを対照し始めるようになった。すると彼の眼に映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ先へと歩いて行くように見えた。

或日彼はその青年の一人に向つてこういつた。

「君らは幸福だ。卒業したら何になろうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考えて

いるんだから」

青年は苦笑した。そうして答えた。

「それは貴方がた時代の事でしょう。今の青年はそれほど呑気でもありません。何になろうとか、何をしようとか思わない事は無論ないでしょうけれども、世の中が、自分分の思い通りにならない事もまた能く承知してはいますから」

なるほど彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛くなっていた。しかしそれは衣食住に関する物質的問題に過ぎなかつた。従つて青年の答には彼の思わくと多少喰い違つた点があつた。

「いや君らは僕のように過去に煩らわされないから仕合せだというのさ」

青年は解しがたいという顔をした。

「あなただつて些とも過去に煩らわされているようには見えませんよ。やつぱり己の世界はこれからだという所があるようですね」

今度は健三の方が苦笑する番になつた。彼はその青年に仏蘭西のある学者が唱え出した記憶に関する新説を話した。

人が溺れかかつたり、または絶壁から落ようとする間に、よく自分の過去全体を一

瞬間の記憶として、その頭に描き出す事があるという事実には、この哲学者は一種の解釈を下したのである。

「人間は平生へいぜい彼らの未来ばかり望んで生きているのに、その未来が咄嗟とつぎに起つたある危険のために突然塞ふさがれて、もう己は駄目だと事が極きまると、急に眼を転じて過去を振り向くから、そこで凡てすべの過去の経験が一度に意識に上のぼるのだというんだね。その説によると」

青年は健三の紹介を面白そうに聴いた。けれども事状を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引き直して見る事が出来なかつた。健三も一刹那いっせつなにわが全部の過去を思い出すような危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考えるほどの馬鹿でもなかつた。

#### 四十六

健三の心を不愉快な過去に捲まき込む端緒いとぐちになつた島田は、それから五、六日ほどして、ついにまた彼の座敷にあらわれた。

その時健三の眼に映じたこの老人は正しく過去の幽霊であった。また現在の人間でもあった。それから薄暗い未来の影にも相違なかった。

「どこまでこの影が己の身体に付いて回るだろう」

健三の胸は好奇心の刺戟に促されるよりもむしろ不安の漣漪に揺れた。

「この間比田の所をちよつと訪ねて見ました」

島田の言葉遣はこの前と同じように鄭重であった。しかし彼が何で比田の家へ足を運んだのか、その点になると、彼は全く知らん顔をして澄ましていた。彼の口ぶりはまるで無沙汰見舞かたがたそつちへ用のあつたついでに立ち寄った人の如くであった。

「あの辺も昔と違つて大分変りましたね」

健三は自分の前に坐っている人の真面目さの程度を疑つた。果してこの男が彼の復讐を比田まで頼み込んだのだろうか、また比田が自分たちと相談の結果通り、断然それを拒絶したのだろうか、健三はその明白な事実さえ疑わずにはいられなかつた。

「もとはそら彼処に瀑があつて、みんな夏になると能く出掛けたものですがね」

島田は相手に頓着なくただ世間話を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に触れる必要を認めないので、ただ老人の迹に跟着引つ張られて行くだ

けであった。すると何時の間にか島田の言葉遣が崩れて来た。しまいに彼は健三の姉を呼び捨てにし始めた。

「御夏も年を取ったね。尤ももう大分久しく会わないには違ないが。昔はあれでなかなか勝気な女で、能く私に喰って掛ったり何かしたものだ。その代り元々兄弟同様の間柄だから、いくら喧嘩をしたって、仲の直るのもまた早いには早い。何しろ困ると助けられて能く泣き付いて来るんで、私や可哀想だからその度びにいくらかず都合して遣ったよ」

島田のいう事は、姉が蔭で聴いていたらさぞ怒るだろうと思うように横柄であった。それから手前勝手な立場からばかり見た歪んだ事実を他に押し付けようとする邪気に充ちていた。

健三は次第に言葉少なになった。しまいには黙ったなり凝と島田の顔を見詰めた。

島田は妙に鼻の下の長い男であった。その上往来などで物を見るときは必ず口を開けていた。だからちよつと馬鹿のようであった。けれども善良な馬鹿としては決して誰の眼にも映ずる男ではなかった。落ち込んだ彼の眼はその底で常に反対の何物かを語っていた。眉はむしろ険しかった。狭くて高い彼の額の上にある髪は、若い時分から左右に

分けられた例がなかった。法印か何ぞのように常に後へ撫で付けられていた。

彼はふと健三の眼を見た。そうして相手の腹を読んだ。一旦横風の昔に返った彼の言葉遣がまた何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻つて来た。健三に対して過去の己れに返ろう返ろうとする試みを遂に断念してしまった。

彼は室の内をきよろきよろ見廻し始めた。殺風景を極めたその室の中には生憎額も掛物も掛っていなかった。

「李鴻章の書は好きですか」

彼は突然こんな問を發した。健三は好きとも嫌ともいい兼ねた。

「好きなら上げてでも好ござんす。あれでも価値にしたら今じゃよつぽどするでしょう」  
昔し島田は藤田東湖の偽筆に時代を着けるのだといつて、白髪蒼顔万死余云々と書いた半切の唐紙を、台所の竈の上に釣るしていた事があつた。彼の健三にくれるという李鴻章も、どこの誰が書いたものか頗る怪しかった。島田から物を貰う氣の絶対になかった健三は取り合わずにいた。島田は漸く歸つた。

「何しに来たんでしよう、あの人は」

目的なしにただ来るはずがないという感じが細君には強くあった。健三も丁度同じ感じに多少支配されていた。

「解らないね、どうも。一体魚と獣ほど違うんだから」

「何が」

「ああいう人と己などととはさ」

細君は突然自分の家族と夫との関係を思い出した。両者の間には自然の造った溝があつて、御互を離隔していた。片意地な夫は決してそれを飛び超えてくれなかつた。溝を拵えたものの方で、それを埋めるのが当然じゃないかといった風の気分でも何時までも押し通していた。里ではまた反対に、夫が自分の勝手にこの溝を掘り始めたのだから、彼の方で其所を平にしたら好かろうという考えを有つていた。細君の同情は無論自分の家族の方にあつた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出来ない偏窟な学者だと解釈していた。同時に夫が里と調和しなくなつた原因の中に、自分が主な要素として這入っている事も認めていた。

細君は黙つて話を切り上げようとした。しかし島田の方にはばかり気を取られていた健

三にはその意味が通じなかった。

「御前はそう思わないかね」

「そりゃあの人と貴夫あなたとなら魚と獣位違うでしょう」

「無論外の人と己と比較していやしない」

話はまた島田の方へ戻つて来た。細君は笑いながら訊きいた。

「李鴻章の掛物をどうとかいつてたのね」

「己やに遣やろうかかっていうんだ」

「御止およしなさいよ。そんな物を貰つてまた後からどんな無心を持ち懸けられるかも知れないわ。遣るつていうのは、大方口の先だけなんでしょう。本当は買つてくれつていう気なんですよ、きつと」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買いたいものが沢山あった。段々大きくなって来る女の子に、相当の着物を着せて表へ出す事の出来ないのも、細君からいえば、夫の気の付かない心配に違なかつた。一二円五十銭の月賦で、この間拵あまがっぱえた雨合羽あまがっぱの代を、月々洋服屋に払っている夫も、あまり長閑のどかな心持になれようはずがなかつた。

「復籍の事は何にもいい出さなかつたようですね」

「うん何にもいわない。まるで狐きつねに抓つかまれたようなものだ」

始めからこつちの気を引くためにわざとそんな突飛とつびな要求を持ち出したものか、または真面目まじめな懸合かけあいとして、それを比田ひだへ持ち込んだ後あと、比田ひだからきっぱり断られたので、始めて駄目だと覺さつたものか、健三にはまるで見当が付かなかつた。

「どつちでしょう」

「到底解らないよ、ああいう人の考えは」

島田は實際どつちでも遣りかねない男であつた。

彼は三日ほどしてまた健三の玄関を開けた。その時健三は書齋あかりに灯火あかりを点つけて机の前すわに坐すわっていた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒いとぐちを見せかけた所であつた。

彼は一函ひとふみにそれを手近たぐまで手繰り寄せようとして骨を折こつた。彼の思索は突然たち切られた。彼は苦い顔をして室へやの入口いりぐちに手を突ついた下女げじよの方を顧みみた。

「何もそう度々たびたび来て、他の邪魔ひとをしなくつても好きすいなものだ」

彼は腹はらの中でこう呟つぶやいた。断然だつぜん面会めんかいを謝絶しゃつせつする勇氣もを有もたない彼は、下女げじよを見たなり少時しばしば黙もくっていた。

「御通ごつうし申まをしますか」

「うん」

彼は仕方なしに答えた。それから「御奥さんは」と訊ねた。

「少し御気分が悪いと仰しやうて先刻から伏せうていらつしやいます」

細君の寐るときは歇私的里の起つた時に限るようには健三には思えてならなかつた。彼は漸く立ち上つた。

#### 四十八

電気燈のまだ戸ごとに点されない頃だつたので、客間には例もの通り暗い洋燈が点いていた。

その洋燈は細長い竹の台の上に油壺を箴め込むように拵えたもので、鼓の胴の恰形に似た平たい底が畳へ据わるように出来ていた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心を出したり引つ込ましたりしながら灯火の具合を眺めていた。彼は改まった挨拶もせず、「少し油煙がたまるようですな」といった。

なるほど火屋が薄黒く燻ぶっていた。丸心の切方が平に行かないところを、むやみに灯を高くすると、こんな変調を来すのがこの洋燈の特徴であった。

「換えさせましょう」

家には同じ型のものが三つばかりあった。健三は下女を呼んで茶の間にあるのと取り換えさせようとした。しかし島田は生返事をするぎり度、容易に煤で曇った火屋から眼を離さなかった。

「どういう加減だろう」

彼は独り言をいって、草花の模様だけを不透明に擦った丸い蓋の隙間を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、こんな事を能く気にするという点において、頗る几帳面な男に相違なかった。彼はむしろ潔癖であった。持つて生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の償いにでもなるように、座敷や縁側の塵を気にした。彼は尻をからげて、拭掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所まで掃いたり水を打ったりした。

物が壊れると彼はきつと自分で修復した。あるいは修復そうとした。それがためにどの位な時間が要つても、またどんな労力が必要になつて来ても、彼は決して厭わなかった。そういう事が彼の性にあるばかりでなく、彼には手に握つた一銭銅貨の方が、時間

や労力よりも遙かに大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅うちで出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするという事が彼には何よりも恐ろしかった。そうして目に見えない損はいくらしても解らなかつた。

「宅うちの人はあんまり正直過ぎるんで」

御藤おふじさんは昔健三に向つて、自分の夫を評するとき、こんな言葉を使った。世の中をまだ知らない健三にもその真実でない事はよく解つていた。ただ自分の手前、嘘うそと承知しながら、夫の品性を取り繕うのだろうと善意に解釈した彼は、その時御藤さんに向つて何にもいわなかつた。しかし今考えて見ると、彼女の批評にはもう少し慥たしかな根底があるらしく思えた。

「必竟ひじきよう大きな損に気のつかない所が正直なんだろう」

健三はただ金銭上の慾よくを満たそうとして、その慾に伴なわない程度の幼稚な頭脳を精一杯に働らかせている老人をむしろ憐れに思った。そうして凹くぼんだ眼を今擦すり硝子ガラスの蓋の傍そばへ寄せて、研究でもする時のように、暗い灯を見詰めている彼を気の毒な人として眺めた。

「彼はこうして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたような一句を眼の前に味わった健三は、自分は果してどうして老ゆるのだろうかと考えた。彼は神という言葉が嫌であった。しかしその時の彼の心にはたしかに神という言葉が出た。そうして、もしその神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、この強慾な老人の一生と大した変りはないかも知れないという気が強くなった。

その時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になった。それに驚ろいた彼は、また螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はただでさえ暗い灯火をなおの事暗くした。

「どうもどこか調子が狂ってますね」

健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持って来させた。

#### 四十九

その晩の島田はこの前来た時と態度の上において何の異なる所もなかった。応対には

どこまでも健三を独立した人と認めるような言葉ばかり使った。

しかし彼はもう先達せんだつての掛物についてはまるで忘れているかの如くに見えた。李鴻章りこうしょうの李の字も口にしなかった。復籍の事はなお更であった。噫おくひにさえ出す様子を見せなかった。

彼はなるべくただの話をしようにとした。しかし二人に共通した興味のある問題は、どこをどう探しても落ちているはずがなかった。彼のいう事の大部分は、健三に取つて全くの無意味から余り遠く隔へだたつているとも思えなかった。

健三は退屈した。しかしその退屈のうちには一種の注意が徹ととっていた。彼はこの老人が或日或物を持つて、今より判明はつきりした姿で、きつと自分の前に現れてくるに違ないと、いう予覚に支配された。その或物がまた必ず自分に不愉快なもしくは不利益な形を具えているに違ないという推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながらかなり鋭とい緊張を感じた。そのせい、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子すりガラスの蓋かきを通して油煙くすに燻くすぶつた洋燈ランプの灯ひを眺めていた時とは全く変まっていた。

「隙すきがあつたら飛び込もう」

落ち込んだ彼の眼は鈍いくせに明らかにこの意味を物語っていた。自然健三はそれに抵抗して身構えなければならなくなった。しかし時によると、その身構えをさらりと投げ出して、飢えたような相手の眼に、落付おちつきを与えて遣やりたくなる場合もあった。

その時突然奥の間で細君の唸うなるような声がした。健三の神経はこの声に対して普通の人以上の敏感を有もっていた。彼はすぐ耳を峙てはだてた。

「誰か病気ですか」と島田が訊きいた。

「ええ妻さいが少し」

「そうですか、それはいけませんね。どこが悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかった。何時どこから嫁に来た女かさえ知らないらしかつた。従つて彼の言葉にはただ挨拶あいさつがあるだけであつた。健三もこの人から自分の妻に対する同情を求めようとは思つていなかった。

「近頃は時候が悪いから、能よく気を付けないといけませんね」

子供は疾とうに寐付ねついた後あとなので奥は寂しんとしていた。下女げじよは一番懸け離れた台所の傍そばの三畳にいるらしかつた。こんな時に細君をたつた一人で置くのが健三には何より苦しかった。彼は手を叩たたいて下女を呼んだ。

「ちよつと奥へ行つて奥さんの傍に坐つててくれ」

「へええ」

下女は何のためか解らないといった様子をして間の襖を締めた。健三はまた島田の方を向き直つた。けれども彼の注意はむしろ老人を離れていた。腹の中で早く帰つてくれれば好いと思うので、その腹が言葉にも態度にもありありと現れた。

それでも島田は容易に立たなかつた。話の接穂がなくなつて、手持無沙汰で仕方なくなつた時、始めて座蒲団から滑り落ちた。

「どうも御邪魔をしました。御忙がしいところを。いづれまたその内」

細君の病氣については何事もいわなかつた彼は、沓脱へ下りてからまた健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」

健三は生返事をしたなり立つていた。

「実は少し御話したい事があるんですが」

健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。老人は健三の手に持った暗い灯影から、鈍い眼を光らしてまた彼を見上げた。その眼にはやっぱりどこかに隙があつたら彼

の懐に潜り込もうという人の悪い厭な色か動いていた。

「じゃ御免」

最後に格子を開けて外へ出た島田はこういつてとうとう暗がりに消えた。健三の門には軒燈さえ点いていなかった。

## 五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立った。

「どうかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲団の横からまたその眼を見下した。

襖の影に置かれた洋燈の灯は客間のよりも暗かった。細君の眸がどこに向って注がれているのか能く分らない位暗かった。

「どうかしたのか」

健三は同じ問をまた繰り返さなければならなかった。それでも細君は答えなかった。彼は結婚以来こういう現象に何度となく遭遇した。しかし彼の神経はそれに慣らされ

るには余りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であった。彼はずぐ枕元に腰を卸した。

「もうあっちへ行つても好い。此所には己がいるから」

ぼんやり蒲団の裾に坐つて、退屈そうに健三の様子を眺めていた下女は無言のまま立ち上った。そうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御辞儀をしたなり襖を立て切った。後には赤い筋を引いた光るものが畳の上に残った。彼は眉を顰めながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢を呼び返して小言をいつて渡すところを、今の彼は黙つて手に持つたまま、しばらく考えていた。彼はしまいにその針をぶつりと襖に立てた。そうしてまた細君の方へ向き直つた。

細君の眼はもう天井を離れていた。しかし判然どこを見ているとも思えなかつた。黒い大きな瞳子には生きた光があつた。けれども生きた働きが欠けていた。彼女は魂と直接に繋がつていないような眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見当を眺めていた。

「おい」

健三は細君の肩を揺つた。細君は返事をせずただ首だけをそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其所に夫の存在を認める何らの輝きもなかつた。

「おい、己だよ。分るかい」

こういう場合に彼の何時でも用いる陳腐で簡略でしかもぞんざいなこの言葉のうちに、他に知れないで自分にばかり解っている憐憫れんびんと苦痛と悲哀があった。それから跪ひざままずいて天に禱いのる時の誠と願もあった。

「どうぞ口を利用してくれ。後生だから己の顔を見てくれ」

彼は心のうちでこういつて細君に頼むのである。しかしその痛切な頼みを決して口へ出していいおうとはしなかった。感傷センチタル的な気分支配されやすいくせに、彼は決して外表デモンストラ的チーヴになれない男であった。

細君の眼は突然平生へいぜいの我に帰った。そうして夢から覚めた人のように健三を見た。

「貴夫あなた？」

彼女の声は細くかつ長かった。彼女は微笑しかけた。しかしまだ緊張している健三の顔を認めた時、彼女はその笑を止めた。

「あの人はもう帰ったの」

「うん」

二人はしばらく黙っていた。細君はまた頸くびを曲げて、傍そばに寐ねている子供の方を見た。

「能く寐ているのね」

子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやすや寐ていた。

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣ろうか」

「いいえ、もう好ござんす」

「大丈夫かい」

「ええ」

「本当に大丈夫かい」

「ええ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寐る訳に行かないよ」

健三はもう一遍書齋へ入って静かな夜を一人更かさなければならなかった。

## 五十一

彼の眼が冴えている割に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中断された人の

ように、考察の進路を遮ぎる霧の中で苦しんだ。

彼は明日あしたの朝多くの人より一段高い所に立たなければならぬ憐あわれな自分の姿を想い見た。その憐あわれな自分の顔を熱心に見詰めたり、または不得意な自分のいう事を真面目まじめに筆記したりする青年に対して済まない気がした。自分の虚栄、心や自尊心を傷けるのも、それらを超越する事の出来ない彼には大きな苦痛であった。

「明日あしたの講義もまた纏まとまらないのかしら」

こう思うと彼は自分の努力が急に厭いやになった。愉快に考えの筋道が運んだ時、折々何者にか煽動せんどうされて起る、「己おれの頭は悪くない」という自信も己惚うぬぼれも忽たちまち消えてしまった。同時にこの頭の働らきを攪かき乱す自分の周囲についての不平も常時ふだんよりは高まって来た。

彼はしまいに投げるように洋筆ペンを放り出した。

「もうやめだ。どうでも構わない」

時計はもう一時過ぎていた。洋燈ランプを消して暗闇くらやみを縁側伝いに廊下へ出ると、突当りの奥の間の障子二枚だけが灯ひに映って明るかった。健三はその一枚を開けて内に入った。子供は犬ころのように塊かたまって寐ねていた。細君も静かに眼を閉じて仰向あおむけに眠っていた。

た。

音のしないように気を付けてその傍そばに坐すわった彼は、心持こころ頸くびを延のばして、細君の顔を上から覗のぞき込んだ。それからそっと手を彼女の寐ね顔がおの上に翳かげした。彼女は口を閉じていた。彼の掌てのひらには細君の鼻の穴から出る生暖かい呼い息きが微いかに感かぜられた。その呼い息きは規則正きつしかった。また穏おだやかだった。

彼は漸おだく出でした手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出来ないという気が彼の胸を衝ついて起おった。けれども彼は直すくその衝つ動どうに打勝うった。次に彼はまた細君の肩へ手を懸かけて、再び彼女を揺ゆり起おそうとしたが、それもやめた。

「大丈夫だろう」

彼は漸おだく普通の人の断案に帰着する事が出来た。しかし細君の病氣に対して神経の鋭敏えんになっている彼には、それが何人なんびともこういう場合に取らなければならぬ尋常の手続しゆじゆくきのように思われたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の薬であった。長時間彼女の傍に坐すわって、心配そうにその顔を見詰まめている健三に何よりも有難いその眠りが、静かに彼女の臉まはたの上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るような気が常にした。しかしその眠りがまた余り

長く続き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼がかえって不安の種になった。ついに睫毛の鎖まっげとじざしている奥を見るために、彼は正体たわいなく寐入った細君を、わざわざ揺り起して見る事が折々あった。細君がもつと寐かして置いてくれれば好いのにという訴えを疲れた顔色に現わして重い瞼を開くと、彼はその時始めて後悔した。しかし彼の神経はこんな気の毒な真似まねをしてまでも、彼女の実在を確かめなければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寐衣ねまきを着換えて、自分の床に入った。そうして濁りながら動いているような彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜はその濁りを清めてくれるには余りに暗過ぎた、しかし騒がしいその動きを止めるには充分静かであった。

翌朝あつくあした彼は自分の名を呼ぶ細君の声で眼を覚ました。

「貴夫あなたもう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取った袂時計たもとどけいを眺めていた。下げ女よが俎板まないたの上で何か刻む音が台所の方で聞こえた。

「婢おんなはもう起きてるのか」

「ええ。先刻起しさつきに行つたんです」

細君は下女を起して置いてまた床の中に這入ったのである。健三はすぐ起き上がった。細君も同時に立った。

昨夜の事は二人ともまるで忘れたように何にもいわなかった。

## 五十二

二人は自分たちのこの態度に対して何の注意も省察も払わなかった。二人は二人に特有な因果関係を有っている事を冥々の裡に自覚していた。そうしてその因果関係が一切の他人には全く通じないのだという事も能く呑み込んでいた。だから事状を知らない第三者の眼に、自分たちがあるいは変に映りはしまいかという疑念さえ起さなかった。

健三は黙って外へ出て、例の通り仕事をした。しかしその仕事の真箇中に彼は突然細君の病気を想像する事があった。彼の眼の前に夢を見ているような細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立っている高い壇から降りて宅へ帰らなければならぬような気がした。あるいは今にも宅から迎が来るような心持になった。彼は広い室の片隅にいて真ん向うの突当りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向いて兜の鉢金を伏せた

ような高い丸天井を眺めた。仮漆サアーニツシで塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるように工夫したその天井は、小さい彼の心を包むに足りなかった。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼のいう事を聴いている多くの青年の上に落ちた。そうしてまた卒然として現実に帰るべく彼らから余儀なくされた。

これほど細君の病気に悩まされていた健三は、比較的島田のために崇たられる恐れを抱いだかなかつた。彼はこの老人を因業いんごうで強慾ごうよくな男と思つていた。しかし一方ではまたそれらの性癖を充分發揮する能力がないものとしてむしろ見縊みくびつてもいた。ただ要いらぬ会談に惜い時間を潰つぶされるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩いになつた。

「何をいつて来る気かしら、この次は」

襲おそわれる事を予期して、暗あんにそれを苦にするような健三の口振くちぶりが、細君の言葉を促うがした。

「どうせ分つているじゃありませんか。そんな事を気になさるより早く絶交した方がよっぽど得ですわ」

健三は心の裡で細君のいう事を肯うけがった。しかし口ではかえつて反対な返事をした。「それほど気にしちやいないさ、あんな者。もともと恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいって誰もいやしませんわ。けれども面倒臭い（めんどうくさい）にや違いないでしょう、いくら貴夫（あなた）だって」

「世の中にはただ面倒臭い位な単純な理由でやめる事の出来ないものがいくらかもあるさ」

多少片意地の分子を含んでいるこんな会話を細君と取り換わせた健三は、その次島田の来た時、例（れい）よりは忙（いそ）がしい頭を抱えているにもかかわらず、ついに面会を拒絶する訳に行かなかつた。

島田のちと話したい事があるといったのは、細君の推察通りやつぱり金の問題であつた。隙（すき）があつたら飛び込もうとして、この間から覗（ねら）を付けていた彼は、何時まで待つても際限がないとでも思つたものか、機会のあるなしに頓着（とんじやく）なく、ついに健三に肉薄（にくはく）し始めた。

「どうも少し困るので。外にどここといって頼みに行く所もない私（わたし）なんだから、是非一つ」

老人の言葉のどこかには、義務として承知してもらわなくっちゃ困るといった風の横着さが潜んでいた。しかしそれは健三の神経を自尊心の一角において傷（いた）め付けるほど強

くも現われていなかった。

健三は立って書齋の机の上から自分の紙入を持って来た。一家の会計を司どっている彼の財囊は無論軽かった。空のまま硯箱の傍に幾日も横たわっている事さえ珍らしくはなかった。彼はその中から手に触れるだけの紙幣を攫み出して島田の前に置いた。島田は変な顔をした。

「どうせ貴方の請求通り上げる訳には行かないんです。それでもありつたけ悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。そうして彼の帰ったあとで、空の財布を客間へ放り出したまままた書齋へ入った。細君には金を遣った事を一口もいわなかった。

### 五十三

翌日例刻に帰った健三は、机の前に坐つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日の紙入に眼を付けた。革で拵らえた大型のこの二つ折は彼の持物としてむしろ立派過ぎる位上等な品であった。彼はそれを倫敦の最も賑やかな町で買ったのである。

外国から持つて帰った記念が、何の興味も惹かなくなりつつある今の彼には、この紙入も無用の長物と見える外はなかった。細君が何故丁寧なげにそれを元の場所へ置いてくれたのだろうかとさえ疑った彼は、皮肉な一瞥いちべつを空っぽうの入物に与えたり、手も触れずに幾日かを過ごした。

その内何かで金の要る日いが来た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れてくれ」

細君は右の手で物指ものさしを持ったまま夫の顔を下から見上げた。

「這入はいつてるはずですよ」

彼女はこの間島田の帰ったあとで何事も夫から聴こうとしなかった。それで老人に金を奪とられたことも全く夫婦間の話題のぼに上つていなかった。健三は細君が事状を知らないでこういうのかと思った。

「あれはもう遣やっちゃったんだ。紙入は疾とうから空っぽうになっているんだよ」

細君は依然として自分の誤解に気が付かないらしかった。物指を畳の上へ投げ出して手を夫の方へ差し延べた。

「ちよつと拝見」

健三は馬鹿々々しいという風をして、それを細君に渡した。細君は中を検ためた。中からは四、五枚の紙幣きつが出た。

「そらやっぱり入ってるじゃありませんか」

彼女は手垢てあかの付いた皺しわだらけの紙幣を、指の間に挟んで、ちよつと胸のあたりまで上げて見せた。彼女の挙動は自分の勝利に誇るものの如く微かすかな笑に伴なつた。

「何時入れたのか」

「あの人の帰つた後です」

健三は細君の心遣を嬉うれしく思うよりもむしろ珍らしく眺めた。彼の理解している細君はこんな気の利いた事を滅多にする女ではなかつたのである。

「己おれが内所ないしょで島田に金を奪とられたのを気の毒とでも思ったものかしら」

彼はこう考えた。しかし口へ出してその理由わけを彼女に訊きき糺ただして見る事はしなかつた。夫と同じ態度をついに失わずにいた彼女も、自ら進んで己おのれを説明する面倒あえを敢あてしなかつた。彼女の填補てんぽした金はかくして黙って受取られ、また黙って消費されてしまつた。

その内細君の御腹おなかが段々大きくなつて来た。起居たちいに重苦おもしそうな呼息いきをし始めた。気分も能く変化よした。

「妾わたくし今度こんだはことによると助からないかも知れませんよ」

彼女は時々何に感じてかこういつて涙を流した。大抵は取り合わずにいる健三も、時として相手にさせられなければ済まなかつた。

「何故なぜだい」

「何故なぜだかそう思われて仕方がないんですもの」

質問も説明もこれ以上には上のぼる事の出来なかつた言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に潜んでいた。その或ものは単純な言葉を伝わつて、言葉の届かない遠い所へ消え行つた。鈴りんの音ねが鼓膜こまくの及ばない幽かすかな世界に潜り込むように。

彼女は悪阻つわりで死んだ健三の兄の細君の事を思い出した。そうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二、三日食物が通らなければ滋養かんちよう灌腸かんちようをするはずだった際どいところを、よく通り抜けたものだなどと考えると、生きている方がかえつて偶然のような気がした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であった。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目に過ぎなかった。彼は腹の中で苦笑した。

## 五十四

健三の気分にも上り下りがあった。出任せにもせよ細君の心を休めるような事ばかりはいつていかなかった。時によると、不快そうに寐ている彼女の体たらくが癢に障って堪らなくなった。枕元に突っ立ったまま、わざと櫛貪に要らざる用を命じて見たりした。

細君も動かなかつた。大きな腹を畳へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろという態度をとつた。平生からあまり口数を利かない彼女は益沈黙を守つて、それが夫の気を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましていた。

「つまりしぶといのだ」

健三の胸にはこんな言葉が細君の凡ての特色でもあるかのように深く刻み付けられた。彼は外の事をまるで忘れてしまわなければならなかつた。しぶといという觀念だけ

があらゆる注意の焦点になつて来た。彼はよそを真闇まつくらにして置いて、出来るだけ強烈な憎悪の光をこの四字の上に投げ懸けた。細君はまた魚か蛇のように黙つてその憎悪を受取つた。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫はどうしても氣違染きちがいにじみた癩癩持かんしゃくもちとして評価されなければならなかつた。

「貴夫あなたがそう邪慳じやくんになさると、また歇私ヒステリー的里を起しますよ」

細君の眼からは時々こんな光が出た。どういふものか健三は非道ひどくその光を怖れた。同時に劇はげしくそれを悪にくんだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部うわべでは強しいて勝手にしろという風を装つた。その強硬な態度のどこかに何時でも仮装に近い弱点があるのを細君は能く承知よしていた。

「どうせ御産で死んでしまうんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに眩くらやいた。健三は死んじまえといいたくなくなった。

或晩彼はふと眼を覚まして、大きな眼を開いて天井を見詰まている細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髮剃かみそりがあつた。彼女が黒檀エボニーの鞆たもとに折り込まれたその刃を真直まっすぐに立てずに、ただ黒い柄えだけを握つていたので、寒い光は彼の視覚を襲わずに済んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髮剃

を撈ぎ取った。

「馬鹿な真似をするな」

こういうと同時に、彼は髮剃を投げた。髮剃は障子に箆め込んだ硝子に中つてその一部分を摧いて向う側の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見ている人のように一口も物をいわなかった。

彼女は本当に情に逼つて刃物三昧をする気なのだろうか、または病気の発作に自己の意志を捧げべく余儀なくされた結果、無我夢中で切れものを弄そぶのだろうか、あるいは単に夫に打ち勝とうとする女の策略からこうして人を驚かすのだろうか、驚ろかすにしてもその真意は果してどこにあるのだろうか。自分に対する夫を平和で親切な人に立ち返らせるつもりなのだろうか、またはただ浅墓な征服慾に駆られているのだろうか、——健三は床の中で一つの出来事を五条にも六条にも解釈した。そうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けてその動静をうかがった。寐ているとも起きているとも付かない細君は、まるで動かなかつた。あたかも死を銜う人のようであつた。健三はまた枕の上でまた自分の問題の解決に立ち帰った。

その解決は彼の実生活を支配する上において、学校の講義よりも遙かに大切であつ

た。彼の細君に対する基調は、全<sup>まづたく</sup>その解決一つでちゃんと定められなければならなかった。今よりずっと単純であった昔、彼は一函に細君の不可思議な挙動を、病のためとのみ信じ切っていた。その時代には発作の起るたびに、神の前に己<sup>おの</sup>れを懺悔<sup>ざんげ</sup>する人の誠を以て、彼は細君の膝下<sup>しつか</sup>に跪<sup>ひざま</sup>ずいた。彼はそれを夫として最も親切でまた最も高尚な処置と信じていた。

「今だつてその原因が判然<sup>はつきり</sup>分りさえすれば」

彼にはこういう慈愛の心が充ち満ちていた。けれども不幸にしてその原因は昔のように単純には見えなかった。彼はいくらでも考えなければならなかった。到底解決の付かない問題に疲れて、とろとろと眠るとまたすぐ起きて講義をしに出掛ければならなかった。彼は昨夕<sup>ゆうべ</sup>の事について、ついに一言<sup>ひとこと</sup>も細君に口を利く機会を得なかった。細君も日の出と共にそれを忘れてしまったような顔をしていた。

## 五十五

こういう不愉快な場面の後<sup>あと</sup>には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入<sup>はい</sup>つて来た。

二人は何時となく普通夫婦の利くような口を利き出した。

けれども或時の自然は全くの傍観者に過ぎなかった。夫婦はどこまで行っても背中合せのまままで暮した。二人の関係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ帰れといった。細君の方ではまた帰ろうが帰るまいがこつちの勝手だという顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰り返して憚らなかつた。

「じゃ当分子供を伴れて宅へ行つていきましょう」

細君はこういつて一旦里へ帰つた事もあつた。健三は彼らの食料を毎月送つて遣るといふ条件の下に、また昔のような書生生活に立ち帰れた自分を喜んだ。彼は比較的広い屋敷に下女とたつた二人ぎりになつたこの突然の変化を見て、少しも淋しいとは思わなかつた。

「ああ晴々して好い心持だ」

彼は八畳の座敷の真中に小さな餉台を据えてその上で朝から夕方までノートを書いた。丁度極暑の頃だったので、身体からだの強くない彼は、よく仰向あおむけになつてばたりと畳の上に倒れた。何時替えたとも知れない時代の着いたその畳には、彼の脊中せなかを蒸すような黄

色い古びが心まで透っていた。

彼のノートもまた暑苦しいほど細かな字で書き下された。蠅の頭というより外に形容のしようのないその草稿を、なるべくだけ余計拵えるのが、その時の彼に取っては、何よりの愉快であった。そして苦痛であった。また義務であった。

巢鴨の植木屋の娘とかいう下女は、彼のために二、三の盆栽を宅から持って来てくれた。それを茶の縁に置いて、彼が飯を食う時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜こんだ。けれども彼女の盆栽を軽蔑した。それはどこの縁日へ行っても、二、三十銭出せば、鉢ごと買える安価な代物だったのである。

彼は細君の事をおかして考えずにノートばかり作っていた。彼女の里へ顔を出そうなどという気はまるで起らなかった。彼女の病気に對する懸念も悉く消えてしまった。

「病気になるっても父母が付いているじゃないか。もし悪ければ何とかいつて来るだろう」

彼の心は二人一所にいる時よりも遙に平静であった。

細君の關係者に会わないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも会いに行かなかつた。その代り向うでも来なかつた。彼はたった一人で、日中の勉強につづく涼しい夜を

散歩に費やした。そうして継布のあたった青い蚊帳の中に入って寐た。

一カ月あまりすると細君が突然遣つて来た。その時健三は日のかぎった夕暮の空の下に、広くもない庭先を逍遙していた。彼の歩みが書齋の縁側の前へ来た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸の影から急に姿を現わした。

「貴夫故のようになつて下さらなくつて」

健三は細君の穿いている下駄の表が変にささくれて、その後の方が如何にも見苦しく擦り減らされているのに気が付いた。彼は憐れになつた。紙入の中から三枚の一円紙幣を出して細君の手に握らせた。

「見つともないからこれで下駄でも買ったら好いだらう」

細君が帰つてから幾日目か経つた後、彼女の母は始めて健三を訪ずれた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼らを引取つてくれという主意を畳の上で布衍したに過ぎなかつた。既に本人に帰りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な挙動であつた。彼は一も二もなく承知した。細君はまた子供を連れて駒込へ歸つて来た。しかし彼女の態度は里へ行く前と毫も違つていなかつた。健三は心のうちで彼女の母に騙されたような気がした。

こうした夏中の出来事を自分だけで繰り返して見るたびに、彼は不愉快になった。これが何時まで続くのだろうかと考えたりした。

## 五十六

同時に島田はちよいちよい健三の所へ顔を出す事を忘れなかった。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれっきりだという懸念がなおさら彼を蒼蠅くした。健三は時々書齋に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかった。

「好い紙入ですね。へええ。外国のものはやっぱりどこか違いますね」

島田は大きな二つ折を手にとって、さも感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。

「失礼ながらこれでどの位します。あちらでは」

「たしか十志シリンクだつたと思います。日本の金にすると、まあ五円位なものでしょう」

「五円？——五円は随分好い価ねですね。浅草あさくさの黒船町くろふねぢやうに古くから私の知わたしつてる袋物屋があるが、彼所あそこならもつとずつと安く拵こしらえてくれますよ。こんだ要いる時にや、私が頼んで

上げましょう」

健三の紙入は何時も充実していなかった。全く空虚からの時もあった。そういう場合には、仕方がないので何時まで経つても立ち上がらなかつた。島田も何かに事寄せて尻しりを長くした。

「小遣を遣やらないうちは帰らない。厭いやな奴だ」

健三は腹の内うちで憤いらった。しかしいくら迷惑を感じても細君の方から特別に金を取つて老人に渡す事はしなかつた。細君もその位な事ならといった風をして別に苦情を鳴らさなかつた。

そうこうしているうちに、島田の態度が段々積極的になつて来た。二十、三十と纏まとつた金を、平氣に向うから請求し始めた。

「どうか一つ。私もこの年になつて倚たかる子はなし、依怙たよりにするのは貴方あなた一人なんだから」

彼は自分の言葉遣いの横着さ加減にさえ気が付いていなかつた。それでも健三がむつとして黙もくっていると、凹くぼんだ鈍い眼を狡猾こうかつらしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかつた。

「これだけの生活くらしをしていて、十や二十の金の出来ないはずはない」

彼はこんな事まで口へ出していった。

彼が帰ると、健三は厭な顔をして細君に向った。

「ありや成し崩しに己おれを侵蝕しんしょくする気なんだね。始め一度に攻め落そうとして断られたもんだから、今度は遠巻にしてじりじり寄つて来きようつてんだ。実に厭な奴だ」

健三は腹が立ちさえすれば、よく実まにとか一番いっぺんとか大おほとかいう最大級を使つて鬱憤うっぷんの一端を洩もらしたがる男であつた。こんな点になると細君の方はしぶとい代りに大分落付だいぶんおちついていた。

「貴夫あなたが引つ掛るから悪いのよ。だから始めから用心して寄せ付けないようになされば好いのに」

健三はその位の事なら最初から心得ているといわぬばかりの様子を、むつとした頬ほおと唇くちびるとに見せた。

「絶交しようと思えば何時だつて出来るさ」

「しかし今まで付合つただけが損になるじゃありませんか」

「そりゃ何の関係もない御前から見ればそうさ。しかし己は御前とは違ちがうんだ」

細君には健三の意味が能く通じなかつた。

「どうせ貴夫の眼から見たら、妾なんぞは馬鹿でしようよ」

健三は彼女の誤解を正してやるのさえ面倒になつた。

二人の間に感情の行違でもある時は、これだけの会話すら交換されなかつた。彼は島の後影を見送つたまま黙つてすぐ書齋へ入つた。そこで書物も読まず筆も執らずただ凝と坐つていた。細君の方でも、家庭と切り離されたようなこの孤独な人に何時までも構う気色を見せなかつた。夫が自分の勝手に座敷牢へ入つているのだから仕方がない位に考へて、まるで取り合はずにいた。

## 五十七

健三の心は紙屑を丸めたようにくしゃくしゃした。時によると肝癆の電流を何かの機会に应じて外へ洩らさなければ苦しくつて居堪まれなくなつた。彼は子供が母に強請つて買つてもらつた草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴飛ばして見たりした。赤ちやけた素焼の鉢が彼の思い通りにがらがらと破るのさえ彼には多少の満足になつた。

けれども残酷たらしく摧かれたその花と茎の憐れな姿を見るや否や、彼はすぐまた一種の果敢ない気分はかに打ち勝たれた。何にも知らない我子の、嬉しがっている美しい慰みを、無慈悲に破壊したのは、彼らの父であるという自覚は、なおさら彼を悲しくした。彼は半ば自分の行為を悔いた。しかしその子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。

「己の責任じゃない。必竟こんな氣違じみた真似を己にさせるものは誰だ。そいつが悪いんだ」

彼の腹の底には何時でもこういう弁解が潜んでいた。

平静な会話は波だった彼の氣分を沈めるに必要であった。しかし人を避ける彼に、その会話の届きようはずはなかつた。彼は一人いて一人自分の熱で燻ぶるような心持がした。常でさえ有難くない保険会社の勧誘員などの名刺を見ると、大きな声をして罪もない取次の下女を叱った。その声は玄関に立っている勧誘員の耳にまで明らかに響いた。彼はあとで自分の態度を恥た。少なくとも好意を以て一般の人類に接する事の出来ない己れを怒った。同時に子供の植木鉢を蹴飛ばした場合と同じような言訳を、堂々と心の裡で読み上げた。

「己おれが悪いのじゃない。己おれの悪くない事は、仮令たとひあの男に解とつていなくつても、己おれには能よく解とつている」

無信心な彼はどうしても、「神には能よく解とつている」という事が出来なかつた。もしそういい得たならばどんなに仕合せだろうという気さえ起らなかつた。彼の道徳は何時でも自己に始まつた。そうして自己に終るぎりであつた。

彼は時々金の事を考えた。何故物質的の富を目標めやすとして今日こんにちまで働いて来なかつたのだらうと疑う日もあつた。

「己おれだつて、専門にその方ばかり遣やりや」

彼の心にはこんな己惚おのぼれもあつた。

彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮し向に悩んでいるのを気の毒に思った。極めて低級な慾望で、朝から晩まで齷齪あくせくしているような島田をさえ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。そうして金より外には何にも欲しくないのだ」

こう考えて見ると、自分が今まで何をして来たのか解らなくなつた。

彼は元来儲もうける事ことの下手へたな男であつた。儲けられてもその方に使う時間を惜がる男で

あつた。卒業したてに、悉く他の口を断つて、ただ一つの学校から四十円貰つて、それで満足していた。彼はその四十円の半分を阿爺に取られた。残る二十円で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚げばかり食つていた。しかし彼はその間に遂に何事も仕出かさなかつた。

その時分の彼と今の彼とは色々な点において大分變つていた。けれども經濟に余裕のないのと、遂に何事も仕出かさないので、どこまで行つても變りがなさそうに見えるた。

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうちどつちかに中途半端な自分を片付けたくなつた。しかし今から金持になるのは迂闊な彼に取つてもう遅かつた。偉くなるうとすればまた色々な塵勞が邪魔をした。その塵勞の種をよくよく調べて見ると、やつぱり金のないのが大原因になつていた。どうして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入つて来るにはまだ大分間があつた。

健三は外国から帰つて来た時、既に金の必要を感じた。久しぶりにわが生れ故郷の東京に新しい世帯を持つ事になった彼の懐中には一片の銀貨さえなかった。

彼は日本を立つ時、その妻子を細君の父に託した。父は自分の邸内にある小さな家を空けて彼らの住居に充てた。細君の祖父母が亡くなるまでいたその家は狭いながらさほど見苦しくもなかった。張交の襖には南湖の画だの鵬齋の書だの、すべて亡くなつた人の趣味を偲しのばせる記念と見るべきものさえ故の通り貼り付けてあつた。

父は官吏であつた。大して派出はでな暮しの出来る身分ではなかつたけれども、留守中手元に預かつた自分の娘や娘の子に、苦しい思いをさせるほど窮してもいなかつた。その上健三の細君へは月々いくらかの手当が公けから下りた。健三は安心してわが家族を後に遺した。

彼が外国にいるうち内閣が變つた。その時細君の父は比較的 안전한閑職からまた引張出されて劇はげしく活動しなければならぬ或位置あるに就いた。不幸にしてその新しい内閣はすぐ倒れた。父は崩壊の渦の中に捲まき込まれなければならなかつた。

遠い所でこの変化を聴いた健三は、同情に充ちた眼を故郷の空に向けた。けれども細君の父の経済状態に関しては別に顧慮する必要のないものとして、殆ほとんど心を悩ませな

かった。

迂闊な彼は帰つてからも其所に注意を払わなかつた。また氣も付かなかつた。彼は細君が月々貰う二十円だけでも子供二人に下女を使つて充分遣つて行ける位に考へていた。

「何しろ家賃が出ないんだから」

こんな呑気な想像が、實際を見た彼の眼を驚愕で丸くさせた。細君は夫の留守中に自分の不断着をことごとく着切つてしまつた。仕方がないので、しまいには健三の置いて行つた地味な男物を縫い直して身に纏つた。同時に蒲団からは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍に見ている父はどうして遣る訳にも行かなかつた。彼は自分の位地を失つた後、相場に手を出して、多くもない貯蓄を悉く亡くしてしまつたのである。

首の回らないほど高い襟を掛けて外国から帰つて来た健三は、この慘澹な境遇に置かれたわが妻子を黙つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーのために手非道く打ち据えられた。彼の唇は苦笑する勇氣さえ有たなかつた。

その内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買つて来なかつた彼の荷物は、書籍だけであつた。狭苦しい隠居所のなかで、彼はその箱の蓋さえ開ける事の出来ないのを馬鹿ら

しく思った。彼は新しい家を探し始めた。同時に金の工面もしなければならなかった。

彼は唯一の手段として、今まで継続して来た自分の職を辞した。彼はその行為に伴なって起る必然な結果として、一時賜金を受取る事が出来た。一年勤めれば役をやめた時に月給の半額をくれるという規定に従って彼の手に入ったその金額は、無論大したものではなかった。けれども彼はそれで漸と日常生活に必要な家具家財を調べた。

彼は僅ばかりの金を懐にして、或る古い友達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。その友達がまた品物の如何にかかわらずむやみに価値切り倒す癖を有っているので、彼はただ歩くために少なからぬ時間を費やさされた。茶盆、烟草盆、火鉢、井鉢、眼に入るものはいくらでもあったが、買えるのは滅多に出て来なかった。これだけに負けて置けと命令するようにいって、もし主人がその通りにしないと、友達は健三を店先に残したまま、さつさと先へ歩いて行った。健三も仕方なしに後を追懸なければならなかった。たまに愚図々々していると、彼は大きな声を出して遠くから健三を呼んだ。彼は親切な男であった。同時に自分の物を買うのか他の物を買うのか、その区別を弁えていないように猛烈な男であった。

健三はまた日常使用する家具の外に、本棚だの机だのを新調しなければならなかった。彼は洋風の指物を渡世にする男の店先に立って、しきりに算盤を弾く主人と談判をした。

彼の誂えた本棚には硝子戸も後部も着いていなかった。塵埃の積る位は懷中に余裕のない彼の意とする所ではなかった。木がよく枯れていないので、重い洋書を載せると、棚板が気の引けるほど撓った。

こんな粗末な道具ばかりを揃えるのにさえ彼は少からぬ時間を費やした。わざわざ辞職して貰った金は何時の間にかもうなくなっていた。迂闊な彼は不思議そうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。そうして外国にいる時、衣服を作る必要に逼られて、同宿の男から借りた金はどうして返して好いか分らなくなってしまったように思いつ出した。

そこへその男からもし都合が付くなら算段してもらいたいという催促状が届いた。健三は新らしく拵えた高い机の前に坐って、少時彼の手紙を眺めていた。

僅わずかの間とはいいなから、遠い国で一所いっしょに暮したその人の記憶は、健三に取つて淡い新しさを帯びていた。その人は彼と同じ学校の出身であつた。卒業の年もそう違わなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調のためという名義もとの下に、官命で遣やつて来たその人の財力と健三の給費との間には、殆ほとんど比較にならないほどの懸隔があつた。

彼は寢室の外に応接間も借りていた。夜になると繻子しゆすで作つた刺繡ぬいとりのある綺麗きれいな寢衣ナイトガウンを着て、暖かそうに暖炉の前で書物などを読んでいた。北向の狭苦しい部屋で押し込められたように凝じつと竦すくんでいる健三は、ひそかに彼の境遇つらやを羨んだ。

その健三には昼食ちゆうじきを節約した憐あわれな経験さえあつた。ある時の彼は表へ出た帰掛かえりがけに途中で買ったサンドウィッチを食いながら、広い公園の中を目的めあてもなく歩いた。斜めに吹きかける雨を片々かたかたの手に持った傘で防よげつつ、片々の手で薄く切つた肉と麵麩パンを何度にも頬張ほおばるのが非常に苦しかった。彼は幾たびか其所そこにあるベンチへ腰を卸おろそうとしては躊躇ちゆうちよした。ベンチは雨のために悉ことごとく濡ぬれていたのである。

ある時の彼は町で買って来たビスケットの缶を午ひるになると開いた。そうして湯も水も吞のまずに、硬もろくて脆もろいものをぼりぼり噛かみ搥くだいては、生唾なまつばきの力で無理に嚙のみ下くだした。

ある時の彼はまた馭者ぎよしやや労働者ろうどうしやと一所いこに如何いかわしい一膳飯屋いちぜんめしやで形かたばかりの食事を済すました。其所こゝの腰掛うしろの後部うしろは高い屏風びょうぶのように切立きつたっているので、普通の食堂しょくどうの如ごとく、広い室へやを一目に見渡す事は出来なかつたが、自分と一列いっけつに並んでゐるものの顔だけは自由に眺められた。それは皆みなな何時湯いずむに入いつたか分らない顔であつた。

こんな生活くわんごをしている健三けんざうが、この同宿どうしゆくの男おとこの眼まなこにはさも氣きの毒どくに映うつつたと見えて、彼は能よく健三けんざうを午餐ひるめしに誘いひ出した。錢湯せんとうへも案内案内した。茶ちやの時刻じこくには向むかうから呼びよびに来た。健三けんざうが彼かれから金かねを借かりたのはこうして彼かれと大分たいぶん懇意こんいになつた時の事ことであつた。

その時とき彼は反故ほごでも棄すてるように無雜作むざさくな態度たいどを見せて、五磅ポンドのバンクノートバンクノートを二枚にまい健三けんざうの手に渡わたした。何時返かえしてくれとは無論もちろんいいわなかつた。健三けんざうの方かたでも日本にっぽんへ歸かえつたらどうにかなるだろう位くらいに考かんへた。

日本にっぽんへ歸かえつた健三けんざうは能よくこのバンクノートの事ことを覚えていた。けれども催促状そそぐじやうを受取うけとるまでは、それほど急いそぎに返かえす必要ひつやうがでて来きようとは思おもわなかつた。行き詰きつつた彼は仕方しほうなしに、一人ひとりの旧ふるい友達の所ところへ出掛でかけて行いつた。彼かれはその友達のお大おした金持かねもちでない事ことを承知しやうちしていた。しかし自分おれよりも少しは融通りゆうつうの利きく地位ちゐにある事ことも呑み込んでいた。友達は果はして彼の請求せいきうを容ゆるめて、要いるだけの金かねを彼の前まへに揃そろえてくれた。彼は早速さつそくそれを

外国で恩を受けた人の許へ返しに行つた。新らしく借りた友達へは月に十円ずつの割で成し崩しに取ってもらふ事に極めた。

六十

こんな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の、如何にも貧弱なのに気が付いた。それでも金力を離れた他の方面において自分が優者であるという自覚が絶えず彼の心に往来する間は幸福であつた。その自覚が遂に金の問題で色々に攪き乱されてくる時、彼は始めて反省した。平生何心なく身に着けて外へ出る黒木綿の紋付さえ、無能力の証拠のように思われ出した。

「この己をまた強請りに来る奴がいるんだから非道い」

彼は最も質の悪いその種の代表者として島田の事を考えた。

今の自分がどの方角から眺めても島田より好い社会的地位を占めているのは明白な事実であつた。それが彼の虚栄心に少しの反響も与えないのもまた明白な事実であつた。昔し自分を呼び捨てにした人から今となつて鄭寧な挨拶を受けるのは、彼に取つて何の

満足にもならなかった。小遣こづかいの財源のように見込まれるのは、自分を貧乏人と見倣みなしている彼の立場から見て、腹が立つだけであった。

彼は念のために姉の意見を訊たずねて見た。

「一体どの位困こまってるんでしょね、あの男は」

「そうさね。そう度々無心をいつて来るようじゃ、随分苦しいのかも知れないね。だけど健ちゃんだってそうそう他ひとにばかり貢みついでいた日にゃ際限がないからね。いくら御金が取れたって」

「御金がそんなに取れるように見えますか」

「だって宅うちなんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れる方じゃないか」

姉は自分の宅うちの活計くわしを標準ひょうじゆんにしていた。相変らず口数の多い彼女は、比田ひだが月々貰もらうものを満足に持つて帰かへった例たとのない事や、俸給ほうきよの少ない割わりに交際費こうさいひの要いる事や、宿直しゆくちくが多いので弁当べんたうだけでも随分たかの額のぼに上のぼる事や、毎月の不足はやつと盆暮ぼんぼの賞与しょうよで間に合あわせている事などを詳しく健三けんさんに話して聞かせた。

「その賞与しょうよだって、そっくり私あたしの手に渡わたしてくれるんじゃないんだからね。だけど近頃まかじゃ私たち二人はまあ隠居いんこ見たよなもの、月々食料しょくりょうを彦ひこさんの方かたへ遣やつて賄まかなつて

もらつてるんだから、少しは楽にならなけりやならない訳さ」

養子と経済を別々にしながら一所の家に住んでいた姉夫婦は、自分たちの搗いた餅だの、自分たちの買った砂糖だのという特別な食物を有つていた。自分たちの所へ来た客に出す御馳走などもきつと自分たちの懐中から払う事に行っているらしかった。健三は殆んど考えの及ばないような眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に存在しているこの一家の経済状態を眺めた。しかし主義も理窟も有たない姉にはまたこれほど自然な現象はなかつたのである。

「健ちゃんなんざ、こんな真似をしなくつても済むんだから好いやあね。それに腕があるんだから、稼ぎさいすりやいくらでも欲しいだけの御金は取れるしさ」

彼女のいう事を黙つて聞いていると、島田などはどこへ行つたか分らなくなつてしまいがちであつた。それでも彼女は最後に付け加えた。

「まあ好いやね。面倒臭くなつたら、その内都合の好い時に上げましようとか何とかいつて帰してしまえば。それでも蒼蠅いなら留守を御遣いよ。構う事はないから」

この注意は如何にも姉らしく健三の耳に響いた。

姉から要領を得られなかつた彼はまた比田を捉まえて同じ質問を掛けて見た。比田は

ただ、大丈夫というだけであつた。

「何しろ故もとの通りあの地面と家作かざくを有つてるんだから、そう困つていない事は慥たしかでさあ。それに御藤さんの方へは御縫おぬいさんの方からちゃんちゃんと送金はあるしさ。何でも好い加減な事をいつて来るに違ちがないから放つて御置ごきなさい」

比田のいう事もやつぱり好い加減の範圍を脱し得うない上つ調子ちようしのものには相違ちがなかつた。

## 六十一

しまいに健三は細君に向つた。

「一体どういふんだらう、今の島田の實際の境遇つていふのは。姉あねに訊きいても比田に訊いても、本当の所よが能く分らないが」

細君は氣のなさそうに夫の顔を見上げた。彼女は産に間もない大きな腹を苦しそうに抱かかえて、朱塗しゆぬりの船底枕ふねぞこの上に乱れた頭を載せていた。

「そんなに氣になさるなら、御自分で直じかに調べて御覽になるが好いいじゃありませんか。

そうすればすぐ分るでしょう。御姉おあねえさんだつて、今あの人と交際つきあつていらつしやらないんだから、そんな確たしかな事の知れているはずがないと思ひますわ」

「己おれにはそんな暇あそびなんかはないよ」

「それじゃ放つて御置きになればそれまででしょう」

細君の返事には、男らしくもないという意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思つてゐる事でもそうむやみに口へ出していわない性質たちに出来上つた彼女は、自分の生家とと夫との面白くない間柄についてさえ、余り言葉に現わしてつべこべ弁じ立てなかつた。自分と関係のない島田の事などはまるで知らないふりをして澄ましている日も少なくなかつた。彼女の持つた心の鏡に映る神経質な夫の影は、いつも度胸のない偏窟へんくつな男であつた。

「放つて置け？」

健三は反問した。細君は答えなかつた。

「今までだつて放つて置いてるじゃないか」

細君はなお答えなかつた。健三はぷいと立つて書齋へ入つた。

島田の事に限らず二人の間にはこういう光景が能く繰り返された。その代り前後の関

係で反対の場合も時には起った。――

「御縫さんが脊髄病なんだそうだ」

「脊髄病じゃ六ずかしいでしょう」

「とても助かる見込はないんだとさ。それで島田が心配しているんだ。あの人が死ぬと柴野と御藤さんとの縁が切れてしまうから、今まで毎月送ってくれた例の金が来なくなるかも知れないってね」

「可哀想ね今から脊髄病なんぞに罹っちゃ。まだ若いんでしよう」

「己より一つ上だって話したじゃないか」

「子供はあるの」

「何でも沢山あるような様子だ。幾人だか能く訊いて見ないが」

細君は成人しない多くの子供を後へ遺して死に行く、まだ四十に充たない夫人の心持を想像に描いた。間近に逼ったわが産の結果も新たに氣遣われ始めた。重そうな腹の前の見ながら、それほど心配もしてくれない男の氣分が、情なくもありまた羨ましくもあつた。夫はまるで氣が付かなかつた。

「島田がそんな心配をするのも必竟は平生が悪いからなんだろうよ。何でも嫌われてい

るらしいんだ。島田にいわせると、その柴野という男が酒食いで喧嘩早くつて、それで何時まで経つても出世が出来なくつて、仕方がないんだそうだけれども、どうもそればかりじゃないらしい。やっぱり島田の方が愛想を尽かされているに違いないだ」

「愛想を尽かされなくつたつて、そんなに子供が沢山あっちゃどうする事も出来ないでしよう」

「そうさ。軍人だから大方己と同じように貧乏しているんだらうよ」

「一体あの人はどうしてその御藤さんて人と——」

細君は少し躊躇した。健三には意味が解らなかつた。細君はいい直した。

「どうしてその御藤さんて人と懇意になつたんでしよう」

御藤さんがまだ若い未亡人であつた頃、何かの用で扱所へ出なければならぬ事の起つた時、島田はそういう場所へ出つけない女一人を、気の毒に思つて、色々親切に世話をして遣つたのが、二人の間に關係の付く始まりだと、健三は小さい時分に誰かから聴いて知つていた。しかし恋愛という意味をどう島田に應用して好いか、今の彼には解らなかつた。

「慾も手伝つたに違ないね」

細君は何ともいわなかった。

六十二

不治ふじの病気に悩まされているという御縫さんについての報知たよりが健三の心を和やわらげた。何年ぶりにも顔を合せた事のない彼とその人とは、度々会わなければならなかった昔でさえ、殆ほとんど親しく口を利いた例たゆしがなかった。席に着くときも座を立つときも、大抵は黙礼を取り換わせるだけで済ましていた。もし交際という文字をこんな間柄にも使い得るならば、二人の交際は極めて淡くそうして軽いものであった。強烈な好い印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁たぐされていないその人の面影おもかげは、島田や御常のそれよりも、今の彼に取って遙かに尊たっとかった。人類に対する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から唆そそり得る点において。また漠然として散漫な人類を、比較的判明はつきりした一人の代表者に縮めてくれる点において。——彼は死のうとしているその人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知れない御縫さんの死

は、狡猾な島田にまた彼を強請る口実を与えるに違なかつた。明らかにそれを予想した彼は、出来る限りそれを避けたいと思つた。しかし彼はこの場合どうして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂するまで行くより外に仕方がない」

彼はこう観念した。彼は手を拱いで島田の来るのを待ち受けた。その島田の来る前に突然彼の敵の御常が訪ねて来ようとは、彼も思い掛けなかつた。

細君は何時もの通り書齋に坐っている彼の前に出て、「あの波多野つて御婆さんがとうとう遣つて来ましたよ」といつた。彼は驚ろくよりもむしろ迷惑そうな顔をした。細君にはその態度が愚図々々している臆病もののように見えた。

「御会いになりますか」

それは、会うなら会う、断るなら断る、早くどつちかに極めたら好かろうという言葉の遣い方であつた。

「会うから上げる」

彼は島田の来た時と同じ挨拶をした。細君は重苦しうに身を起して奥へ立つた。座敷へ出た時、彼は粗末な衣服を身に纏つて、丸まつちく坐っている一人の婆さんを

見た。彼の心で想像していた御常とは全く変っているその質朴な風采が、島田よりも遙かに強く彼を驚ろかした。

彼女の態度も島田に比べるとむしろ反対であった。彼女はまるで身分の懸隔でもある人の前へ出たような様子で、鄭寧に頭を下げた。言葉遣も慇懃を極めたものであった。

健三は小供の時分能く聞かされた彼女の生家の話を思い出した。田舎にあったその住居も庭園も、彼女の叙述によると、善を尽し美を尽した立派なものであった。床の下を水が縦横に流れているという特色が、彼女の何時でも繰り返す重要な点であった。南天の柱——そういう言葉もまだ健三の耳に残っていた。しかし小さい健三はその宏大な屋敷がどこの田舎にあるのかまるで知らなかった。それから一度も其所へ連れて行かれた覚がなかった。彼女自身も、健三の知っている限り、一度も自分の生れたその大きな家へ帰った事がなかった。彼女の性格を臆気ながら見抜くように、彼の批評眼がだんだん肥えて来た時、彼はそれもまた彼女の空想から出る例の法螺ではないかと考え出した。

健三は自分を出来るだけ富有に、上品に、そして善良に、見せたがったその女と、今彼の前に畏まって坐っている白髪頭の御婆さんとを比較して、時間の齎した対照に不思議そうな眼を注いだ。

御常は昔から肥り肉の女であつた。今見る御常も依然として肥つていた。どつちかというと、昔よりも今の方がかえつて肥つてはいはしまいかと疑れる位であつた。それにもかかわらず、彼女は全く変化していた。どこから見ても田舎育ちの御婆さんであつた。多少誇張していえば、籠に入れた麦焦しを背中へ脊負つて近在から出て来る御婆さんであつた。

六十三

「ああ変つた」

顔を見合せた刹那に双方は同じ事を一度に感じ合つた。けれどもわざわざ訪ねて来た御常の方には、この変化に対する予期と準備が充分にあつた。ところが健三にはそれが殆んど欠けていた。従つて不意に打たれたものは客よりもむしろ主人であつた。それでも健三は大して驚ろいた様子を見せなかつた。彼の性質が彼にそうしると命令する外に、彼は御常の技巧から溢れ出る戯曲的動作を恐れた。今更この女の遣る芝居を事新らしく観せられるのは、彼に取つて堪えがたい苦痛であつた。なるべくなら彼は先方の弱

点を未然に防ぎたかつた。それは彼女のためでもあり、また自分のためでもあつた。

彼は彼女から今までの経歴をあらまし聞き取つた。その間には人世と切り離す事の出  
来ない多少の不幸が相応に纏綿てんめんしているらしく見えた。

島田と別れてから二度目に嫁かたづいた波多野と彼女との間にも子が生れなかつたので、  
二人は或所から養女を貰もらつて、それを育てる事にした。波多野が死んで何年目にか、あ  
るいはまだ生きてゐる時分にか、それは御常もいわなかつたが、その貰い娘に養子が来  
たのである。

養子の商売は酒屋であつた。店は東京のうちでも随分繁華な所にあつた。どの位な程  
度の活計くわしをしていたものか能く分らないが、困つたとか、窮したとかいう弱い言葉は御  
常の口を洩もれなかつた。

その内養子が戦争に出て死んだので、女だけでは店が持ち切れなくなつた。親子はや  
むをえずそれを畳んで、郊外近くに住んでゐる或身縁みよりを頼りに、ずっと辺鄙へんびな所へ引越  
した。其所そこで娘に二度目の夫が出来るまでは、死んだ養子の遺族へ毎年下がる扶助料だ  
けで活計くわしを立てて行つた。……

御常の物語りは健三の予期に反してむしろ平静であつた。誇張した身ぶりだの、仰山

な言葉遣だの、当込あてこみの台詞せりふだのは、それほど多く出て来なかつた。それにもかかわらず彼は自分とこの御婆おばあさんの間に、少しの気脈も通じていない事に気が付いた。

「ああそうですか、それはどうも」

健三の挨拶あいさつは簡単であつた。普通の受答えとしても短過ぎるこの一句を彼女に与えたりで、彼は別段物足りなさを感じ得なかつた。

「昔の因果が今でもやっぱり崇たつているんだ」

こう思った彼はさすがに好い心持がしなかつた。どっちかというど泣きたがらない質ちに生れながら、時々は何故なぜ本当に泣ける人や、泣ける場合が、自分の前に出て来てくれないのかと考えるのが彼の持前であつた。

「己おれの眼は何時でも涙が湧わいて出るように出来ているのに」

彼は丸まっちくなつて座蒲団ざぶとんの上に坐すわつて御婆さんの姿を熟視した。そうして自分の眼に涙を宿す事を許さない彼女の性格を悲しく観じた。

彼は紙入の中にあつた五円紙幣を出して彼女の前に置いた。

「失礼ですが、車へでも乗つて御帰り下さい」

彼女はそういう意味で訪問したのではないといつて一応辞退した上、健三からの贈り

ものを受け納めた。気の毒な事に、その贈り物の中には、疎い同情が入っているだけで、露わな真心は籠こもっていないかった。彼女はそれを能く承知しているように見えた。そうして何時の間にか離れ離れになった人間の心と心は、今更取り返しの付かないものだから、諦あきらめるより外に仕方がないという風にふるまった。彼は玄関に立って、御常の帰って行く後姿を見送った。

「もしあの憐あわれな御婆さんが善人であつたなら、私は泣く事が出来たろう。泣けないまでも、相手の心をもっと満足させる事が出来たろう。零落した昔しの養い親を引き取って死水しにみずを取って遣る事も出来たろう」

黙ってこう考えた健三の腹の中は誰も知る者がなかった。

## 六十四

「とうとう遣やつて来たのね、御婆おばあさんも。今までは御爺おじいさんだけだったのが、御婆さんと二人になったのね。これからは二人ふたありに崇たられるんですよ、貴夫あなたは」

細君の言葉は珍らしく乾燥はしやいでいた。笑談じょうたんとも付かず、冷評ひやかしとも付かないその態度

が、感想に沈んだ健三の気分を不快に刺戟した。彼は何とも答えなかった。

「またあの事をいったでしよう」

細君は同じ調子で健三に訊いた。

「あの事は何だい」

「貴夫が小さいうち寐小便をして、あの御婆さんを困らしたって事よ」

健三は苦笑さえしなかった。

けれども彼の腹の中には、御常が何故それをいわなかったかの疑問が既に横わっていた。彼女の名前を聞いた刹那の健三は、すぐその弁口に思い到った位、御常は能く喋舌する女であった。ことに自分を護る事に巧みな技倆を有っていた。他の口車に乗せられやすい、また見え透いた御世辞を嬉しがりがちな健三の実父は、何時でも彼女を賞める事を忘れなかった。

「感心な女だよ。だいち身上持が好いからな」

島田の家庭に風波の起った時、彼女はあんなだけの言葉を父の前に並べ立てた。そうしてその言葉の上にまた悲しい涙と口惜しい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になってしまった。

御世辞が上手だという点において健三の父は彼の姉をも大変可愛がっていた。無心に来られるたんびに、「そうそうは己だつて困るよ」とか何とかいいながら、いつか入用だけの金子は手文庫から取出されていた。

「比田はあんな奴だが、御夏が可愛想だから」

姉の帰つた後で、父は何時でも弁解らしい言葉を傍のものに聞こえるようにいつた。

しかしこれほど父を自由にした姉の口先は、御常に比べると遥かに下手であった。真しやかという点において遠く及ばなかった。実際十六、七になった時の健三は、彼女と接触した自分以外のもので、果してその性格を見抜いたものが何人あるだろうか、一時疑つて見た位、彼女の口は旨かつた。

彼女に会うときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分この口にあつた。

「御前を育てたものはこの私だよ」

この一句を二時間でも三時間でも布衍して、幼少の時分恩になつた記憶をまた新しく復習させられるのかと思うと、彼は辟易した。

「島田は御前の敵だよ」

彼女は自分の頭の中に残っているこの古い主観を、活動写真のように誇張して、また

彼の前に露け出すに極きまっていた。彼はそれにも辟易へきえきしない訳に行かなかつた。

どっちを聴まじくにしても涙が交まじるに違ちがなかつた。彼は装飾まじ的に使用されるその涙を見るに堪えないような心持がした。彼女は話す時に姉のような大きな声を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思おもう場合には、その言葉に厭いやらしい強い力を入れた。円朝えんちょうの人情にんじょう漸ばなしに出て来る女が、長い火箸ひばしを灰の中に突き刺し突き刺し、他に騙だまされた恨うらみを述べて、相手を困らせるのとほぼ同じ態度でまた同じ口調であつた。

彼の予期が外れた時、彼はそれを仕合せと考えるよりもむしろ不思議に思おもう位、御常の性格が牢ろうとして崩くづすべからざる判明はつきりした一種の型になつて、彼の頭のどこかに入つていたのである。

細君は彼のために説明した。

「三十年近くぢかにもなる古い事じゃありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでしょう。それに大抵の人はもう忘れてしまひませあね。それから人間の性質だつて長い間には少しずつ變つて行きますからね」

遠慮、忘却、性質の変化、それらのものを前に並べて考かんえて見ても、健三には少しも合点がてんが行かなかつた。

「そんな淡泊あつさりした女じゃない」

彼は腹の中でこういわなければどうしても承知が出来なかつた。

## 六十五

御常を知らない細君はかえつて夫の執拗しつおを笑つた。

「それが貴方あなたの癖だから仕方がない」

平生彼女へいぜいの眼に映る健三の一部分はたしかにこうなのであつた。ことに彼と自分の生さ家ととの関係について、夫のこの悪い癖へきが著るしく出ているように彼女は思つていた。

「己おれが執拗しつおなのじゃない、あの女が執拗しつおなのだ。あの女と交際つきあつた事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそんなあべこべをいうのだ」

「だって現に貴夫あなたの考えていた女とはまるで違つた人になつて貴夫の前へ出て来た以上は、貴夫の方で昔の考えを取り消すのが当然じゃありませんか」

「本当に違つた人になつたのなら何時でも取り消すが、そうじゃないんだ。違つたのは上部うわべだけで腹の中は故もとの通りなんだ」

「それがどうして分るの。新らしい材料も何にもないのに」

「御前に分らないでも己にはちゃんと分ってるよ」

「随分独断的ね、貴夫も」

「批評が中<sup>あた</sup>つてさえいれば独断的で一向<sup>さしつかえ</sup>差支ないものだ」

「しかしもし中<sup>あた</sup>つていなければ迷惑する人が大分<sup>だいぶん</sup>出て来るでしょう。あの御婆<sup>おばあ</sup>さんは私<sup>わたくし</sup>と関係のない人だから、どうでも構いませんけれども」

健三には細君の言葉が何を意味しているのか能<sup>よ</sup>く解<sup>と</sup>つた。しかし細君はそれ以上何もいわなかった。腹の中で自分の父母兄弟を弁護<sup>べんご</sup>している彼女は、表向<sup>おもむき</sup>夫と遣<sup>や</sup>り合<sup>あ</sup>つて行<sup>い</sup>ける所まで行く気はなかった。彼女は理智に富<sup>た</sup>んだ性質<sup>し</sup>ではなかった。

「面倒臭<sup>めんどくさ</sup>い」

少し込み入<sup>こ</sup>つた議論の筋道<sup>たど</sup>を辿<sup>た</sup>らなければならなくなると、彼女はきつとこういって当面の問題を投<sup>な</sup>げた。そうして解決を付けるまで進まないために起る面倒臭<sup>めんどくさ</sup>さは何時<sup>いつ</sup>までも辛抱<sup>しんぱう</sup>した。しかしその辛抱<sup>しんぱう</sup>は自分自身に取<sup>と</sup>つて決して快<sup>た</sup>いものではなかった。健三から見るとなおさら心持<sup>こころもち</sup>が悪<sup>わる</sup>かった。

「執拗<sup>しつおつ</sup>だ」

「執拗だ」

二人は両方で同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合った。そうして御互に腹の中にある蟠まりわたかを御互の素振そぶりから能く読んだ。しかもその非難に理由のある事もまた御互に認め合わなければならなかった。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなった。何故行かないとも訊きかず、また時々行ってくれとも頼まずにただ黙っていた細君は、依然として「面倒臭い」を心うちの中に繰り返すぎりぎりで、少しもその態度を改めようとしなかった。

「これで沢山だ」

「己もこれで沢山だ」

また同じ言葉が双方の胸のうちでしばしば繰り返された。

それでも護謨紐ゴムヒモのように弾力性のある二人の間柄には、時により日によって多少の伸縮ぢみがあった。非常に緊張して何時切れるか分らないほどに行き詰ったかと思うと、それがまた自然の勢で徐々そそそ元へ戻って来た。そうした日ひ和よりの好い精神状態が少し継続すると、細君の唇から暖かい言葉が洩もれた。

「これは誰の子？」

健三の手を握って、自分の腹の上に載せた細君は、彼にこんな問を掛けたりした。その頃細君の腹はまだ今のようによくはなかつた。しかし彼女はこの時既に自分の胎内に蠢めき掛けていた生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に伝えるようにしたのである。

「喧嘩をするのはつまり両方が悪いからですね」

彼女はこんな事もいった。それほど自分が悪いと思っていない頑固な健三も、微笑するより外に仕方がなかつた。

「離ればばいくら親しくつてもそれぎりになる代りに、一所にいさえすれば、たとえ敵同志でもどうにかこうにかなるものだ。つまりそれが人間なんだろう」

健三は立派な哲理でも考え出したように首を捻った。

## 六十六

御常や島田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入った。

毎年時候が寒くなるときつと身体に故障の起る兄は、秋口からまた風邪を引いて一週

間ほど局を休んだ揚句、気分が悪いのを押し出出勤した結果、幾日経つても熱が除れないで苦しんでいた。

「つい無理をするもんだから」

無理をして月給の寿命を長くするか、養生をして免職の時期を早めるか、彼には二つの内どっちかを拵ぶより外に仕方がないように見えたのである。

「どうも肋膜炎らしいっていうんだがね」

彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何人よりも強い畏怖の念を抱いていた。そうして何人よりも強い速度で、その肉塊を減らして行かなければならなかった。

健三は細君に向っていった。――

「もう少し平気で休んでいられないものかな。責めて熱の失くなるまででも好いから」  
「そうしたいのは山々なんでしょうけれども、やッぱりそうは出来ないんですよ」

健三は時々兄が死んだあとの家族を、ただ活計の方面からのみ眺める事があつた。彼はそれを残酷ながら自然の眺め方として許していた。同時にそういう観察から逃れる事の出来ない自分に対して一種の不快を感じた。彼は苦い塩を嘗めた。

「死にやしまいな」

「まさか」

細君は取り合わなかった。彼女はただ自分の大きな腹を持って余してばかりいた。生家と縁故のある産婆が、遠い所から俵に乗って時々遣て来た。彼はその産婆が何をしに来て、また何をして帰って行くのか全く知らなかった。

「腹でも揉むのかい」

「まあそうです」

細君ははかばかしい返事さえしなかった。

その内兄の熱がころりと除れた。

「御祈禱をなすつたんですって」

迷信家の細君は加持、祈禱、占い、神信心、大抵の事を好いていた。

「御前が勧めたんだらう」

「いいえそれが私なんぞの知らない妙な御祈禱なのよ。何でも髮剃を頭の上へ載せて遣るんですって」

健三には髮剃の御蔭で、しこじらした体熱が除れようとも思えなかった。

「気のせいで熱が出るんだから、気のせいでそれがまた直除れるんだらうよ。髮剃でなくったって、杓子しゃくしでも鍋蓋なべふたでも同じ事さ」

「しかしいくら御医者おんいしやの薬を飲んでも癒なほらないもんだから、試しに遣なつて見たらどうだらうって勧められて、とうとう遣る気になつたんですって、どうせ高い御祈祷おんごらう代を払つたんじゃないんでしよう」

健三は腹の中で兄を馬鹿だと思つた。また熱の除れるまで薬を飲む事の出来ない彼の内状を気の毒に思つた。髮剃の御蔭でも何でも熱が除れさえすればまず仕合せだとも思つた。

兄が癒ると共に姉がまた喘息ぜんそくで悩み出した。

「またかい」

健三は我知らずこういつて、ふと女房の持病を苦しめない比田の様子を想い浮べた。

「しかし今度こんだは何時もより重いんですって。ことによると六むずかしいかも知れないから、健三に見舞に行くようにそういつてくれつて仰おつしやいました」

兄の注意を健三に伝えた細君は、重苦しそうに自分の尻しりを畳の上に着けた。

「少し立っていると御腹おなかの具合が變になつて来て仕方がないんです。手なんぞ延ばして

棚に載っているものなんかとても取れやしません」

産が逼るほど妊婦は運動すべきものだ位に考えていた健三は意外な顔をした。下腹部だの腰の周囲の感じがどんなに退儀であるかは全く彼の想像の外にあつた。彼は活動を強いる勇氣も自信も失なつた。

「私とても御見舞には参れませんよ」

「無論御前は行かなくつても好い。己が行くから」

## 六十七

その頃の健三は宅へ帰ると甚しい倦怠を感じた。ただ仕事をした結果とばかりは考えられないこの疲労が、一層彼を出不精にした。彼はよく昼寐をした。机に倚つて書物を眼の前に開けている時ですら、睡魔に襲われる事がしばしばあつた。愕然として仮寐の夢から覚めた時、失われた時間を取り返さなければならぬという感じが一層強く彼を刺撃した。彼は遂に机の前を離れる事が出来なくなつた。括り付けられた人のように書齋に凝としていた。彼の良心はいくら勉強が出来なくつても、いくら愚図々々していて

も、そういう風に凝と坐すわっていると彼に命令するのである。

かくして四、五日は徒いとすらに過ぎた。健三が漸よつやく津つの守坂かみざかへ出掛けた時は六むずかしいかも知れないといった姉が、もう回復期に向つていた。

「まあ結構です」

彼は尋常の挨拶あいさつをした。けれども腹の中では狐きつねにでも抓つままれたような気がした。

「ああ、でも御蔭ごかげさまでね。——姉さんなんざあ、生きていたつてどうせ他の厄介ひとになるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減な時分に死ぬと丁度好いんだけれども、やつぱり持つて生れた寿命だと見えてこればかりは仕方がない」

姉は自分のいう裏を健三から聴きたい様子であった。しかし彼は黙つて烟草タバコを吹かしていた。こんな些細ささいの点にも姉弟きょうだいの気風の相違は現われた。

「でも比田のいるうちは、いくら病身でも無能やくざでも私あたしが生きていて遣やらないと困るからね」

親類は亭主孝行という名で姉を評し合つていた。それは女房の心尽しなどに対して余りに無頓着むとんじやく過ぎる比田を一方に置いてこの姉の態度を見ると、むしろ気の毒な位親切だったからである。

「私あたしや本当に損な生れ付でね。良人うちとはまるであべこべなんだから」  
姉の夫思おぼいは全く天性に違ちがなかつた。けれども比田ひだが時として理の徹とらない我儘わがままをい募もるように、彼女は訳の解とらない実意立じついだてをしてかえつて夫を厭いやがらせる事があつた。それに彼女は縫針ぬいはりの道を心得こころていなかつた。手習てならひをさせても遊芸を仕込しこんでも何一つ覚える事の出来なかつた彼女は、嫁に来てから今日こんにちまで、ついぞ夫の着物一枚縫ぬつた例ためしがなかつた。それでいて彼女は人一倍勝気な女であつた。子供の時分強情を張たつた罰として土蔵の中に押し込められた時、小用こように行きたいからは非出してくれ、もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかといつて、網戸の内外うちそとで母と論判をした話はいまだに健三の耳に残のこつていた。

そう思うと自分とは大變懸け隔へつたようである、その実どこか似通つた所のあるこの腹違はらちがひの姉の前に、彼は反省を強しいられた。

「姉はただ露骨ろこつなだけなんだ。教育の皮を剥むけば己おれだつて大した変りはないんだ」

平生へいぜいの彼は教育の力を信じ過ぎていた。今の彼はその教育の力でどうする事も出来ない野生的な自分の存在を明らかに認めた。かく事実の上において突然人間を平等びんぼうに視みた彼は、不断から輕蔑けいべつしていた姉に対して多少極きまりの悪い思おもひをしなければならなかつた。

しかし姉は何にも気が付かなかつた。

「御住おすみさんはどうです。もう直じき生れるんだらう」

「ええ落おっこちそうな腹をして苦しがつています」

「御産は苦しいもんだからね。私あたしも覚があるが」

久しく不妊性と思われていた姉は、片付いて何年目かになって始めて一人の男の子を生んだ。年齒としを取つてからの初産ういざんだったので、当人も傍はたのものも大分だいぶん心配した割に、それほどの危険もなく胎児を分娩ぶんべんしたが、その子はすぐ死んでしまった。

「軽はずみをしないように用心おしよ。——宅あれでも彼あ子がいると少しは依怙たよりになるんだがね」

## 六十八

姉の言葉には昔し亡くしたわが子に対する思い出の外に、今の養子に飽き足らない意味も含まれていた。

「彦ちゃんがもう少し確乎しっかりしていてくれると好いいんだけれども」

彼女は時々傍はたのものにこんな述懐を洩もらした。彦ちゃんは彼女の予期するような大した働き手でないにせよ、至極しごく穏やかな好人物であった。朝っぱらから酒を飲まなくっちゃいられない人だという噂うわさを耳にした事はあるが、その他の点たについて深い交渉を有もたない健三には、どこが不足なのか能く解よらなかつた。

「もう少し御金を取つてくれると好いんだけどもね」

無論彦ちゃんはは養父母を樂たのみに養えるだけの収入を得ていなかつた。しかし比田も姉も彼を育てた時の事を思えば、今更そんな贅沢ぜいたくのいえた義理でもなかつた。彼らは彦ちゃんをどこの学校へも入れて遣やらなかつた。僅わずかばかりでも彼が月給を取るようになったのは、養父母に取つてむしろ僥倖ぎやうじやうといわなければならなかつた。健三は姉の不平に対して眼に見えるほどの注意を払いかねた。昔し死んだ赤ん坊については、なおの事同情が起らなかつた。彼はその生顔いきがおを見た事がなかつた。その死顔しにかおも知らなかつた。名前さえ忘れてしまつた。

「何とかいいましたね、あの子は」

「作太郎さくたろうさ。あすこに位牌いはいがあるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り抜いて拵こしらえた小さい仏壇を指し示した。薄暗いば

かりでなく小汚こぎたないその中には先祖からの位牌が五つ六つ並んでいた。

「あの小さい奴がそうですか」

「ああ、赤ん坊のだからね、わざと小さく持えたんだよ」

立って行って戒名かいみょうを読む気にもならなかった健三は、やはり故もとの所に坐すわったまま、黒塗くろぬりの上に金字で書いた小形の札のようなものを遠くから眺めていた。

彼の顔には何の表情もなかった。自分の二番目の娘が赤痢しかに罹かかって、もう少して命を奪とられるところだった時の心配と苦痛さえ聯想れんそうし得えなかった。

「姉さんもこんなじゃ何時あなるか分らないよ、健ちゃん」

彼女は仏壇から眼を放して健三を見た。健三はわざとその視線を避けた。

心細い事を口にしながら腹の中では決して死ぬと思っていない彼女のいい草には、世間並の年寄と少し趣を異にしている所があった。慢性の病気が何時までも継続するよう  
に、慢性の寿命がまた何時までも継続するだろうと彼女には見えたのである。

其所そこへ彼女の癩性かんじょうが手伝った。彼女はどんなに氣息いきぐる苦しくつても、いくら他ひとから忠告されても、どうしても居いながら用を足そうといわなかった。這はうようにしてでも廁かわやまで行った。それから子供の時からの習慣で、朝はきつと肌拔はだぬぎになつて手水ちようずを遣つかった。寒い

風が吹こうが冷たい雨が降ろうが決してやめなかつた。

「そんな心細い事をいわずに、出来るだけ養生をしたら好いでしよう」

「養生はしているよ。健ちゃんから貰う御小遣の中で牛乳だけはきつと飲む事に極めて  
いるんだから」

田舎ものが米の飯を食うように、彼女は牛乳を飲むのが凡ての養生でもあるかのよ  
うな事をいった。日に日に損なわれて行くわが健康を意識しつつ、この姉に養生を勧め  
る健三の心の中にも、「他事じゃない」という馬鹿らしさが遠くに働らいていた。

「私も近頃は具合が悪くってね。ことによると貴方より早く位牌になるかも知れません  
よ」

彼の言葉は無論根のない笑談として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと  
笑った。しかし自ら健康を損いつつあると確に心得ながら、それをどうする事も出来な  
い境遇に置かれた彼は、姉よりもかえって自分の方を憐んだ。

「己のは黙って成し崩しに自殺するのだ。気の毒だといってくれるものは一人もありや  
しない」

彼はそう思つて姉の凹み込んだ眼と、瘦けた頬と、肉のない細い手とを、微笑しなが

ら見ていた。

六十九

姉は細かい所に気の付く女であった。従つて細かい事にまでよく好奇心を働らかせたがった。一面において馬鹿正直な彼女は、一面においてまた変な廻り気を出す癖を有つていた。

健三が外国から帰つて来た時、彼女は自家の生計について、他の同情に訴え得るような憐れっぽい事実を彼の前に並べた。しまいに兄の口を借りて、いくらでも好いから月々自分の小遣として送つてくれまいかという依頼を持ち出した。健三は身分相応な額を定めた上、また兄の手を経て先方へその旨を通知してもらう事にした。すると姉から手紙が来た。長さんの話では御前さんが月々いくら私に遣るといふ事だが、實際御前さんの、呉れるといった金高はどの位なのか、長さんに内所でちよつと知らせてくれないかと書いてあった。姉はこれから毎月中取次をする役に当るかも知れない兄の心事を疑ぐつたのである。

健三は馬鹿々々しく思った。腹立しくも感じた。しかし何より先に浅間あさましかつた。

「黙っている」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛あてた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、こうした彼の気分を能く現わしていた。姉はそれぎり何ともいつて来なかつた。無筆むひつな彼女は最初の手紙さえ他に頼んで書いてもらったのである。

この出来事が健三に対する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも蚊でも訊ききたがる彼女も、健三の家庭については、当り障りのない事の外、多く口を開かなかつた。健三も自分ら夫婦の間柄を彼女の前で問題にしうなどとはかつて想いたい到らなかつた。

「近頃御住さんはどうだい」

「まあ相変らずです」

会話はこの位で切り上げられる場合が多かつた。

間接に細君の病気を知っている姉の質問には、好奇心以外に、親切から来る懸念も大分交まじわつていた。しかしその懸念は健三に取つて何の役にも立たなかつた。従つて彼女の眼に見える健三は、何時も親しみがたい無愛想ぶあいそな変人に過ぎなかつた。

淋さみしい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へ北へと歩いて行つた。そうしてついぞ見た事もない新開地のような汚ない、町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の

上において、自分の今踏んでいる場所を能く弁えていた。けれども其所には彼の追憶を誘う何物も残っていないかった。過去の記念が悉く彼の眼から奪われてしまった大地の上を、彼は不思議そうに歩いた。

彼は昔あった青田と、その青田の間を走る真直な径とを思い出した。田の尽る所には三、四軒の藁葺屋根が見えた。菅笠を脱いで床几に腰を掛けながら、心太を食っている男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のように広い紙漉場があった。其所を折れ曲って町つづきへ出ると、狭い川に橋が懸っていた。川の左右は高い石垣で積み上げられているので、上から見下す水の流れには存外の距離があった。橋の袂にある古風な銭湯の暖簾や、その隣の八百屋の店先に並んでいる唐茄子などが、若い時の健三によく広重の風景画を聯想させた。

しかし今では凡てのものが夢のように悉く消え失せていた。残っているのはただ大地ばかりであった。

「何時こんなに変ったんだろう」

人間の變って行く事にのみ氣を取られていた健三は、それよりも一層劇しい自然の變り方に驚ろかされた。

彼は子供の時分比田と将棋を差した事を偶然思いだした。比田は盤に向うと、これでも所沢の藤吉さんの御弟子だからなというのが癖であった。今の比田も将棋盤を前に置けば、きつと同じ事をいいそうな男であった。

「己自身は必竟どうなるのだろう」

衰ろえるだけで案外変らない人間のさまと、変るけれども日に榮えて行く郊外の様子とが、健三に思いがけない対照の材料を与えた時、彼は考えない訳に行かなかつた。

## 七十

元氣のない顔をして宅へ帰つて来た彼の様子がすぐ細君の注意を惹いた。

「御病人はどうなの」

あるゆる人間が何時か一度は到着しなければならぬ最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞こうとするように見えた。健三は答を与える先に、まず一種の矛盾を意識した。

「何もう好いんだ。寐てはいるが危篤でも何でもないんだ。まあ兄貴に騙されたような

ものだね」

馬鹿らしいという気が幾分か彼の口振くちぶりに出た。

「騙されてもその方がいくら好いか知れやしませんわ、貴夫あなた。もしもの事でもあつて御覧なさい、それこそ……」

「兄貴が悪いんじゃない。兄貴は姉に騙されたんだから。その姉はまた病気に騙されたんだ。つまり皆な騙されているようなものさ、世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩らつたつて、決して騙されないんだからね」

「やっぱり宅うちにいないの」

「いるもんか。尤も非道もつとく悪ひどかつた時はどうか知らないが」

健三は比田の振下ぶらさげている金時計と金鎖の事を思い出した。兄はそれを天麩てんぷら羅らだろうといつて陰で評していたが、当人はどこまでも本物らしく見せびらかしたがつた。金着きんぎせにせよ、本物にせよ、彼がどこでいくらで買ったのか知るものは誰もなかつた。こういう点に掛けては無頓着むとんじやくでいられない性分の姉も、ただ好い加減にその出処を推察するに過ぎなかつた。

「月賦で買ったに違ちがないよ」

「ことによると質の流れかも知れない」

姉は聴かれもしないのに、兄に向つて色々な説明をした。健三には殆ど問題にならな  
い事が、彼らの間に想像の種を幾個でも卸した。そうされればされるほどまた比田は得  
意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さえ時々借りられてしまふくせに、姉はついに夫  
の手元に入る、または現在手元にある、金高を決して知る事が出来なかつた。

「近頃は何でも債券を二、三枚持つているようだよ」

姉の言葉はまるで隣の宅の財産でもいい中てるように夫から遠ざかつていた。

姉をこういう地位に立たせて平氣でいる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に  
違なかつた。それがやむをえない夫婦関係のように心得て辛抱している姉自身も健三に  
は分らなかつた。しかし金銭上あくまで秘密主義を守りながら、時々姉の予期に釣り合  
わないようなものを買い込んだり着込んだりして、妄りに彼女を驚ろかせたがる料簡に  
至つては想像さえ及ばなかつた。妻に対する虚栄心の発現、焦らされながらも夫を腕利  
と思ふ妻の満足。——この二つのものだけでは到底充分な説明にならなかつた。

「金の要る時も他人、病氣の時も他人、それじゃただ一所に在るだけじゃないか」

健三の謎は容易に解けなかつた。考ふる事の嫌な細君はまた何という評も加えなかつ

た。

「しかし己おれたち夫婦も世間から見れば随分變つてるんだから、そう他ひとの事ばかりとやかくいつちやいられないかも知れない」

「やっぱり同なじ事ですわ。みんな自分だけは好いと思つてるんだから」

健三はすぐ癩しやくに障つた。

「御前でも自分じゃ好いつもりでいるのかい」

「いますとも。貴夫あなたが好いと思つていらつしやる通りに」

彼らの争いは能くよこういう所から起つた。そうして折角穩やかに静まっていたる双方の心を攪かき乱した。健三はそれを慎みの足りない細君の責せめに歸した。細君はまた偏窟で強情な夫のせいだとばかり解釈した。

「字が書けなくつても、裁縫しじとが出来なくつても、やっぱり姉のような亭主孝行な女の方が己は好きだ」

「今時そんな女がどこの国にいるもんですか」

細君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないという大きな反感が横よこわつていた。

筋道の通った頭を有<sup>も</sup>っていない彼女には存外新しい点があった。彼女は形式的な昔風の倫理観に囚<sup>とら</sup>われるほど嚴重な家庭に人とならなかつた。政治家を以て任じていた彼女の父は、教育に関して殆<sup>ほと</sup>んど無定見であつた。母はまた普通の女のように八釜<sup>やかま</sup>しく子供を育て上る性質<sup>たち</sup>でなかつた。彼女は宅<sup>うち</sup>にいて比較的自由な空気を呼吸した。そうして学校は小学校を卒業したただけであつた。彼女は考えなかつた。けれども考えた結果を野性的に能<sup>よ</sup>く感じていた。

「単に夫という名前が付いているからというだけの意味で、その人を尊敬しなくてはならないと強<sup>し</sup>いられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられるだけの実質を有った人間になつて自分の前に出て来るが好<sup>い</sup>い。夫という肩書などはなくつても構<sup>かま</sup>わないから」

不思議にも学問をした健三の方はこの点においてかえつて旧式であつた。自分はおのために生きて行かなければならないという主義を実現したがりがら、夫のためにのみ存在する妻を最初から仮定して憚<sup>はば</sup>からなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根は此所にあつた。

夫と独立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。ややともすると、「女のくせに」という気になった。それが一段劇しくなると忽ち「何を生意気な」という言葉に変化した。細君の腹には「いくら女だつて」という挨拶が何時でも貯えてあつた。

「いくら女だつて、そう踏み付にされて堪るものか」

健三は時として細君の顔に出るこれだけの表情を明かに読んだ。

「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ、尊敬されたければ尊敬されるだけの人格を拵えるがいい」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理と同じものになつてしまつた。

彼らはかくして円い輪の上をぐるぐる廻つて歩いた。そうしていくら疲れても気が付かなかつた。

健三はその輪の上にはたりと立ち留る事があつた。彼の留る時は彼の激昂が静まる時

に外ならなかった。細君はその輪の上でふと動かなくなる事があった。しかし細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が融け出す時に限っていた。その時健三は漸く怒号をやめた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携えて談笑しながら、やはり円い輪の上を離れる訳に行かなかった。

細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。生憎留守だった彼は、夕暮に帰ってから細君にその話を聞いて首を傾むけた。

「何か用でもあったのかい」

「ええ少し御話ししたい事があるんですって」

「何だい」

細君は答えなかった。

「知らないのかい」

「ええ。また二、三日うちに上<sup>あが</sup>って能く御話をするからって帰りましたから、今度参<sup>ま</sup>たら直<sup>じか</sup>に聞いて下さい」

健三はそれより以上何もいう事が出来なかった。

久しく細君の父を訪ねないでいた彼は、用事のあるなしにかかわらず、向うがわざわざ

ざこつちへ出掛けて来ようなどと夢にも予期しなかった。その不審が例より彼の口数を多くする原因になった。それとは反対に細君の言葉はかえって常よりも少なかった。しかしそれは彼がよく彼女において発見する不平や無愛嬌から来る寡言とも違っていた。

夜は何時の間にやら全くの冬に変化していた。細い燈火の影を凝と見詰めていると、灯は動かないで風の音だけが烈しく雨戸に当たった。ひゆうひゆうと樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐っていた。

## 七十二

「今日父が来ました時、外套がなくなつて寒そうでしたから、貴方の古いのを出して遣りました」

田舎の洋服屋で拵えたその二重廻しは、殆んど健三の記憶から消えかかっている位古かった。細君がどうしてまたそれを彼女の父に与えたものか、健三には理解出来なかった。

「あんな汚らしいもの」

彼は不思議というよりもむしろ恥かしい気がした。

「いいえ。喜こんで着て行きました」

「御父おとつさんは外套もを有もっていないのかい」

「外套もどころじゃない、もう何にも有もっちゃいないんです」

健三は驚ろいた。細い灯ひに照らされた細君の顔が急に憐あわれに見えた。

「そんなに窮こまっているのかなあ」

「ええ。もうどうする事も出来ないんですって」

口数の寡すくない細君は、自分の生家に関する詳しい話を今まで夫の耳に入れずに通して来たのである。職に離れて以来の不如意を薄うす々知うすつていながら、まさかこれほどとも思わずにいた健三は、急に眼を転じてその人の昔を見なければならなかつた。

彼は絹帽シルクハットにフロックコートで勇ましく官邸の石門せきもんを出て行く細君の父の姿を鮮やかに思い浮べた。堅木かたぎを久きゆうの字形じがたに切り組んで作ったその玄関の床ゆかは、つるつる光つて、時によると馴なれない健三の足を滑らせた。前に広い芝生しばふを控えた応接間を左へ折れ曲ると、それと接つ続づいて長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其所そこで細君の家族のもの

と一緒に晩餐ばんさんの卓に着いた事をいまだに覚えていた。二階には畳が敷いてあった。正月の寒い晩、歌留多カルタに招かれた彼は、そのうちの一間で暖たかい宵を笑い声の裡うちに更ふかした記憶もあった。

西洋館に続いて日本建にほんだても一棟付ひとむねいていたこの屋敷には、家族の外に五人の下女げじよと二人の書生が住んでいた。職務柄客の出入でいりの多いこの家の用事には、それだけの召仕めしつかいが必要かも知れなかったが、もし経済が許さないとすれば、その必要も充みたされるはずはなかった。

健三が外国から帰って来た時ですら、細君の父はさほど困っているようには見えなかった。彼が駒込こまごめの奥に住居すまいを構えた当座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つてこういった。――

「まあ自分の宅うちを有もつという事が人間にはどうしても必要です。しかしそう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄せいぜいを心掛けたら好いいでしょう。二、三千円の金を有もつていないと、いざという場合に、大変困るもんだから。なに千円位出来ればそれで結構です。それを私わたしに預けて御置きなされると、一年位経つうちには、じき倍ばいにして上げますから」

貨殖の道に心得の足りない健三はその時不思議の感に打たれた。

「どうして一年のうちに千円が二千円になり得るだろう」

彼の頭ではこの疑問の解決がとても付かなかつた。利慾を離れる事の出来ない彼は、  
驚愕きょうがくの念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く欠乏している、一種の怪力かいりよくを眺  
めた。しかし千円拵てしじゆえて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つてその方法を  
訊きく気にもならずについ今日こんにちまで過ぎたのである。

「そんなに貧乏するはずがないだろうじゃないか。何ぼ何だつて」

「でも仕方がありませんわ、廻り合せまわあわせだから」

産という肉体の苦痛を眼前に控えている細君の氣息遣いきづかいはただでさえ重々おもおもしかつた。健  
三は黙つて気の毒なそうなその腹と光沢つやの悪いその頬ほおとを眺めた。

昔し田舎で結婚した時、彼女の父がどこからか浮世絵風の美人を描かいた下等な団扇うちわを  
四、五本買つて持つて来たので、健三はその一本をぐるぐる廻しながら、随分俗なもの  
だと評したら、父はすぐ「所相応ところあやうだろう」と答えた事があつたが、健三は今自分がその  
地方で作つた外套を細君の父に遣つて、「阿爺相応おやじあやうだろう」という気にはとてもなれな  
かつた。いくら困つたつてあんなものをもと思うとむしろ情なさけなくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでしょう」

細君は淋しさびしそうに笑った。

### 七十三

中一日置いて彼が来た時、健三は久しぶりで細君の父に会った。

年輩からいっても、経歴から見ても、健三より遙かに世間馴れた父は、何時も自分の娘婿ていねいに対して鄭寧ていねいであった。或時は不自然に陥る位鄭寧過ぎた。しかしそれが彼を現わす凡すべてではなかった。裏側には反対のものが所々に起伏うきふしていた。

官僚式に出来上った彼の眼には、健三の態度が最初から頗すこぶる横着に見えた。超えてはならない階段ふしつけを無躰ぶしつけに飛び越すようにも思われた。その上彼はむやみに自ら任みづかじているらしい健三の高慢こまんちきな所を喜よろこばなかった。頭にある事を何でも口外くわいして憚はばらない健三の無作法むさばも気に入らなかつた。乱暴とより外に取りようのない一徹いつてつ一凶いつこな点も非難ひなんの標ま的とになつた。

健三の稚氣を輕蔑けいべつした彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて来きようとする健三を表面上鄭寧な態度で遮った。すると二人は其所そこで留まったなり動けなくなった。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかった。だから相手の長所も判明きりと理解する事が出来悪にくくなった。そうして二人とも自分の有もっている欠点の大部分には決して気が付かなかつた。

しかし今の彼は健三に対して疑うたがもなく一時的の弱者であつた。他に頭を下げる事の嫌きらいな健三は窮迫の結果、余儀なく自分の前に出て来た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想像しない訳に行かなかつた。

「如何いかにも苦しいだろう」

健三はこの一念に制せられた。そうして彼の持ち来きたした金策談に耳を傾むけた。けれども好いい顔はし得なかつた。心のうちでは好いい顔をし得ないその自分を呪のろつていた。

「金の話だから好いい顔が出来ないんじゃない。金とは独立した不愉快のために好いい顔が出来ないので。誤解してはいけません。私わたくしはこんな場合に敵討かたきうちをするような卑怯ひきょうな人間とは違ちがいます」

細君の父の前にこれだけの弁解がしたくつて堪らなかつた健三は、黙つて誤解の危険

を冒すより外に仕方がなかった。

このぶつきら棒な健三に比べると、細君の父はよほど鄭寧であつた。また落付おちついていた。傍はたから見れば遙に紳士らしかつた。

彼は或人の名を挙げた。

「向うでは貴方あなたを知つてるといいますが、貴方も知つてるんでしょね」  
「知つています」

健三は昔し学校にいた時分にその男を知つていた。けれども深い交際つきあいはなかつた。卒業して独乙ドイツへ行つて歸つて来たら、急に職業がえをして或ある大きな銀行へ入つたとか人の噂うわさに聞いた位より外に、彼の消息は健三に伝わつていなかつた。

「まだ銀行にいるんですか」

細君の父は点頭うなずいた。しかし二人がどこでどう知り合になつたのか、健三には想像さえ付かなかつた。またそれを詳しく訊きいて見たところが仕方がなかつた。要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあつた。

「で当人のいうには、貸しても好い、好いが慥たしかな人を証人に立ててもらいたいとこういふんです」

「なるほど」

「じゃ誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向うでわざわざ指名した訳なんです」

健三は自分自身を慥なものと認めるには躊躇しなかった。しかし自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他に知れていなければならぬはずだと考えた。その上細君の父は交際範囲の極めて広い人であった。平生彼の口にする知合のうちには、健三よりどの位世間から信用されて好いか分らないほど有名な人がいくらでもいた。

「何故私の判が必要なんでしょう」

「貴方なら貸そうというのです」

健三は考えた。

#### 七十四

彼は今日まで証書を入れて他から金を借りた経験のない男であった。つい義理で判を捺いて遣ったのが本で、立派な腕を有ちながら、生涯社会の底に沈んだまま、藻掻き通

しに藻掻うかいている人の話は、いくら迂闊うかつな彼の耳にもしばしば伝えられていた。彼は出来るなら自分の未来に関わるような所作を避けたいと思った。しかし頑固な彼の半面にはいたって気の弱い煮え切らない或物が能く働よらきたがった。この場合断然連印を拒絶するのは、彼に取って如何いかにも無情で、冷刻で、心苦しかった。

「私でなくつちやいけないのでしょうか」

「貴方あなたなら好いいというんです」

彼は同じ事を二度訊きいて同じ答えを二度受けた。

「どうも変ですわね」

世事に疎い彼は、細君の父がどこへ頼んでも、もう判を押してくれるものがないので、しまいに仕方なしに彼の所へ持つて来たのだという明白な事情さえ推察し得なかった。彼は親しく交際つきあった事もないその銀行家からそれほど信用されるのがかえって怖く  
なった。

「どんな目に逢わされるか分りやしない」

彼の心には未来における自己の安全という懸念が充分に働らいた。同時にただそれだけの利害心でこの問題を片付けてしまうほど彼の性格は単純に出来ていなかった。彼の

頭が彼に適當な解決を与えるまで彼は逡巡しなければならなかった。その解決が最後に来た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を払った。

「印を捺す事はどうも危険ですからやめたいと思います。しかしその代り私の手で出来るだけの金を調べて上げましょう。無論貯蓄のない私の事だから、調えるにしたところで、どうせどこからか借りるより外に仕方がないのですが、出来るなら証文を書いたり判を押したりするような形式上の手続きを踏む金は借りたくないのです。私の有つてゐる狭い交際の方面で安全な金を工面した方が私には心持が好いのですから、まずそつちの方を一つ中つて見ましよう。無論御入用だけの額は駄目です。私の手で調のえる以上、私の手で返さなければならぬのは無論の事ですから、身分不相当の借金は出来ません」

いくらでも融通が付けば付いただけ助かるといった風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強いなかつた。

「どうぞそれじゃ何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて帰って行つた。書齋で話を済めた健三は、玄関からまた同じ書齋に戻つたなり細君の顔を見なかつた。細君も父

を玄關に送り出した時、夫と並んで沓脱くつぬぎの上に立っただけで、遂に書齋へは入って来なかつた。金策の事は黙々のうちに二人に了解されていながら、遂に二人の間の話題のぼに上らずにしまった。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果すために動かなければならなかつた。彼は世帯を持つときに、火鉢ひばちや烟草盆タバコぼんを一所に買って歩いてもらった友達の宅うちへまた出掛けた。

「金を貸してくれないかね」

彼は藪やぶから棒に質問を掛けた。金などを有っていない友達は驚ろいた顔をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳かきしながら友達の前に逐一事情を話した。

「どうだろう」

三年間支那のある学堂きやうたんで教鞭を取っていた頃に蓄えた友達の金は、みんな電鉄か何かの株かぶに変形していた。

「じゃ清水しみずに頼んで見てくれないか」

友達の妹婿に当る清水は、下町のかかなり繁華な場所で、病院を開いていた。

「さあどうかなあ。あいつもその位な金はあるだろうが、動かせるようになってるか

しら。まあ訊いて見てやろう」

友達の好意は幸い徒勞むだにならずに済んだ。健三の借り受けた四百円の金が、細君の父の手に入ったのは、それから四、五日経のちつて後の事であった。

## 七十五

「己おれは精一杯の事をしたのだ」

健三の腹にはこういう安心があった。従つて彼は自分の調達ちようだつした金の価値について余り考へなかつた。さぞ嬉うれしがるだろうとも思わない代りに、これ位の補助が何の役に立つものかという気も起さなかつた。それがどの方面にどう消費されたかの問題になると、全くの無知識で澄すましていた。細君の父も其所そこまで内状を打ち明けるほど彼に接近して来なかつた。

従来しよへきの牆壁を取り払うにはこの機会があまりに脆弱ぜいじやく過ぎた。もしくは二人の性格があまりに固着し過ぎていた。

父は健三よりも世間的に虚栄心の強い男であつた。なるべく自分を他ひとに能よく了解させ

ようと力めるよりも、出来るだけ自分の価値を明るい光線に触てさせたがる性質であった。従つて彼を圍繞する妻子近親に対する彼の様子は幾分か誇大に傾むきがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一転した時、彼は自分の平生を顧みない訳に行かなかつた。彼はそれを糊塗するため、健三に向つて能う限りさあらぬ態度を装つた。それで遂に押し通せなくなつた揚句、彼はとうとう健三に連印を求めたのである。けれども彼がどの位の負債にどう苦しめられているかという巨細の事實は、遂に健三の耳に入らなかつた。健三も訊かなかつた。

二人は今までの距離を保つたままで互に手を出し合つた。一人が渡す金を一人が受け取つた時、二人は出した手をまた引き込めた。傍でそれを見ていた細君は黙つて何ともいわなかつた。

健三が外国から帰つた当座の二人は、まだこれほどに離れていなかつた。彼が新宅を構えて間もない頃、彼は細君の父がある鉱山事業に手を出したという話を聞いて驚ろいた事があつた。

「山を掘るんだつて？」

「ええ、何でも新らしく会社を拵えるんだそうです」

彼は眉を顰めた。同時に彼は父の怪力に幾分かの信用を置いていた。

「旨く行くのかね」

「どうですか」

健三と細君との間にこんな簡単な会話が取り換わされた後、彼はその用事を帯びて北国のある都会へ向けて出発したという父の報知を細君から受け取った。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所へ遣つて来た。父が旅先で急に病気に罹つたので、これから自分も行かなければならないと思うが、それについて旅費の都合は出来まいかというのが母の用向であつた。

「ええええ旅費位どうでもして上ますから、すぐ行つて御上なさい」

宿屋に寐ている苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心から氣の毒に思つた健三は、自分のまだ見た事もない遠くの空の佗びしさまで想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が来ただけで、詳しい事はまるで分りませんのですから」

「じゃなお御心配でしょう。なるべく早く御立ちになる方が好いでしょう」

幸いにして父の病氣は軽かつた。しかし彼の手を着けかけたという鉱山事業はそれぎ

り立消たちぎえになつてしまつた。

「まだ何にも見付からないのかね、口は」

「あるにはあるようですけれども旨うまく纏まとらないんですつて」

細君は父がある大きな都会の市長の候補者になつた話をして聞かせた。その運動費は財力のある彼の旧友の一人が負担してくれているようであつた。しかし市の有志家が何名か打ち揃そろつて上京した時に、有名な政治家のある伯爵はくしやくに会つて、父の適不適を問たひ訊たしたら、その伯爵がどうも不向ふむきだろうと答えたので、話はそれぎりをやめになつたのだ。そうである。

「どうも困るね」

「今に何とかなるでしょう」

細君は健三よりも自分の父の方を遥かに余計信用していた。健三も例の怪力かいりよくを知らないではなかつた。

「ただ気の毒だからさういうだけさ」

彼の言葉に嘘うそはなかつた。

けれどもその次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の関係がもう変つていた。自ら進んで母に旅費を用立った女婿は、一步退ぞかなければならなかつた。彼は比較的遠い距離に立つて細君の父を眺めた。しかし彼の眼に漂よう色は冷淡でも無頓着でもなかつた。むしろ黒い瞳から閃めこうとする反感の稲妻であつた。力めてその稲妻を隠そうとした彼は、やむをえずこの鋭どく光るものに冷淡と無頓着の仮装を着せた。

父は悲境にいた。まのあたり見る父は鄭寧であつた。この二つのものが健三の自然に圧迫を加えた。積極的に突掛る事の出来ない彼は控えなければならなかつた。単なる無愛想の程度で我慢すべく余儀なくされた彼には、相手の苦しい現状と慇懃な態度とが、かえつてわが天真の流露を妨げる邪魔物になつた。彼からいえば、父はこういう意味において彼を苦しめに來たと同じ事であつた。父からいえば、普通の人としてさえ不都合に近い愚劣な応対ぶりを、自分の女婿に見出すのは、堪えがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と関係のないこの場だけの光景を眺める傍觀者の眼にも健三はやはり馬鹿であつた。それを承知している細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「私も今度という今度は困りました」

最初にこういった父は健三からはかばかしい返事すら得なかった。

父はやがて財界で有名な或人の名を挙げた。その人は銀行家でもあり、また実業家でもあった。

「実はこの間ある人の周旋で会って見ましたが、どうか旨く出来そうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼所位なもんですから、使用人になったからといって、別に私の体面に関わる事ありませんし、それに仕事をする区域も広いようですから、面白く働けるだろうと思うんです」

この財力家によつて細君の父に予約された位地というのは、関西にある或私立の鉄道会社の社長であった。会社の株の大部分を一人で所有しているその人は、自分の意志のままに、其所の社長を選ぶ特権を有していたのである。しかし何十株か何百株かの持主として、予じめ資格を作つて置かなければならない父は、どうして金の工面をするだろう。事状に通じない健三にはこの疑問さえ解けなかった。

「一時必要な株数だけを私の名義に書換てもらうんです」

健三は父の言葉に疑を挟むほど、彼の才能を見縊つていかなかった。彼と彼の家族とを

目下の苦境から解脱げだつさせるといふ意味においても、その成功を希望しない訳に行かなかつた。しかし依然として元の立場に立っている事も改める訳に行かなかつた。彼の挨拶あいさつは形式的であつた。そうして幾分か彼の心の柔らかい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父はまるで其所に注意を払わないように見えた。

「しかし困る事に、これは今が今という訳に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懐からまた一枚の辞令見たようなものを出して健三に見せた。それには或保険会社が彼に顧問を嘱託するという文句と、その報酬として月々彼に百円を贈与するという条件が書いてあつた。

「今御話した一方の方が出来たらこれはやめるか、または出来ても続けてやるか、その辺はまだ分らないんですが、とにかく百円でも当座の凌しのぎにはなりますから」

昔し彼が政府の内意で或官職を抛なげつた時、当路の人は山陰道筋のある地方の知事なら転任させても好よいという条件を付けた事があつた。しかし彼は断然それを斥しりぞけた。彼が今大して隆盛でもない保険会社から百円の金を貰もらつて、別に厭いやな顔をしないのも、やはり境遇の変化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

こうした懸け隔てのない父の態度は、ややともすると健三を自分の立場から前へ押し出そうとした。その傾向を意識するや否や彼はまた後戻りをしなければならなかった。彼の自然は不自然らしく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。

## 七十七

細君の父は事務家であつた。ややともすると仕事本位の立場からばかり人を評価したがつた。乃木<sup>のぎ</sup>將軍が一時台湾総督になつて間もなくそれをやめた時、彼は健三に向つてこんな事をいった。――

「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤<sup>あつ</sup>く実に立派なものです。しかし総督としての乃木さんが果して適任であるかどうかという問題になると、議論の余地がまだ大分<sup>だいぶん</sup>あるように思います。個人の徳は自分に親しく接触する左右のものには能<sup>よ</sup>く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を与えようとするには不<sup>そ</sup>充分です。其所<sup>そこ</sup>へ行くことやつぱり手腕ですね。手腕がなくつちや、どんな善人でもただ坐<sup>すわ</sup>っているより外に仕方がありませんからね」

彼は在職中の関係から或会の事務一切を管理していた。侯爵を会頭に頂くその会は、彼の力で設立の主意を綺麗に事業の上で完成した後、彼の手元に二万円ほどの剰余金を委ねた。官途に縁がなくなつてから、不如意に不如意の続いた彼は、ついその委託金に手を付けた。そうして何時の間にか全部を消費してしまった。しかし彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち明けなかつた。従つて彼はこの預金から当然生まれて来る百円近くの利子を毎月調達して、体面を繕らわなければならなかつた。自家の経済よりもかえつてこの方を苦に病んでいた彼が、公生涯の持続に絶対に必要なその百円を、月々保険会社から貰うようになったのは、当時の彼の、心中に立入つて考えて見ると、全く嬉しいに違なかつた。

よほど後になつて始めてこの話を細君から聴いた健三は、彼女の父に対して新たな同情を感じただけで、不徳義漢として彼を悪む気は更に起らなかつた。そういう男の娘と夫婦になつてゐるのが恥ずかしいなどは更に思わなかつた。しかし細君に対しての健三は、この点に関して殆んど無言であつた。細君は時々彼に向つていった。――  
「妾、どんな夫でも構いませんわ、ただ自分に好くしてくれさえすれば」

「泥棒でも構わないのかい」

「ええええ、泥棒だろうが、詐欺師だろうが何でも好いわ。ただ女房を大事にしてくれば、それで沢山なのよ。いくら偉い男だって、立派な人間だって、宅うちで不親切じゃ妾にや何にもならないんですもの」

実際細君はこの言葉通りの女であった。健三もその意見には賛成であった。けれども彼の推察は月の暈かきのように細君の言外まで滲にじみ出した。学問ばかりに屈託している自分を、彼女がこういう言葉でよそながら非難するのだという臭においがどこやらでした。しかしそれよりも遙かに強く、夫の心を知らない彼女がこんな態度で暗あんに自分の父を弁護するのではないかという感じが健三の胸を打った。

「己おれはそんな事で人と離れる人間じゃない」

自分を細君に説明しようと力つとめなかつた彼も、独りで弁解の言葉を繰り返す事は忘れなかつた。

しかし細君の父と彼との交情に、自然の溝渠みぞが出来たのは、やはり父の重きを置き過ぎている手腕の結果としか彼には思えなかつた。

健三は正月に父の所へ礼に行かなかつた。恭賀新年という端書だけを出した。父はそれを寛ゆる仮るさなかつた。表向それを咎とがめる事もしなかつた。彼は十二、三になる末の子

に、同じく恭賀新年という曲りくねった字を書かして、その子の名前で健三に賀状の返しをした。こういう手腕で彼に返報する事を巨細に心得ていた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口ずから述べなかつたかの原因については全く無反省であつた。一事は万事に通じた。利が利を生み、子に子が出来た。二人は次第に遠ざかつた。やむをえないで犯す罪と、遣らんでも済むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てている健三は、性質の宜しくないこの余裕を非常に悪み出した。

## 七十八

「与しやすい男だ」

実際において与しやすい或物を多量に有っていると自覚しながらも、健三は他からこゝう思われるのが癪に障つた。

彼の神経はこの肝癪を乗り越えた人に向つて鋭どい懐しみを感じた。彼は群衆のうちにあつて直そういう人を物色する事の出来る眼を有つていた。けれども彼自身はどうしてもその域に達せられなかつた。だからなおそういう人が眼に着いた。またそういう人

を余計尊敬したくなつた。

同時に彼は自分を罵ののしつた。しかし自分を罵らせるようにする相手をば更に烈はげしく罵つた。

かくして細君の父と彼との間には自然の造つた溝渠みぞが次第に出来上つた。彼に対する細君の態度も暗あんにそれを手伝つたには相違なかつた。

二人の間柄がすれすれになると、細君の心は段々生家ざとの方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々めいめいの裡うちに細君の肩を持たなければならなくなつた。しかし細君の肩を持つつという事は、或場合において、健三を敵とするという意味に外ならなかつた。二人は益ますます離れるだけであつた。

幸にして自然は緩和剤としての歇私ヒステリ的里を細君に与えた。発作は都合好く二人の關係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所へ通う廊下うつむせに俯伏うつぶせになつて倒れている細君を抱き起して床の上まで連れて来た。真夜中に雨戸を一枚明けた縁側はじの端はじに蹲踞うすくまつている彼女を、後うしろから両手で支えて、寢室へ戻つて来た経験もあつた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧もうろうとして夢よりも分別ぶんべつがなかつた。瞳孔どうこうが大きく開いていた。外界はただ幻影まぼろしのように映るらしかつた。

枕辺まくらべに坐すわつて彼女の顔を見詰めている健三の眼には何時でも不安が閃ひらめいた。時としては不憫ふびんの念が凡すべてに打ち勝かつた。彼は能よく気の毒な細君の乱れかかった髪に櫛くしを入れ遣やつた。汗ばんだ額を濡ぬれ手拭てぬぐいで拭ふいて遣やつた。たまには氣を確たしかにするために、顔へ霧を吹き掛かけたり、口移くちしに水を飲のませたりした。

発作はつさくの今よりも劇はげしかった昔の様も健三の記憶を刺戟しげきした。

或時の彼は毎夜細い紐ひもで自分の帯と細君の帯とを繋つないで寐ねた。紐の長さを四尺ほどにして、寐返ねがえりが充分出来るように工夫されたこの用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰くり返された。

或時の彼は細君の鳩尾みぞおちへ茶碗ちやわんの糸底いとぞこを宛あてがつて、力任せに押し付けた。それでも踏ふん返かえり返かえろうとする彼女の魔力をこの一点で喰くい留とどめなければならぬ彼は冷たい油汗を流ながした。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道おてんとうさまが来きました。五色しきの雲へ乗のつて来きました。大變おほいよ、貴夫あなた」

「妾わたしの赤ん坊は死しんじまつた。妾の死しんだ赤ん坊が来きたから行いかなくつちやならない。そら其所そこにいるじゃありませんか。桔槔はねつるぎの中に。妾ちよつと行いつて見て来きるから放はなして

下さい」

流産してから間もない彼女は、抱き竦めにかかる健三の手を振り払って、こういいながら起き上がろうとしたのである。……

細君の発作は健三に取つての大きいなる不安であつた。しかし大抵の場合にはその不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靨鬱たなびいていた。彼は心配よりも可哀かわいそう想になつた。弱い憐あわれなものの前に頭を下げて、出来得る限り機嫌を取つた。細君も嬉うれしそうな顔をした。

だから発作に故意だろうという疑の掛からない以上、また余りに肝癆かんしゃくが強過ぎて、どうでも勝手にしろという気にならない以上、最後にその度数が自然の同情を妨げて、何でそう己おれを苦しめるのかという不平が高まらない以上、細君の病気は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間にはこういう重宝な緩和剤が存在していなかった。従つて細君が本もとで出来た両者の疎隔は、たとい夫婦關係が常に復した後あとでも、ちよつと埋める訳に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事実には相違なかつた。

不合理な事の嫌な健三は心の中でそれを苦に病んだ。けれども別にどうする了簡も出さなかった。彼の性質はむきでもあり一凶でもあったと共に頗る消極的な傾向を帯びていた。

「己にそんな義務はない」

自分に訊いて、自分に答を得た彼は、その答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥する決心をした。成行が自然に解決を付けてくれるだろうとさえ預期しなかった。

不幸にして細君もまたこの点においてどこまでも消極的な態度を離れなかった。彼女は何か事件があれば動く女であった。他から頼まれて男より邁進する場合もあった。しかしそれは眼前に手で触れられるだけの明瞭な或物を捉まえた時に限っていた。ところが彼女の見た夫婦関係には、そんな物がどこにも存在していなかった。自分の父と健三の間にもこれというほどの破綻は認められなかった。大きな具象的な変化でなければ事件と認めない彼女はその他を閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神状態

の動揺は手の着けようのないものだど観じていた。

「だって何にもないじゃありませんか」

裏面にその動揺を意識しつつ彼女はこう答えなければならなかった。彼女に最も正当と思われたこの答が、時として虚偽の響をもつて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつた。しまいになつても構わないという投げ遣りの気分が、単に消極的な彼女をなおの事消極的に練り堅めて行つた。

かくして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互の不調和を永続するためにと評されても仕方のないこの一致は、根強い彼らの性格から割り出されていた。偶然というよりもむしろ必然の結果であつた。互に顔を見合せた彼らは、相手の人相で自分の運命を判断した。

細君の父が健三の手で調達ちやうだいされた金を受取つて歸つてから、それを特別の問題ともしなかつた夫婦は、かえつて余事を話し合つた。

「産婆は何時頃生れるというのかい」

「何時はつきりつて判然はつきりいいもありませんが、もう直じきですわ」

「用意は出来てるのかい」

「ええ奥の戸棚の中に入っています」

健三には何が這入っているのか分らなかつた。細君は苦しそうに大きな溜息を吐いた。

「何しろこう重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつちや」

「今度は死ぬかも知れないっていつてたじゃないか」

「ええ、死んでも何でも構わないから、早く生んじまいたいわ」

「どうも御気の毒さまだな」

「好いわ、死ねば貴夫のせいだから」

健三は遠い田舎で細君が長女を生んだ時の光景を憶い出した。不安そうに苦い顔をしていた彼が、産婆から少し手を貸してくれといわれて産室へ入った時、彼女は骨に応えるような恐ろしい力でいきなり健三の腕に獅噛み付いた。そうして拷問でもされる人のように唸った。彼は自分の細君が身体の上に受けつつある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかという気さえした。

「産をするのも苦しいだろうが、それを見ているのも辛いものだけ」

「じゃどこかへ遊びにでもいらっしやいな」

「一人で生めるかい」

細君は何とも答えなかった。夫が外国へ行っている留守に、次の娘を生んだ時の事などはまるで口にしなかった。健三も訊いて見ようとは思わなかった。生れ付心配性な彼は、細君の唸り声を余所にして、ぶらぶら外を歩いていられるような男ではなかった。産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。

「一週間以内かね」

「いえもう少し後でしょう」

健三も細君もその気でいた。

## 八十

日取が狂って予期より早く産気づいた細君は、苦しそうな声を出して、傍に寐ている夫の夢を驚ろかした。

「先刻から急に御腹が痛み出して……」

「もう出そうなのかい」

健三にはどの位な程度で細君の腹が痛んでいるのか分らなかった。彼は寒い夜の中に夜具から顔だけ出して、細君の様子をそっと眺めた。

「少し撫なつて遣やろうか」

起き上る事の臆おっくう劫な彼は出来るだけ口先で間に合せようとした。彼は産についての経験をただ一度しか有もつていなかった。その経験も大方は忘れていた。けれども長女の生れる時には、こういう痛みが、潮の満干みちひのように、何度も来たり去ったりしたように思えた。

「そう急に生れるもんじゃないだろうな、子供つてものは。一仕切痛ひとしきりんではまた一仕切治まるんだろう」

「何だか知らないけれども段々痛くなるだけですわ」

細君の態度は明らかに彼女の言葉を証拠立てた。凝じつと蒲団ふとんの上に落付おちついていられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けようがなかった。

「産婆を呼ぼうか」

「ええ、早く」

職業柄産婆の宅には電話が掛つていたけれども、彼の家にそんな気の利いた設備のあろうはずはなかった。至急を要する場合が起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の医者いしやの所へ馳かけ付けるのを例にしていた。

初冬はつふゆの暗い夜はまだ明け離れるのに大分間だいぶんがあつた。彼はその人とその人の門かどを敲たたく下女げじよの迷惑を察した。しかし夜明よあけまで安閑と待つ勇氣がなかつた。寢室ふすまの襖ふすまを開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口まで来た彼は、すぐ召使の一人を急せぎ立てて暗い夜の中へ追ひ遣つた。

彼が細君の枕元へ歸つて来た時、彼女の痛みは益劇ますますしくなつた。彼の神経は一分ごとに門前とまで停とまる車の響を待ち受けなければならぬほどに緊張して来た。

産婆は容易に來なかつた。細君の唸うなる声こゑが絶間たえまなく静かな夜の室へやを不安に攪かき乱した。五分経つか経たないうちに、彼女は「もう生れます」と夫に宣告した。そうして今まで我慢に我慢を重ねて泳しりえて来たような叫び声を一度に揚げると共に胎児ふんべんを分娩ぶんべんした。

「確しつかりしろ」

すぐ立つて蒲団すその裾すその方に廻つた健三は、どうして好いいか分らなかつた。その時例の

洋燈ランブは細長い火蓋ほやの中で、死のように静かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落している辺は、夜具あたひの縞柄しまがらさえ判明はつきりしないぼんやりした陰で一面に裹つつまれていた。

彼は狼狽ろうばいした。けれども洋燈を移して其所そこを輝てるすのは、男子の見るべからざるものを強しいて見るような心持がして気が引けた。彼はやむをえず暗中に摸索した。彼の右手は忽たちまち一種異様の触覚をもつて、今まで経験した事のない或物に触れた。その或物は寒天のようにぷりぷりしていた。そうして輪廓からいっても恰好かっこうの判然かっせんしない何かの塊かままりに過ぎなかった。彼は気味の悪い感じを彼の全身に伝えるこの塊を軽く指頭ゆびなで撫なでて見た。塊りは動きもしなければ泣きもしなかった。ただ撫なでるたんびにぷりぷりした寒天のよなものが剥はげ落ちるように思えた。もし強く抑えたり持ったりすれば、全体がきつと崩れてしまふに違ちがないと彼は考えた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込ひっこめた。

「しかしこのままにして放はなつて置いたら、風邪かぜを引くだろう、寒さで凍こえてしまふだろう」

死んでいるか生きているかさえ弁別みわけのつかない彼にもこういう懸念けんねんが湧わいた。彼は忽ち出産の用意が戸棚うちの中に入れてあるといった細君の言葉を思い出した。そうしてすぐ自分の後部うしろにある唐紙からかみを開けた。彼は其所から多量の綿を引き摺ずり出した。脱脂綿とい

う名さえ知らなかった彼は、それをむやみに千切つて、柔かい塊の上に載せた。

八十一

その内待まちに待った産婆が来たので、健三は漸よつやく安心して自分の室へやへ引き取った。  
夜は間もなく明けた。赤子あかこの泣く声が家の中の寒い空気を顫ふるわせた。

「御安産で御目出とう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し気の毒そうに途中で句を切った。

「また女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのもまた女、都合三人の娘の父になった彼は、そう同じものばかり生んでどうする気だろうと、心の中うちで暗あんに細君を非難した。しかしそれを生ませた自分の責任には思い到いたらなかつた。

田舎いなかで生まれた長女は肌理きめの濃こまやかな美しくい子であった。健三はよくその子を乳母うばぐ

車くるまに乗せて町の中を後うしろから押して歩いた。時によると、天使のように安らかな眠に落ちた顔を眺めながら宅うちへ帰って来た。しかし当あてにならないうのは想像の未来であった。健三が外国から帰った時、人に伴つれられて彼を新橋しんばしに迎えたこの娘は、久しぶりに父の顔を見て、もっと好いい御父おとうさまかと思つたと傍はたのものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに悪い方に變化していた。彼女の顔は段々丈たけが詰つて来た。輪廓かどに角が立った。健三はこの娘の容貌うちの中にいつか成長しつつかある自分の相好そうごうの悪い所を明らかに認めなければならなかつた。

次女は年が年中腫物でくせものだらけの頭をしていた。風通しが悪いからだろうというのが本で、とうとう髪の毛をじよぎじよぎに剪きつてしまつた。額の短かい眼の大きなその子は、海坊主うみぼうずの化物ばけもののような風をして、其所そこいらをうろろしていた。

三番目の子だけが器量好く育とうとは親の慾目にも思えなかつた。

「ああいうものが続々生れて来て、必竟ひつじつどうするんだらう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、こういう自分や自分の細君なども、必竟どうするんだらうという意味も臍氣おぼろげに交まじつていた。

彼は外へ出る前にちよつと寢室へ顔を出した。細君は洗い立てのシーツの上に穩かに

寐ねていた。子供も小さい附属物のように、厚い綿の入った新調の夜具蒲団ふとんに包くまれたまま、傍に置いてあった。その子供は赤い顔をしていた。昨夜暗闇で彼の手に触れた寒天のような肉塊とは全く感じの違うものであった。

一切も綺麗きれいに始末されていた。其所そこいらには汚よごれ物の影さえ見えなかった。夜来やらいの記憶は跡方もない夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。

「蒲団は換えて遣やったのかい」

「ええ、蒲団も敷布も換えて上げました」

「よくこう早く片付けられるもんだね」

産婆は笑うだけであつた。若い時から独身で通して来たこの女の声や態度はどことなく男らしかった。

「貴夫あなたがむやみに脱脂綿を使って御しまいに変わったものだから、足りなくなつて大変困りましたよ」

「そうだろう。随分驚ろいたからね」

こう答こたえながら健三は大して気の毒な思いもしなかつた。それよりも多量に血を失なつて蒼あおい顔かほをしている細君の方が懸念の種になつた。

「どうだ」

細君は微かに眼を開けて、枕の上で軽く肯うなずいた。健三はそのまま外へ出た。例刻に帰った時、彼は洋服のままでもた細君の枕元すわに坐すわった。

「どうだ」

しかし細君はもう肯うなずかなかつた。

「何だか変なようです」

彼女の顔は今朝見た折と違つて熱で火照ほつていた。

「心持が悪いのかい」

「ええ」

「産婆を呼びに遣ろうか」

「もう来るでしょう」

産婆は来るはずになつていた。

やがて細君の腋わきの下に験温器が宛あてがわれた。

「熱が少し出ましたね」

産婆はこういつて度盛どもりの柱の中に上のぼった水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡ずくなであつた。用心のため産科の医者を呼んで診みてもらつたらどうだという相談さえせずに帰つてしまつた。

「大丈夫なのかな」

「どうですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さえ出ればすぐ産褥熱さんじよくねつじゃなからうかという危懼きぐの念を起した。母から掛り付けて来た産婆に信賴している細君の方がかえつて平氣であつた。

「どうですかつて、御前の身体からだじゃないか」

細君は何とも答えなかつた。健三から見ると、死んだつて構わないという表情がその顔に出ているように思えた。

「人がこんなあくに心配して遣やるのに」

この感じを翌ある日まで持ち続けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。そうして午

後に帰つて来て、細君の熱がもう退めてゐる事に気が付いた。

「やっぱり何でもなかつたのかな」

「ええ。だけど何時また出て来るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は真面目であつた。細君は淋しい頬に微笑を洩らした。

熱は幸にしてそれぎり出なかつた。産後の経過は先ず順当に行つた。健三は既定の三

週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の枕元へ来て、時々話をしながら坐つた。

「今度は死ぬ死ぬっていいながら、平気で生きているじゃないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御随意だ」

夫の言葉を笑談半分に聴いていられるようになった細君は、自分の生命に対して鈍いながらも一種の危険を感じたその当手を顧みなければならなかつた。

「実際今度は死ぬと思つたんですもの」

「どういう訳で」

「訳はないわ、ただ思うのに」

死ぬと思つたのにかえつて普通の人より軽い産をして、予想と事実が丁度裏表になつた事さえ、細君は気に留めていなかった。

「御前は呑気だね」

「貴夫こそ呑気よ」

細君は嬉しそうに自分の傍に寐ている赤ん坊の顔を見た。そうして指の先で小さい頬片を突つて、あやし始めた。その赤ん坊はまだ人間の体裁を具えた眼鼻を有つているとはいえないほど変な顔をしていた。

「産が軽いだけあつて、少し小さ過ぎるようだね」

「今に大きくなりますよ」

健三はこの小さい肉の塊りが今の細君のように大きくなる未来を想像した。それは遠い先にあつた。けれども途中で命の綱が切れない限り何時か来るに相違なかつた。

「人間の運命はなかなか片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。そうしてその意味が解らなかつた。

「何ですって」

健三は彼女の前に同じ文句を繰り返すべく余儀なくされた。

「それがどうしたの」

「どうもしないけれど、そうだからそうだといふのさ」

「話らないわ。他に解らない事さえいいや、好いかと思つて」

細君は夫を捨ててまた自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭な顔もせず書齋へ入つた。

彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならずにいる兄の事があつた。喘息で斃れようとしてまだ斃れずにいる姉の事があつた。新しい位地が手に入るようでもまだ手に入らない細君の父の事があつた。その他島田の事も御常の事もあつた。そうして自分とこれらの人々との關係が皆なまだ片付かずにいるといふ事もあつた。

### 八十三

子供は一番気楽であつた。生きた人形でも買つてもらつたように喜んで、閑さあると、新らしい妹の傍に寄りたがつた。その妹の瞬き一つさえ驚嘆の種になる彼らには、

噫くさめでも欠あぐひでも何でもかでも不可思議な現象と見えた。

「今にどんなになるだろう」

当面に忙殺ぼうせきされる彼らの胸にはかつてこうした問題が浮かばなかった。自分たち自身の今にどんなになるかをすら領解し得ない子供らは、無論今にどうするだろうなどと考えるはずがなかった。

この意味で見た彼らは細君よりもなお遠く健三を離れていた。外から帰った彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやりこれらの一団を眺めた。

「また塊かたまりっているな」

彼はすぐ踵かかとを回めぐらして部屋の外へ出る事があった。

時によると彼は服も改めずそこにすぐ其所へ胡坐あぐらをかいた。

「こう始終湯婆ゆたんぼばかり入れていちや子供の健康に悪い。出してしまえ。第一いくつ入れるんだ」

彼は何にも解らないくせに好い加減こじとな小言をいつてかえって細君から笑われたりした。

日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る気にならなかった。それでいて一つ室へやに塊つ

ている子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。

「女は子供を専領してしまふものだね」

細君は驚ろいた顔をして夫を見返した。其所には自分が今まで無自覚で実行して来た事を、夫の言葉で突然悟らされたような趣もあつた。

「何で藪から棒にそんな事を仰やるの」

「だってそうじゃないか。女はそれで気に入らない亭主に敵討をするつもりなんだろう」

「馬鹿を仰やい。子供が私の傍へばかり寄り付くのは、貴夫が構い付けて御遣りなさらないからです」

「己を構い付けなくさせたものは、取も直さず御前だろう」

「どうでも勝手になさい。何ぞというと僻みばかりいつて。どうせ口の達者な貴夫には敵いませんから」

健三はむしろ真面目であつた。僻みとも口巧者とも思わなかつた。

「女は策略が好きだからいけない」

細君は床の上で寐返りをしてあちらを向いた。そうして涙をぼたぼたと枕の上に落し

た。

「そんなに何も私を虐めなくつても……」

細君の様子を見ていた子供はすぐ泣き出しそうにした。健三の胸は重苦しくなった。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れ得ない彼女の前に慰藉の言葉を並べなければならなかった。しかし彼の理解力は依然としてこの同情とは別物であった。細君の涙を拭いてやった彼は、その涙で自分の考えを訂正する事が出来なかった。

次に顔を合せた時、細君は突然夫の弱点を刺した。

「貴夫何故その子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと險呑だからさ。頸でも折ると大変だからね」

「嘘を仰しやい。貴夫には女房や子供に対する情合が欠けているんですよ」

「だって御覧な、ぐたぐたして抱き慣れない男に手なんか出せやしないじゃないか」

実際赤ん坊はぐたぐたしていた。骨などはどこにあるかまるで分らなかった。それでも細君は承知しなかった。彼女は昔し一番目の娘に水疱瘡の出来た時、健三の態度が俄かに一変した実例を証拠に挙げた。

「それまで毎日抱いて遣っていたのに、それから急に抱かなくなつたじゃありません

か」

健三は事実を打ち消す気もなかった。同時に自分の考えを改めようとしなかった。

「何とといったって女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深くこう信じていた。あたかも自分自身は凡てすべの技巧から解放された自由の人であるかのように。

## 八十四

退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で読んだ。時々枕元に置いてある厚紙の汚ならしいその表紙が健三の注意を惹く時、彼は細君に向って訊いた。

「こんなものが面白いのかい」

細君は自分の文学趣味の低い事を嘲あざけられるような気がした。

「いいじゃありませんか、貴夫あなたに面白くなくたって、私わたしにさえ面白けりゃ」

色々な方面において自分と夫の隔離を意識していた彼女は、すぐこんな口が利きたくなかった。

健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸に出入する二、三の男を知っているぎりであった。そうしてその人々はみんな健三とは異った意味で生きて行くものばかりであった。男性に対する観念をその数人から抽象して健三の所へ持つて来た彼女は、全く予期と反対した一個の男を、彼女の夫において見出した。彼女はそのどっちかが正しくなければならぬと思った。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考えは単純であった。今にこの夫が世間から教育されて、自分の父のように、型が變つて行くに違ふないという確信を有っていた。

案に相違して健三は頑強であった。同時に細君の膠着力も固かった。二人は二人同志で輕蔑し合つた。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、ややともすると心の中で夫に反抗した。健三はまた自分を認めない細君を忌々しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下に見下す態度を公けにして憚らなかつた。

「じゃ貴夫が教えて下されば好いのに。そんなに他を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教えてもらおうという気がないからさ。自分はもうこれで一人前だという腹があつちや、己にやどうする事も出来ないよ」

誰が盲従するものかという気が細君の胸にあると同時に、到底啓発しようがないでは

ないかという弁解が夫の心に潜んでいた。二人の間に繰り返されるこうした言葉争いは古いものであった。しかし古いだけで埒は一向開かなかつた。

健三はもう飽きたという風をして、手摺のした貸本を投げ出した。

「読むなというんじゃない。それは御前の随意だ。しかし余まり眼を使わないようにしたら好いだらう」

細君は裁縫が一番好きであつた。夜眼が冴えて寐られない時などは、一時でも二時でも構わずに、細い針の目を洋燈の下に運ばせていた。長女か次女が生れた時、若い元気に任せて、相当の時期が経過しないうちに、縫物を取上げたのが本で、大變視力を悪くした経験もあつた。

「ええ、針を持つのは毒ですけれども、本位構わないでしょう。それも始終読んでいるんじゃないから」

「しかし疲れるまで読み続けない方が好かろう。でないと後で困る」  
「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過労の意味が能く解らなかつた。彼女は笑って取り合はなかつた。

「御前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事をいった。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよくこんな言葉遣いをしたがった。それがまた夫の悪い癖の一つとして細君には数えられていた。

同時に彼のノートは益細ますますかくなつて行つた。最初蠅はえの頭位であつた字が次第に蟻あひの頭ほどに縮まつて来た。何故なぜそんな小さな文字を書かなければならないのかとさえ考へて見なかつた彼は、殆んど無意味に洋筆ペンを走らせてやまなかつた。日の光りの弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈ランプから出る薄い灯火ともしびの影、彼は暇さえあれば彼の視力を濫費らんびして顧みなかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に払わなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思わなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。

## 八十五

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼らの庭に霜柱きりの錐きりを立てようとしていた。

「大變荒れた事、今年は例より寒いようね」

「血が少なくなつたせいで、そう思うんだろう」

「そうでしょうかしら」

細君は始めて気が付いたように、両手を火鉢の上に翳して、自分の爪の色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りそうなものなのにね」

「ええ、そりや分つてますわ」

彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白い頬を二、三度撫でた。

「しかし寒い事も寒いんでしょう、今年は」

健三には自分の説明を聴かない細君が可笑しく見えた。

「そりや冬だから寒いに極まつているさ」

細君を笑う健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身体に厳しく中つた。彼はやむをえず書齋に炬燵を入れて、両膝から腰のあたりに浸み込む冷を防いだ。神経衰弱の結果こう感ずるのかも知れないとさえ思わなかつた彼は、自分に對する注意の足りない点において、細君と異なる所がなかつた。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛を入れる細君の手には、長い髪の毛が何本となく残つ

た。彼女は梳くたびに櫛の齒に絡まるその抜毛を残り惜気に眺めた。それが彼女には失なわれた血潮よりもかえって大切らしく見えた。

「新らしく生きたものを拵上げた自分は、その償いとして衰えて行かなければならぬ」

彼女の胸には微かにこういう感じが湧いた。しかし彼女はその微かな感じを言葉に纏めるほどの頭を有っていなかった。同時にその感じには手柄をしたという誇りと、罰を受けたという恨みと、が交っていた。いずれにしても、新らしく生れた子が可愛くなるばかりであった。

彼女はぐたぐたして手応えのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、その丸い頬へ自分の唇を持って行った。すると自分から出たものはどうしても自分の物だという気が理窟なしに起った。

彼女は自分の傍にその子を置いて、また裁もの板の前に坐った。そうして時々針の手をやめては、暖かそうに寐ているその顔を、心配そうに上から覗き込んだ。

「そりゃ誰の着物だい」

「やっぱりこの子のです」

「そんなにいくつも要るのかい」

「ええ」

細君は黙って手を運ばしていた。

健三は漸と気が付いたように、細君の膝の上に置かれた大きな模様のある切地を眺めた。

「それは姉から祝ってくれたんだらう」

「そうです」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰った小遣の中を割いて、こういう贈り物をしなければ気の済まない姉の心持が、彼には理解出来なかった。

「つまり己の金で己が買ったと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫に対する義理だと思っていらっしゃるんだから仕方がありませんわ」

姉は世間でいう義理を克明に守り過ぎる女であった。他から物を貰えばきつとそれ以上の上のものを贈り返そうとして苦しがあった。

「どうも困るね、そう義理々々つて、何が義理だかさっぱり解りやしない。そんな形式

的な事をするより、自分の小遣を比田ひだに借りられないような用心でもする方がよっぽど増しだ」

こんな事に掛けると存外無神経な細君は、強いて姉を弁護しようともしなかつた。

「今にまた何か御礼をしますからそれで好いでしよう」

他ひとを訪問する時に殆ほとんど土産みやげものを持参した例ためしのない健三は、それでもまだ不審ふしんそうに細君の膝の上にあるめりんすを見詰めていた。

## 八十六

「だから元は御姉おあねえさんの所へ皆なが色んな物を持って来たんですって」

細君は健三の顔を見て突然こんな事をいい出した。――

「十とおのものには十五の返しをなさる御姉さんの気性を知ってるもんだから、皆なその御礼あてを目的あてに何か呉れるんだそうですよ」

「十のものに十五の返しをするって、高が五十銭が七十五銭になるだけじゃないか」

「それで沢山なんでしょう。そういう人たちは」

他から見ると酔興としか思われなほど細かなノートばかり拵えている健三には、世の中にそんな人間が生きていようとさえ思えなかつた。

「随分厄介な交際だね。だいち馬鹿々々しいじゃないか」

「傍から見れば馬鹿々々しいようですけれども、その中に入ると、やっぱり仕方がないんですよ」

健三はこの間よそから臨時に受取つた三十円を、自分がどう消費してしまつたかの問題について考えさせられた。

今から一カ月余り前、彼はある知人に頼まれてその男の経営する雑誌に長い原稿を書いた。それまで細かいノートより外に何も作る必要のなかつた彼に取つてのこの文章は、違つた方面に働いた彼の頭腦の最初の試みに過ぎなかつた。彼はただ筆の先に滴る面白い気分を駆られた。彼の心は全く報酬を予期していなかつた。依頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾つたように喜んだ。

兼てからわが座敷の如何にも殺風景なのを苦に病んでいた彼は、すぐ団子坂にある唐木の指物師の所へ行つて、紫檀の懸額を一枚作らせた。彼はその中に、支那から歸つた

友達に貰った北魏の二十品という石摺のうちにある一つを扱出し入れた。それからその額を環の着いた細長い胡麻竹の下へ振ら下げて、床の間の釘へ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付かないせいか、額は静かな時でも斜に傾いた。

彼はまた団子坂を下りて谷中の方へ上って行った。そうして其所にある陶器店から一個の花瓶を買って来た。花瓶は朱色であった。中に薄い黄で大きな草花が描かれていた。高さは一尺余りであった。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふらふらする比較的小さい懸額とはどうしても釣合が取れなかった。彼は少し失望したような眼をしてこの不調和な配合を眺めた。けれどもまるで何にもないよりは増しだと考えた。趣味に贅沢をいう余裕のない彼は、不満足のうちに満足しなければならなかった。彼はまた本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて反物を買った。織物について何の知識もない彼はただ番頭が見せてくれるものうちから、好い加減な選択をした。それはむやみに光る緋であった。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭に揃いの羽織と着物を拵えるべく勧められた彼は、遂に一匹の伊勢崎銘仙を抱えて店を出た。その伊勢崎銘仙という名前さえ彼はそれまでついぞ聞いた事がなかった。

これらの物を買とい調とのえた彼は毫じょうも他人について考えなかった。新らしく生れる子供さえ眼中になかった。自分より困っている人の生活などはてんから忘れていた。俗社会の義理を過重かちようする姉に比べて見ると、彼は憐あわれなものに対する好意すら失なっていた。「そう損をしてまでも義理が尽されるのは偉いね。しかし姉は生れ付いての見栄みえ坊ぼうなんだから、仕方がない。偉くない方がまだ増しだろう」

「親切しんせつぎ気はまるでないでしょうか」

「そうさな」

健三はちよつと考えなければならなかった。姉は親切気のある女に違ちがいなかった。「ことによると己おれの方が不人情に出来ているのかも知れない」

## 八十七

この会話がまだ健三の記憶を新しく彩いろどっていた頃、彼は御常おつねから第二回の訪問を受けた。先達せんだつて見た時とほぼ同じように粗末な服装ふくそうをしている彼女の恰好かっこうは、寒さと共に襦袢じゆばんだ。

胴着どうぎの類でも重ねたのだろう、前よりは益丸ますまるまっちくなっていた。健三は客のために出した火鉢ひばちをすぐその人の方へ押し遣やった。

「いえもう御構ごがまい下さいませ。今日は大分御暖おあつたかで御座ごまいますから」  
外部そとには穏やかな日が、障子しょうじに簞はめめた硝子越がらすこしに薄く光っていた。

「あなたは年を取って段々御肥おふとりになるようですね」

「ええ御蔭ごかげさまで身体からだの方はまことに丈夫で御座ごまいます」

「そりや結構けつこうです」

「その代り身上しんしょうの方はただ瘦やせる一方で」

健三には老後らうごになつてからこうむくむく肥る人の健康が疑がわれた。少なくとも不自然ふぜんぜんに思われた。どこか不気味ふきみに見えるところもあった。

「酒でも飲むんじやなかうか」

こんな推察すささえ彼の胸を横切よこぎった。

御常ごじょうの肌身はだみに着きているものは悉しつじとく古びていた。幾度水いくたひを潜くぐったか分らないその着物はおりなり羽織はおりなりは、どこかに絹きぬの光が残のこっているようで、また変かへにごつごつしていた。ただどんなに時代じだいを食くつても、綺麗きれいに洗張あらいはりが出来できている所に彼女の気性きせいが見えるだけで

あつた。健三は丸いながら如何にも窮屈いそうなその人の姿を眺めて、彼女の生活状態と彼女の口に距離のない事を知つた。

「どこを見ても困る人だらけで弱りますね」

「こちらなどが困っていらしつちやあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」  
健三は弁解する気にさえならなかつた。彼はすぐ考えた。

「この人は己おれを自分より金持と思つているように、己を自分より丈夫だとも思つているのだらう」

近頃の健三は實際健康を損そこなつていた。それを自覚しつつ彼は医者にも診みてもらわなかつた。友達にも話さなかつた。ただ一人で不愉快を忍んでいた。しかし身体の未来を想像するたんびに彼はむしやくしゃした。或時は他ひとが自分をこんなに弱くしてしまつたのだというような気を起して、相手のないのに腹を立てた。

「年が若くつて起居たちいに不自由さえなければ丈夫だと思ふんだらう。門構もんがまえの宅うちに住んで下女よさえ使つていれば金でもあると考えるように」

健三は黙つて御常の顔を眺めていた。同時に彼は新らしく床とこの間に飾まられた花瓶はないけとその後のに懸かけつてゐる懸額かけがくとを眺めた。近いうちに袖そでを通すべきぴかぴかする反物たんものも彼の心

のうちにあった。彼は何故この年寄に対して同情を起し得ないのだろうかと怪しんだ。「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」

彼は姉の上に加えた評をもう一遍腹の中で繰り返した。そうして「何不人情でも構うものか」という答を得た。

御常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事について色々な話を始めた。世間一般によく見る通り、その人の手腕がすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕というのは、つまり月々入る金の意味で、その金より外に人間の価値を定めるものは、彼女に取つて、広い世界に一つも見当らないらしかつた。

「何しろ取高が少ないもんですから仕方が御座いませぬ。もう少し稼いでくれると好いのですけれども」

彼女は自分の娘婿を捉まえて愚図だとも無能だともいわない代りに、毎月彼の労力が産み出す収入の高を健三の前に並べて見せた。あたかも物指で反物の寸法さえ計れば、縞柄だの地質だのは、まるで問題にならないといった風に。

生憎健三はそうした尺度で自分を計つてもらいたくない商売をしている男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

好い加減な時分に彼は立つて書齋に入った。机の上に載せてある紙入を取って、そつと中を改めると、一枚の五円札があつた。彼はそれを手に握つたまま元の座敷へ歸つて、御常の前へ置いた。

「失礼ですがこれで俵くろまへでも乗つて行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては濟みません。そういうつもりで上あがつたのでは御座いませんから」

彼女は辞退の言葉と共に紙幣を受け納めて懐ふところへ入れた。

小遣やを遣る時の健三がこの前と同じ挨拶あいさつを用いたように、それを貰もらう御常の辞令も最初と全く違わなかつた。その上偶然にも五円という金高かねだかさえ一致していた。

「この次来た時に、もし五円札がなかつたらどうしよう」

健三の紙入がそれだけの実質で始終充たされていない事はその所有主の彼に知れているばかりで、御常に分るはずがなかつた。三度目に來る御常を予想した彼が、三度目に遣る五円を予想する訳に行かなかつた時、彼はふと馬鹿々々しくなつた。

「これからあの人が来ると、何時でも五円遣らなければならぬような気がする。つまり姉が要らざる義理立をするのと同じ事なのかしら」

自分の関係した事じゃないといった風に熨斗を動かしていた細君は、手を休めずにこういった。――

「ないときは遣らないでも好いじゃありませんか。何もそう見栄を張る必要はないんだから」

「ない時に遣ろうたって、遣れないのは分つてるさ」

二人の問答はすぐ途切れてしまった。消えかかった炭を熨斗から火鉢へ移す音がその間に聞こえた。

「どうしてまた今日は五円入っていたんです。貴夫の紙入に」

健三は床の間に釣り合わない大きな朱色の花瓶を買うのに四円いくらか払った。懸額を誂らえるとき五円なにがしか取られた。指物師が百円に負けて置くから買わないかといった立派な紫檀の書棚をじろじろ見ながら、彼はその二十分の一にも足りない代価を大事そうに懐中から出して匠人の手に渡した。彼はまたひかひかする一匹の伊勢崎銘仙を買うのに十円余りを費やした。友達から受取った原稿料がこう形を変えたあとに、手

垢の付いた五円札がたった一枚残ったのである。

「実はまだ買いたいのがあるんだがな」

「何を御買いになるつもりだったの」

健三は細君の前に特別な品物の名前を挙げる事が出来なかった。

「沢山あるんだ」

慾に際限のない彼の言葉は簡単であった。夫と懸け離れた好尚を有っている細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。

「あの御婆さんは御姉さんなんぞよりよっぽど落ち付いているのね。あれじゃ島田って人と宅で落ち合つても、そう喧嘩もしないでしょう」

「落ち合わないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顔を見合せでもして見るがいい、それこそ堪らないや。一人ずつ相手にしているんでさえ沢山な所へ持つて来て」

「今でもやつぱり喧嘩が始まるでしょうか」

「喧嘩はとにかく、己の方が厭じゃないか」

「二人ともまだ知らないようね。片っ方が宅へ来る事を」

「どうだか」

島田はかつて御常の事を口にしなかった。御常も健三の予期に反して、島田については何にも語らなかつた。

「あの御婆さんの方がまだあの人より好いでしよう」

「どうして」

「五円貰うと黙って帰って行くから」

島田の請求慾の訪問ごとに増長するのに比べると、御常の態度は尋常に違なかつた。

## 八十九

日ならず鼻の下の長い島田の顔がまた健三の座敷に現われた時、彼はすぐ御常の事を聯想した。

彼らだつて生れ付いての敵同志でない以上、仲の好い昔もあつたに違ない。他から爪に灯を点すようだといわれるのも構わずに、金ばかり溜めた当時は、どんなに楽しかつたろう。どんな未来の希望に支配されていただろう。彼らに取つて睦まじさの唯一の記念とも見るべきその金がどこかへ飛んで行つてしまつた後、彼らは夢のような自分たち

の過去を、果してどう眺めているだろう。

健三はもう少して御常の話を島田にするところであった。しかし過去に無感覚な表情しか有もたない島田の顔は、何事も覚えていないように鈍かった。昔の憎悪ぞうお、古い愛執あいしゅう、そんなものは当時の金と共に彼の心から消え失せてしまったとしか思われなかった。

彼は腰から烟草タバコ入いれを出して、刻み烟草を雁首がんくびへ詰めた。吸殻すいがらを落すときには、左の掌てのらで烟管キセルを受けて、火鉢ひばちの縁たたを敲たたかなかつた。脂やにが溜たまっていると見えて、吸う時にじゅじゅ音がした。彼は無言で懐中ふじろを探った。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎あいにく烟管が詰きって」

彼は健三から受取うけとった半紙こよりを割きいて小撚こしじらを拵こしらえた。それで二返も三返も羅宇ラウの中を掃除そとした。彼はこういう事をするのに最も馴なれた人であった。健三は黙もくってその手際を見ている。

「段々暮とになるんでさぞ御忙ごいそがしいでしょう」

彼は疎通とおの好とくなつた烟管をふっふつと心持好こさそうに吹きながらこういった。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりゃ結構だ。大抵の人はそうは行きませんよ」

島田がまだ何かいおうとしているうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のようですね」

「ええ、つい此間こないだ生れたばかりです」

「そりやどうも。些ちっとも知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へええ、失礼だがこれで幾人目ですか」

島田は色々な事を訊きいた。それに相当な受応うけこたえをしている健三の胸にどんな考えが浮かんでいるかまるで気が付かなかった。

出産率が殖えると死亡率も増すという統計上の議論を、つい四、五日前ある外国の雑誌で読んだ健三は、その時赤ん坊がどこかで一人生れれば、年寄が一人どこかで死ぬものだというような理窟とも空想とも付かない変な事を考えていた。

「つまり身代りに誰かが死ななければならぬのだ」

彼の観念は夢のようにぼんやりしていた。詩として彼の頭をぼうつと侵すだけであった。それをもっと明瞭めいりょうになるまで理解の力で押し詰めて行けば、その身代りは取も直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健三は其そ

所まで行く気はなかった。ただ自分の前にいる老人にだけ意味のある眼を注いだ。何のために生きているか殆んど意義の認めようのないこの年寄は、身代りとして最も適当な人間に違なかつた。

「どういふ訳でこう丈夫なのだろう」

健三は殆んど自分の想像の残酷さ加減さえ忘れてしまった。そうして人並でないわが健康状態については、毫も責任がないものの如き忌々しさを感じた。その時島田は彼に向つて突然こういつた。――

「御縫もとうとう亡くなつてね。御祝儀は濟んだが」

とても助からないという事だけは、脊髄病という名前から推して、とうに承知していたようなものの、改まつてそういわれて見ると、健三も急に気の毒になつた。

「そうですか。可愛想に」

「なに病氣が病氣だからとても癒りっこないんです」

島田は平然としていた。死ぬのが当り前だといったように烟草の輪を吹いた。

しかしこの不幸な女の死に伴なつて起る経済上の影響は、島田に取つて死そのものよりも遙はるかに重大であつた。健三の予想はすぐ事実となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それについては是非一つ聞いてもらわないと困る事があるんですが」

此ここ所まで来て健三の顔を見た島田の様子は緊張していた。健三は聴かない先からその後あとを推察する事が出来た。

「また金でしょう」

「まあそうで。御縫が死んだんで、柴野と御藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今までのように月々送らせる訳に行かなくなつたんでね」

島田の言葉は変まにぞんざいざいになつたり、また鄭寧ていねいになつたりした。

「今までは金鶏勳章きんしゆくんじやうの年金だけはちゃんちゃんとこつちへ来たんですがね。それが急になくなると、まるで目的あてが外れるような始末で、私も困わたしるんです」

彼はまた調子を改めた。

「とにかくこうなつちゃ、御前おまへを措おいてもう外に世話をしてもらう人は誰もありやしない。だからどうかしてくれなくつちや困る」

「そう他にひとのし懸ひつて来たきつて仕方がありません。今の私わたくしにはそれだけの事をしなければならぬ。因縁いんねんも何も無いんだから」

島田は凝じつと健三の顔を見た。半ば探りを入れるような、半ば弱いものを脅かすようなその眼付は、単に相手の心を激昂げつごうさせるだけであつた。健三の態度から深入ふかいりの危険を知つた島田は、すぐ問題を区切つて小さくした。

「永い間の事はまた緩々ゆるゆる御話しをすゝとして、じゃこの急場だけでも一つ」

健三にはどういふ急場が彼らの間に持ち上つてゐるのか解らなかつた。

「この暮を越さなくつちやならないんだ。どこの宅うちだつて暮になりや百と二百と纏まとつた金の要いるのは当り前だろう」

健三は勝手にしろという氣になつた。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談じょうだんいっつちやいけない。これだけの構かまえをしていて、その位の融通が利かないなんて、そんなはずがあるもんか」

「あつてもなくつても、ないから無いというだけの話です」

「じゃいふが、御前の収入は月に八百円あるそうじゃないか」

健三はこの無茶苦茶な言掛りに怒らされるよりはむしろ驚ろかされた。

「八百円だろうが千円だろうが、私の収入は私の収入です。貴方の関係した事じゃありません」

島田は其所まで来て黙った。健三の答が自分の予期に外れたというような風も見えた。ずうずうしい割に頭の発達していない彼は、それ以上相手をどうする事も出来なかつた。

「じゃいくら困つても助けてくれないというんですね」

「ええ、もう一文も上ません」

島田は立ち上つた。沓脱へ下りて、開けた格子を締める時に、彼はまた振り返つた。

「もう参上りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝やいた。健三は敷居の上立って明らかにその眼を見下した。しかし彼はその輝きのうちに何らの凄さも怖ろしさもまた不気味さも認めなかつた。彼自身の眸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに充分であつた。

細君は遠くから暗に健三の気色を窺つた。

「一体どうしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろって来たんですか」

「誰が遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるような態度を見せた。

「あの御婆おばあさんの方が細く長く続くからまだ安全ね」

「島田の方だって、これで片付くもんかね」

健三は吐き出すようにこういつて、来るきたべき次の幕さえ頭の中に予想した。

## 九十一

同時に今まで眠っていた記憶も呼び覚まされずには済まなかった。彼は始めて新らしい世界に臨む人の鋭い眼をもつて、実家へ引き取られた遠い昔を鮮明あざやかに眺めた。

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であった。何しにこんな出来損できそこないが舞い込んで来たかという顔付をした父は、殆んど子としての待遇を彼に与えなかった。

今までと打って変った父のこの態度が、生の父に対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に対してにこにこしていた父と、厄介物を背負い込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚ろいた。次には愛想をつかした。しかし彼はまだ悲観する事を知らなかった。発育に伴なう彼の生氣は、いくら抑え付けられても、下からむくむくと頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに済んだ。子供を沢山有っていた彼の父は、毫も健三に依怙る気がなかった。今に世話になろうという下心のないのに、金を掛けるのは一銭でも惜しかった。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取ったようなものの、飯を食わせる以外に、面倒を見て遣るのは、ただ損になるだけであった。

その上肝心の本人は帰って来ても籍は復らなかつた。いくら実家で丹精して育て上たにしたところで、いざという時に、また伴れて行かれればそれまでであった。

「食わずだけは仕方がないから食わして遣る。しかしその外の事はこつちじゃ構えない。先方でするのが当然だ」

父の理窟はこうであった。

島田はまた島田で自分に都合の好い方からばかり事件の成行を觀望していた。

「なに実家へ預けて置きさえすればどうにかするだろう。その内健三が一人前になつて少しでも働らせるようになったら、その時表沙汰おもてざたにしてもこつちへ奪還ふんだくつてしまえばそれまでだ」

健三は海にも住めなかつた。山にもいられなかつた。両方から突き返されて、両方の間をまごまごしていた。同時に海のものも食い、時には山のものにも手を出した。

実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。むしろ物品であつた。ただ実父が我楽多がらくたとして彼を取り扱つたのに対して、養父には今に何かの役に立てて遣らうという目算があるだけであつた。

「もうこつちへ引き取つて、給仕きゅうじでも何でもさせるからそう思うがいい」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かのついでにこんな事をいつた。健三は驚ろいて逃げ歸つた。酷薄こくはくという感じが子供心に淡い恐ろしさを与えた。その時の彼は幾歳いくさいだったか能く覚えていないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならぬという慾が、もう充分萌もしている頃であつた。

「給仕になんぞされては大変だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸さいわいにしてその言葉は徒勞むだに繰り返され

なかつた。彼はどうかこうか給仕にならずに済んだ。

「しかし今の自分はどうして出来上つたのだろうか」

彼はこう考えると不思議でならなかつた。その不思議のうちには、自分の周囲と能く闘い終おほせたものだという誇りも大分交だいぶんまじつていた。そうしてまだ出来上らないものを、既  
に出来上つたように見る得意も無論含まれていた。

彼は過去と現在との対照を見た。過去がどうしてこの現在に發展して来たかを疑が  
つた。しかもその現在のために苦しんでいる自分にはまるで気が付かなかつた。

彼と島田との関係が破裂したのは、この現在の御蔭であつた。彼が御常を忌いむのも、  
姉や兄と同化し得ないのもこの現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのもま  
たこの現在の御蔭に違なかつた。一方から見ると、他ひとと反そりが合わなくなるように、現在  
の自分を作り上げた彼は気の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つていった。――

「貴夫あなたに氣に入る人はどうせどこにもいないでしょうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」

健三の心はこうした諷刺ふうしを笑つて受けるほど落付おちついていなかった。周囲の事情は雅量みやうりやうに乏しい彼を益窮屈ますきやくにした。

「御前は役に立ちさえすれば、人間はそれで好いと思つてゐるんだらう」

「だつて役に立たなくっちゃ何にもならないじゃありませんか」

生憎あいにく細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もそういう方面にだけ發達する性質たてであつた。これに反して健三は甚だ実用に遠い生れ付であつた。

彼には転宅の手伝いすら出来なかつた。大掃除の時にも彼は懷手ふしとろをしたなり澄ましていた。行李こうり一つ絡からげるにさえ、彼は細紐ほそびきをどう渡すべきものやら分らなかつた。

「男のくせに」

動かない彼は、傍はたのものの眼に、如何いかにも氣の利かない鈍物のように映つた。彼はなおさら動かなかつた。そうして自分の本領ほんりやうを益反対ますさかの方面に移して行つた。

彼はこの見地から、昔し細君の弟を、自分の住んでゐる遠い田舎いなかへ伴つれて行つて教育しようとした。その弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちを横行し

て誰にも遠慮会釈がなかった。ある理学士に毎日自宅で課業の復習をしてもらう時、彼はその人の前で構わず胡坐をかいた。またその人の名を何君何君と君づけに呼んだ。

「あれじゃ仕方がない。私に御預けなさい。私が田舎へ連れて行って育てるから」

健三の申出は細君の父によって黙って受け取られた。そうして黙って捨てられた。彼は眼前に横暴を恣にする我子を見て、何という未来の心配も抱いていないように見えた。彼ばかりか、細君の母も平気であった。細君も一向気に掛ける様子がなかった。

「もし田舎へ遣つて貴夫と衝突したり何かすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それでやめたんだそうです」

細君の弁解を聞いた時、健三は満更の嘘とも思わなかった。けれどもその他にまだ意味が残っているようにも考えた。

「馬鹿じゃありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周囲の様子から健三は謝絶の本意がかえつて此所にあるのではなからうかと推察した。

なるほど細君の弟は馬鹿ではなかった。むしろ伶俐過ぎた。健三にもその点はよく解っていた。彼が自分と細君の未来のために、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く

見当の違った方面にあった。そうして遺憾ながらその方面は、今日こんにちに至るまでいまだに細君の父母にも細君にも了解されていなかった。

「役に立つばかりが能じゃない。その位の事が解らなくってどうするんだ」

健三の言葉は勢い権柄けんべいづくであった。傷きずけられた細君の顔には不満の色がありありと見えた。

機嫌の直った時細君はまた健三に向った。――

「そう頭からがみがみいわないで、もつと解るようにいつて聞かして下すつたら好いいでしょう」

「解るようにいおうとすれば、理窟ばかり捏こね返すつていうじゃないか」

「だからもつと解りやすいように。私に解らないような小六こむずかしい理窟はやめにして」

「それじゃどうしたつて説明しようがない。数字を使わずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だつて貴夫の理窟は、他ひとを捻ねじ伏せるために用いられるとより外に考えようのない事があるんですもの」

「御前の頭が悪いからそう思うんだ」

「私の頭も悪いかも知れませんが、中味のない空っぽの理窟で捻じ伏せられるのは嫌ですよ」

二人はまた同じ輪の上をぐるぐる廻り始めた。

### 九十三

面と向って夫としつくり融け合う事の出来ない時、細君はやむをえず彼に背中を向けた。そうして其所に寐ている子供を見た。彼女は思い出したように、すぐその子供を抱き上げた。

章魚のようにぐにやぐにやしている肉の塊りと彼女との間には、理窟の壁も分別の牆もなかった。自分の触れるものが取も直さず自分のような気がした。彼女は温かい心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、唇を着けて所嫌わず接吻した。

「貴夫が私のものでなくつても、この子は私の物よ」

彼女の態度からこうした精神が明らかに読まれた。

その赤ん坊はまだ眼鼻立めはなだちさえ判明はつきりしていなかった。頭には何時まで待っても殆んど毛らしい毛が生えて来なかった。公平な眼から見ると、どうしても一個の怪物であった。

「変な子が出来たものだなあ」

健三は正直な所をいった。

「どこの子だつて生れたては皆なこの通りです」

「まさかそうでもなからう。もう少しは整つたのも生れるはずだ」

「今に御覧なさい」

細君はさも自信のあるような事をいった。健三には何という見当も付かなかつた。けれども彼は細君がこの赤ん坊のために夜中何度となく眼を覚ますのを知っていた。大事な睡眠を犠牲にして、少しも不愉快な顔を見せないのも承知していた。彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさえ逢着ほつちやくした。

四、五日前少し強い地震のあつた時、臆病おくびょうな彼はすぐ縁えんから庭へ飛び下りた。彼が再び座敷あがへ上つて来た時、細君は思いも掛けない非難を彼の顔に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構わない気なんだから」

何故子供の安危あんきを自分より先に考えなかつたかというのが細君の不平であつた。咄嗟とつさ

の衝動から起つた自分の行為に対して、こんな批評を加えられようとは夢にも思つていなかった健三は驚ろいた。

「女にはああいう時でも子供の事が考えられるものかね」

「当り前ですわ」

健三は自分が如何にも不人情のような気がした。

しかし今の彼は我物顔に子供を抱いている細君を、かえって冷かに眺めた。

「訳の分らないものが、いくら束になつたつて仕様がなない」

しばらくすると彼の思索がもつと広い区域にわたつて、現在から遠い未来に延びた。

「今にその子供が大きくなつて、御前から離れて行く時期が来るに極つている。御前は己と離れても、子供とさえ融け合つて一つになつていれば、それで沢山だという氣でいるらしいが、それは間違だ。今に見ろ」

書齋に落付いた時、彼の感想がまた急に科学的色彩を帯び出した。

「芭蕉に実が結ると翌年からその幹は枯れてしまう。竹も同じ事である。動物のうちには子を生むために生きているのか、死ぬために子を生むのか解らないものがいくらでもある。人間も緩漫ながらそれに準じた法則にやッぱり支配されている。母は一旦自分の

所有するあらゆるものを犠牲にして子供に生を与えた以上、また余りのあらゆるものを犠牲にして、その生を守護しなければなるまい。彼女が天からそういう命令を受けてこの世に出たとするならば、その報酬として子供を独占するのは当たり前だ。故意というよりも自然の現象だ」

彼は母の立場をこう考え尽した後、父としての自分の立場をも考えた。そうしてそれが母の場合とどう違っているかに思い到った時、彼は心のうちでまた細君に向つていった。

「子供を有った御前は仕合せである。しかしその仕合せを享ける前に御前は既に多大な犠牲を払っている。これから先も御前の気の付かない犠牲をどの位払うか分らない。御前は仕合せかも知れないが、実は気の毒なものだ」

#### 九十四

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちらちらと見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寝ると御正月」という唄をうたつた。彼らの心は彼らの

口にする唱歌の通りであった。来るべき新年の希望に充ちていた。

書齋にいる健三は時々手に洋筆ペンを持ったまま、彼らの声に耳を傾けた。自分にもああいう時代があつたのかしらなどと考えた。

子供はまた「旦那の嫌な大晦日」という毬歌まりうたをうたつた。健三は苦笑した。しかしそれも今の自分の身の上には痛切あてはまに的中あてはまなかつた。彼はただ厚い四つ折よの半紙の束を、十も二十も机の上に重ねて、それを一枚ごとに読んで行く努力に悩まされていた。彼は読みながらその紙へ赤い印気インキで棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それから細かい数字を並べて面倒な勘定もした。

半紙に認ためられたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字画はんげんさえ判然はんげんしないのが多かった。乱暴で読めないのも時々出て来た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落胆がっかりした。「ペネロピーの仕事」という英語の俚諺ことわざが何遍となく彼の口のほに上つた。

「何時まで経つたつて片付きやしない」

彼は折々筆を擱おいて溜息ためいきをついた。

しかし片付かないものは、彼の周囲前後にまだいくらかでもあつた。彼は不審な顔をし

てまた細君の持つて来た一枚の名刺に眼を注がなければならなかった。

「何だい」

「島田の事についてちよつと御目に掛りたいっていうんです」

「今差支るから返してくれ」

一度立つた細君はすぐまた戻つて来た。

「何時伺つたら好いか御都合を聞かして頂きたいんですつて」

健三はそれどころじゃないという顔をしながら、自分の傍そばに高く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何といたしましょう」

「明後日あさっての午後に来て下さいといつてくれ」

健三も仕方なしに時日を指定した。

仕事を中絶された彼はぼんやり烟草タバコを吹かし始めた。ところへ細君がまた入つて来た。

「帰ったかい」

「ええ」

細君は夫の前に広げてある赤い印しるしの附いた汚ならしい書きものを眺めた。夜中に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面倒が健三に解らないように、この半紙の山を綿密に読み通す夫の困難も細君には想像出来なかつた。――

調べ物を度外に置いた彼女は、坐すわるとすぐ夫に訊たずねた。――

「また何かそういつて来る気でしょうね。執しつツ濃こい」

「暮のうちにどうかしようというんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思つた。健三の心はかえつて昔の関係上多少の金を彼に遣やる方に傾かたいていた。しかし話は其所そこまで発展する機会を得ずによそへ外それてしまつた。

「御前ごまへの宅うちの方はどうだい」

「相変あひらず困こるんでしよう」

「あの鉄道会社の社長の口はまだ出来ないのかい」

「あれは出来るんですつて。けれどもそうこつちの都合の好いように、ちよつくらちよいとという訳には行かないんでしよう」

「この暮のうちに六むずかしいのかね」

「とても」

「困るだろうね」

「困っても仕方ありませんわ。何もかもみんな運命なんだから」  
細君は割合に落付おちついていた。何事も諦あきららめているらしく見えた。

## 九十五

見知らない名刺の持参者が、健三の指定した通り、中なかいちにち一日置いて再び彼の玄関に現れた時、彼はまだささくれた洋筆先ペンさきで、粗末な半紙の上に、丸だの三角だのと色々な符徴を附けるのに忙がしかった。彼の指頭ゆびさきは赤い印気インキで所々汚よごれていた。彼は手も洗わずにそのまま座敷へ出た。

島田のために来たその男は、前の吉田に比べると少し型を異ことにしていたが、健三からいえば、双方とも殆ほとんど差別のない位懸け離れた人間であった。

彼は縞しまの羽織はおりに角帯かくおびを締めて白足袋しろたびを穿はいていた。商人とも紳士とも片の付かない彼の様子なり言葉遣なりは、健三に差配という一種の人柄を思い起させた。彼は自分の身

分や職業を打ら明ける前に、卒然として健三に訊いた。――

「貴方は私の顔を覚えて御出ですか」

健三は驚ろいてその人を見た。彼の顔には何らの特徴もなかった。強いていえば、今日までただ世帯染みて生きて来たという位のものであった。

「どうも分りませんね」

彼は勝ち誇った人のように笑った。

「そうでしょう。もう忘れても好い時分ですから」

彼は区切を置いてまた附け加えた。

「しかし私やこれでも貴方の坊ちゃん坊ちゃんていわれた昔をまだ覚えていますよ」

「そうですか」

健三は素ツ気ない挨拶をしたなり、その人の顔を凝と見守った。

「どうしても思い出せませんかね。じゃ御話ししましょう。私や昔し島田さんが扱所を遣つていなすつた頃、あすこに勤めていたものです。ほら貴方が悪戯をして、小刀で指を切つて、大騒ぎをした事があるでしょう。あの小刀は私の硯箱の中にあつたんです。あ。あの時金盥に水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」

健三の頭にはそうした事実が明らかにまだ保存されていた。しかし今自分の前に坐っている人のその時の姿などは夢にも憶い出せなかつた。

「その縁故で今度また私が頼まれて、島田さんのために上つたような訳合なんです」  
彼は直本題に入った。そうして健三の予期していた通り金の請求をし始めた。

「もう再び御宅へは伺わないといつてますから」

「この間帰る時既にそういつて行つたんです」

「で、どうでしょう、此所いらで綺麗に片を付ける事にしたら。それでないと何時まで経つても貴方が迷惑するぎりですよ」

健三は迷惑を省いてやるから金を出せといった風な相手の口気を快よく思わなかつた。

「いくら引つ懸つていたつて、迷惑じゃありません。どうせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢していた方が、私にはよッぽど心持が好いんです」

その人はしばらく考えていた。少し困つたという様子も見えた。しかしやがて口を開いた時は思いも寄らない事をいい出した。

「それに貴方も御承知でしょうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、この際いくらでも纏めたものを渡して、あの書付と引き易えになすつた方が好くはありませんか」

健三はその書付を慥に覚えていた。彼が実家へ復籍する事になった時、島田は当人の彼から一札入れてもらいたいと主張したので、健三の父もやむをえず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執った。そうして今度離縁になったについては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだという意味を僅二行余に綴って先方へ渡した。

「あんなものは反故同然ですよ。向で持っても役に立たず、私が貰っても仕方がないんだ。もし利用出来る気ならいくらでも利用したら好いでしょう」

健三にはそんな書付を売り付けに掛るその人の態度がなお気に入らなかつた。

## 九十六

話が行き詰るとその人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げ

た。いう事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴えるという風でもなかつた。ただ物にさえすれば好いという料簡りようけんが露骨に見透かされた。収束するところなく共に動いていた健三はしまいに飽きた。

「書付を買えの、今に迷惑するのが厭いやなら金を出せのといわれるとこつちでも断るより外に仕方ありませんが、困るからどうかしてもらいたい、その代り向後こうご一切無心がましい事はいつて来ないと保証するなら、昔の情義上少しの工面はして上げても構いません」

「ええそれがつまり私わたしの来た主意しゆいなんですから、出来るならどうかそう願ねがいたいもんで」

健三はそんなら何故なぜ早くそういわないのかと思つた。同時に相手も、何故もつと早くそういつてくれないのかという顔付をした。

「じゃどの位出して下さいませ」

健三は黙つて考えた。しかしどの位が相当のところだか判明はつきりした目安の出て来きようはずはなかつた。その上なるべく少ない方が彼の便宜であつた。

「まあ百円位なものですね」

「百円」

その人はこう繰り返した。

「どうぞでしょう、責めて三百円位にして遣る訳には行きませうか」

「出すべき理由さえあれば何百円でも出します」

「御尤もだが、島田さんもああして困ってるもんだから」

「そんな事をいやあ、私だって困っています」

「そうですか」

彼の語気はむしろ皮肉であった。

「元来一文も出さないといつたつて、貴方の方じゃどうする事も出来ないでしょう。」

百円で悪けりや御止しなさい」

相手は漸く懸引をやめた。

「じゃともかくも本人によくそう話して見ます。その上でまた上る事にしますから、どうぞ何分」

その人が帰った後で健三は細君に向った。

「どうとう来た」

「どうしたつていうんです」

「また金を取られるんだ。人さえ来れば金を取られるに極きまってるから厭だ」

「馬鹿らしい」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかつた。

「だつて仕方がないよ」

健三の返事も簡単であつた。彼は其所そこへ落付くまでの筋道くわを委しく細君に話してやるのさえ面倒めんどうだつた。

「そりゃ貴夫あなたの御金を貴夫が御遣りになるんだから、私わたくし何もいう訳はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲たき付けるようにこういつて、また書齋へ入つた。其所には鉛筆で一面に汚よごされた紙が所々赤く染つたまま机の上で彼を待つていた。彼はすぐ洋筆ペンを取り上げた。そうして既に汚れたものをなおさら赤く汚さなければならなかつた。

客に会う前と会つた後との気分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起つた時、彼は一旦読みおわつたものを念のためまた読んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるかどうか、彼には全く分らなかつた。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を弁護しながら、ずんずん眼を通し始めた。しかし積重ねた半紙の束は、いくら速力を増しても尽きる期がなかった。漸く一組を元のように折るとまた新らしく一組を開かなければならなかった。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼はまた洋筆ペンを放り出した。赤い印気インキが血のように半紙の上に滲にじんだ。彼は帽子を被かぶつて寒い往来へ飛び出した。

## 九十七

人通りの少ない町を歩いている間、彼は自分の事ばかり考えた。

「御前は必竟じつじつ何をしに世の中に生れて来たのだ」

彼の頭のどこかでこういう質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答えたくなかつた。なるべく返事を避けようとした。するとその声がなお彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰り返してやめなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

その声は忽ちせせら笑った。

「分らないのじゃあるまい。分つていても、其所へ行けないのだろう。途中で引懸つて  
いるのだろう」

「己のせいじゃない。己のせいじゃない」

健三は逃げるようにずんずん歩いた。

賑やかな通りへ来た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い新らしさを以て急に彼の  
眼を刺撃した。彼の気分は漸く変つた。

彼は客の注意を惹くために、あらゆる手段を尽して飾り立てられた店頭を、それから  
それと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹の根懸だの、蒔絵の櫛  
笄だのを、硝子越に何の意味もなく長い間眺めていた。

「暮になると世の中の人はきつと何か買うものかしら」

少なくとも彼自身は何にも買わなかった。細君も殆んど何にも買わないといつてよ  
かった。彼の兄、彼の姉、細君の父、どれを見ても、買えるような余裕のあるものは一  
人もなかった。みんな年を越すのに苦しんでいる連中はかりであった。中にも細君の父

は一番非道ひどそうに思われた。

「貴族院議員になつてさえいれば、どこでも待つてくれるんだそうですけれども」

借金取に責められている父の事情を夫に打ち明けたついでに、細君はかつてこんな事をいった。

それは内閣の瓦解がかいした当時であつた。細君の父を閑職から引つ張り出して、彼の辞職を余儀なくさせた人は、自分たちの退しりぞく間際に、彼を貴族院議員に推挙して、幾分か彼に対する義理を立てようとした。しかし多数の候補者の中から、限られた人員を選ばなければならなかつた総理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまつた。彼はついに選に洩もれた。何かの意味で保険の付いていない人にのみ酷薄であつた債権者は直ちに彼の門に逼せまつた。官邸を引き払つた時に召仕めしつかいの数を減らした彼は、少時しばらくして自用俵じようほうを廃した。しまいにわが住宅を挙げて人手に渡した頃は、もうどうする事も出来なかつた。日を重ね月を追つて益悲境ますますに沈んで行つた。

「相場に手を出したのが悪いんですよ」

細君はこんな事もいった。

「御役人をしている間は相場師の方で儲もうけさせてくれるんですつて。だから好いいけれど

も、一旦役を退くと、もう相場師が構ってくれないから、みんな駄目になるんだそうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さえ解らない」

「貴方に解らなくなつたつて、そうなら仕方がないじゃありませんか」

「何をいつてるんだ。それじゃ相場師は決して損をしつこないものに極つちまうじやないか。馬鹿な女だな」

健三はその時細君と取り換わせた談話まで憶い出した。

彼はふと気が付いた。彼と擦れ違ふ人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙がしうであった。みんな一定の目的を有つていらしかつた。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動するとしか思われなかつた。

或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥を与えた。

「御前は馬鹿だよ」

稀にはこんな顔付をするものさえあつた。

彼はまた宅へ帰つて赤い印気を汚ない半紙へなすくり始めた。

二、三日すると島田に頼まれた男がまた刺を通じて面会を求めに来た。行掛り上断る訳に行かなかつた健三は、座敷へ出て差配じみたその人の前に、再び坐るべく余儀なくされた。

「どうも御忙がしいところを度々出まして」

彼は世事慣れた男であつた。口で気の毒そうな事をいう割に、それほど殊勝な様子を彼の態度のどこにも現わさなかつた。

「実はこの間の事を島田によく話しましたところ、そういう訳なら致し方がないから、金額はそれで宜しい、その代りどうか年内に頂戴致したい、とこういうんですがね」

健三にはそんな見込がなかつた。

「年内たつてもう僅かの日数しかないじゃありませんか」

「だから向うでも急ぐような訳でしてね」

「あれば今すぐ上げてでも好いんです。しかしないんだから仕方がないじゃありませんか」

「そうですか」

二人は少時しばらく無言のままでした。

「どうでしょう、其所そこのところを一つ御奮発は願われますまいか。私も折角わたくしこうして忙しい中を、島田さんのために、わざわざ遣やつて来たもんですから」

それは彼の勝手であった。健三の心を動かすに足るほどの手数てかずでも面倒でもなかった。

「御気の毒ですが出来ませんね」

二人はまた沈黙を間に置いて相対あいたいした。

「じゃ何時頃頂けるんでしょう」

健三には何時あてという目的もなかった。

「いづれ来年にでもなつたらどうかしましう」

「私もこうして頼まれて上あがつた以上、何とか向むへ返事をしなくっちゃなりませんから、せめて日限でも一つ御取極おとりきめを願いたいと思えますが」

「御尤おしゆいもです。じゃ正月一杯とでもして置きましょう」

健三はそれより外にいいようがなかった。相手は仕方なしに帰って行った。

その晩寒さと倦怠を凌ぐために蕎麦湯を拵えてもらった健三は、どろどろした鼠色のものを啜りながら、盆を膝の上に置いて傍に坐っている細君と話し合った。

「また百円どうかしなくっちゃならない」

「貴夫が遣らないでも好いものを遣るって約束なんぞなさるから後で困るんですよ」

「遣らないでもいいのだけれども、己は遣るんだ」

言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。

「そう依故地を仰しやればそれまでです」

「御前は人を理窟扱いとか何とかいつて攻撃するくせに、自分にや大変形式ばった所のある女だね」

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」

「理窟と形式とは違うさ」

「貴夫のは同なじですよ」

「じゃいつて聞かせるがね、己は口にだけ論理を有っている男じゃない。口にある論理は己の手にも足にも、身体全体にもあるんだ」

「そんなら貴夫の理窟がそう空っぽうに見えるはずがないじゃありませんか」

「空っぽうじゃないんだもの。丁度ころ柿の粉このようなもので、理窟うちが中から白く吹き出すだけなんだ。外部そとから喰く付けた砂糖とは違ちがうさ」

こんな説明が既に細君には空っぽうな理窟であった。何でも眼に見えるものを、しっかりと手に掴つかまなくっては承知出来ない彼女は、この上夫と議論する事を好まなかった。またしようと思つても出来なかつた。

「御前が形式張るといふのはね。人間の内側はどうでも、外部そとへ出た所だけを捉つかまえさえすれば、それでその人間が、すぐ片付けられるものと思つてゐるからさ。丁度御前の御父おとつさんが法律家だもんだから、証拠さえなければ文句を付けられる因縁いんねんがないと考へてゐるようなもので……」

「父はそんな事をいつた事なんぞありやしません。私だつてそう外部うわべばかり飾つて生きてる人間じゃありません。貴夫が不断からそんな僻ひがんだ眼で他ひとを見ていらつしやるから

……」

細君の臉まへから涙がぼたぼた落ちた。いう事がその間に断絶した。島田に遣る百円の話しが、飛んだ方角へ外それた。そうして段々こんがらかつて来た。

また二、三日して細君は久しぶりに外出した。

「無沙汰見舞かたがた少し歳暮に廻つて来ました」

乳呑児を抱いたまま健三の前へ出た彼女は、寒い頬を赤くして、暖かい空気の裡に尻を落付た。

「御前の宅はどうだい」

「別に変つた事ありません。ああなると心配を通り越して、かえつて平気になるのかも知れませんか」

健三は挨拶の仕様もなかった。

「あの紫檀の机を買わないかつていうんですけれども、縁起が悪いから止しました」

舞葡萄とかいう木の一枚板で中を張り詰めたその大きな唐机は、百円以上もする見事なものであった。かつて親類の破産者からそれを借金の抵当に取つた細君の父は、同じ運命の下に、早晚それをまた誰かに持つて行かれなければならなかつたのである。

「縁起はどうでも好いが、そんな高価いものを買う勇氣は当分こつちにもなさそうだ」

健三は苦笑しながら烟草タバコを吹かした。

「そういえば貴夫あなた、あの人に遣やる御金を比田ひださんから借りなくって」

細君は藪やぶから棒やぶにこんな事をいった。

「比田にそれだけの余裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方をやめられたんですって」

健三はこの新しい報知を当然とも思った。また異様にも感じた。

「もう老朽だろうからね。しかしやめられれば、なお困るだろうじゃないか」

「追ってはどうかなるか知れないでしょうけれども、差当りさしあたり困るような事はないんです

て」

彼の辞職は自分を引き立ててくれた重役の一人が、社と関係を絶った事に起因しているらしかった。けれども永年勤続して来た結果、権利として彼の手に入るべき金は、一時彼の経済状態を潤うるおすには充分であった。

「居食いぐいをしていても話らないから、確かな人があつたら貸したいからどうか世話をしてくれって、今日頼まれて来たんです」

「へえ、とうとう金貸を遣やるようになったのかい」

健三は平生へいぜいから島田の因業わらを嗤わらっていた比田ひだだの姉あねだのを憶おもい浮うべた。自分たちの境遇きょうごが變かると、昨日きのうまで輕蔑けいべつしていた人の真似まねをして恬てんとして氣きの付つかない姉夫あねむ婦めは、反省しやんげんの足りない点てんにおいてむしろ子供こども染じみていた。

「どうせ高利こうりなんだろう」

細君こずみは高利こうりだか低利ていりだかまるで知らなかった。

「何でも旨うまく運轉うんますると月に三、四十円の利子りしになるから、それを二人の小遣こづかいにして、これから先細こずみく長く遣やつて行くつもりだつて、御姉おあねえさんがそう仰おつしやいましたよ」

健三は姉あねのいう利子りしの高たかから胸算用むなざんようで元金もとぎんを勘定かんじやうして見た。

「悪わるくすると、またみんな損すつちまうだけだ。それよりそう慾張よくばらないで、銀行ぎんぎやうへでも預たくわけて置いて相あ当たうの利子りしを取とる方が安全あんぜんだがな」

「だから確たしかな人に貸かしたっていうんでしよう」

「確たしかな人はそんな金は借かりないさ。怖こわいからね」

「だけど普通の利子りしじゃ遣やつて行いけないんでしよう」

「それじゃ己おれだつて借かりるのは厭いやださ」

「御兄おあにいさんも困こまつていらしてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先ずその手始として、兄に金を借りてくれと頼んだのだそうである。

「馬鹿だな。金を借りてくれ、借りてくれって、こつちから頼む奴もないじゃないか。兄貴だって金は欲しいだろうが、そんな剣呑けんおんな思いまでして借りる必要もあるまいからね」

健三は苦々しいうちにも滑稽こっけいを感じた。比田の手前勝手な気性がこの一事でも能く窺うかがわれた。それを傍はたで見えて澄ましている姉の料簡りょうけんも彼には不可思議であった。血が続いていても姉弟せいだいという心持は全くしなかつた。

「御前己が借りるとでもいったのかい」

「そんな余計な事いやしません」

## 百

利子の安い高いは別問題として、比田から融通してもらおうという事が、健三にはとても真面目まじめに考えられなかつた。彼は毎月まいげついくらかずつの小遣を姉に送る身分であつた。

その姉の亭主から今度はこつちで金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褄つじつまの合わない事は世の中にいくらでもあるにはあるが」

こういい掛けた彼は突然笑いたくなくなった。

「何だか変だな。考えると可笑おかしくなるだけだ。まあ好いいや己おれが借りて遣やらなくつてもどうにかなるんだらうから」

「ええ、そりゃ借手はいくらでもあるんでしよう。現にもう一口ばかり貸したんですつて。彼所あそこいらの待合まちあひか何かへ」

待合という言葉が健三の耳になおさら滑稽こっけいに響いた。彼は我を忘れたように笑つた。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したという事実が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に関わると思うような性質たぢではなかつた。ただ夫と一所になつて面白そうに笑つていた。

滑稽の感じが去つた後で反動が来た。健三は比田について不愉快な昔まで思い出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生へいぜいから自分の持つてい

る両蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、「これを今に御前に遣ろう」と殆んど口癖のようについていた。時計を所有した経験のない若い健三は、欲しくて堪らないその装飾品が、何時になつたら自分の帯に巻き付けられるのだろうかと思像して、暗に未来の得意を予算に組み込みながら、一、二カ月を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念とも見るべきこの品物は、不幸にして質に入つてあつた。無論健三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉から所有権だけを譲り渡されたと同様で、肝心の時計には手も触れる事が出来ずに幾日かを過ごした。

或日皆なが一つ所に落合つた。するとその席上で比田が問題の時計を懐中から出した。時計は見違えるように磨かれて光つていた。新しい紐に珊瑚樹の珠が装飾として付け加えられた。彼はそれを勿体らしく兄の前に置いた。

「それではこれは貴方に上げる事にしますから」

傍にいた姉も殆んど比田と同じような口上を述べた。

「どうも色々御手数を掛けまして、有難う。じゃ頂戴します」

兄は礼をいってそれを受取つた。

健三は黙って三人の様子を見ていた。三人は殆んど彼の其所そこにいる事さえ眼中まなこに置いていなかった。しまいまで一言いちごんも発しなかった彼は、腹の中で甚しい侮辱を受けたような心持がした。しかし彼らは平気であった。彼らの仕打きやうてを仇敵きゆうてきの如く憎んだ健三も、何故ぜ彼らがそんな面中つらあてがましい事をしたのか、どうしても考え出せなかった。

彼は自分の権利も主張しなかった。また説明も求めなかった。ただ無言のうちに愛想あいせうを尽かした。そうして親身の兄や姉に対して愛想を尽かす事が、彼らに取って一番非道ひどい刑罰に違なかりと判断した。

「そんな事をまだ覚えていらっしやるんですか。貴夫あなたも随分執念深いわね。御兄おあにさんが御聴ごちきになつたらさぞ御驚ごおどろろきなさるでしょう」

細君は健三の顔を見て暗にその気色けしきを伺った。健三はちつとも動かなかつた。「執念深かろうが、男らしくなかりうが、事実は事実だよ。よし事実に棒を引いたって、感情を打ち殺す訳には行かないからね。その時の感情はまだ生きているんだ。生きて今でもどこかで働いているんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」

「御金なんか借りさえしなきゃあ、それで好いじゃありませんか」

こういつた細君の胸には、比田たちばかりでなく、自分の事も、自分の生家なまきの事も勘

定に入れてあつた。

百一

歳が改たまつた時、健三は一夜のうちに變つた世間の外觀を、氣のなさそうな顔をして眺めた。

「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ。」  
實際彼の周囲には大晦日も元日もなかつた。悉く前の年の引続きばかりであつた。彼は人の顔を見て御目出とうというのさえ厭になつた。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも会わずに黙っている方がまだ心持が好かつた。

彼は普通の服装をしてぶらりと表へ出た。なるべく新年の空氣の通わない方へ足を向けた。冬木立と荒た畠、藁葺屋根と細い流、そんなものが盆槍した彼の眼に入った。しかし彼はこの可憐な自然に対してももう感興を失つていた。

幸い天氣は穏かであつた。空風の吹き捲らない野面には春に似た靄が遠く懸つていた。その間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身体を包んだ。彼は人もなく路もない

所へわざわざ迷い込んだ。そうして融けかかった霜で泥だらけになった靴の重いのに気が付いて、しばらく足を動かさずにいた。彼は一つ所に佇立んでいる間に、気分を紛らそうとして絵を描いた。しかしその絵があまり不味いので、写生はかえって彼を自暴にするだけであった。彼は重たい足を引き摺ってまた宅へ帰って来た。途中で島田に遣るべき金の事を考えて、ふと何か書いて見ようという気を起した。

赤い印気で汚ない半紙をなすくる業は漸く済んだ。新しい仕事の始まるまでにはまだ十日の間があった。彼はその十日を利用してしようとした。彼はまた洋筆を執って原稿紙に向った。

健康の次第に衰えつつある不快な事実を認めながら、それに注意を払わなかった彼は、猛烈に働らいた。あたかも自分で自分の身体に反抗でもするように、あたかもわが衛生を虐待するように、また己れの病気に敵討でもしたいように。彼は血に餓えた。しかも他を屠る事が出来ないのでやむをえず自分の血を啜って満足した。

予定の枚数を書きおえた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。

「ああ、ああ」

彼は獣と同じような声を揚げた。

書いたものを金に換える段になって、彼は大した困難にも遭遇せずに済んだ。ただどんな手続きでそれを島田に渡して好いかちよつと迷った。直接の会見は彼も好まなかった。向うももう参上りませんといひ放った最後の言葉に対して、彼の前へ出て来る気のない事は知れていた。どうしても中へ入って取り次ぐ人の必要があつた。

「やつぱり御兄さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでしょう。今までの行掛りもあるんだから」

「まあそうでもするのが、一番適当なところだろう。あんまり有難くはないが。公けな他人を頼むほどの事でもないから」

健三は津守坂へ出掛て行つた。

「百円遣るの」

驚ろいた姉は勿体なさそうな眼を丸くして健三を見た。

「でも健ちゃんなんぞは顔が顔だからね。そうしみたれた真似も出来まいし、それにあの島田つて爺さんが、ただの爺さんと違つて、あの通りの悪党だから、百円位仕方がないだろうよ」

姉は健三の腹にない事まで一人合点でべらべら喋舌つた。

「だけど御正月早々御前さんも随分好い面の皮さね」

「好い面の皮鯉の滝登りか」

先刻から傍に胡坐をかいて新聞を見ていた比田は、この時始めて口を利いた。しかしその言葉は姉に通じなかった。健三にも解らなかった。それをさも心得顔にあははと笑う姉の方が、健三にはかえって可笑しかった。

「でも健ちゃんは好いね。御金を取ろうとすればいくらでも取れるんだから」

「こちとらとは少し頭の寸法が違うんだ。右大将頼朝公の髑髏と来ているんだから」

比田は変挺な事ばかりいった。しかし頼んだ事は一も二もなく引き受けてくれた。

## 百二

比田と兄が揃って健三の宅を訪問れたのは月の半ば頃であつた。松飾の取り扱われた往来にはまだどこもなく新年の香がした。暮も春もない健三の座敷の中に坐つた二人は、落付かないように其所いらを見廻した。

比田は懐から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあこれで漸く片が付きました」

その一枚には百円受取った事と、向後一切の関係を断つという事が古風な文句で書いてあった。手蹟は誰のとも判断が付かなかつたが、島田の印は確かに捺してあった。

健三は「しかる上は後日に至り」とか、「后日のため誓約件の如し」とかいう言葉を馬鹿にしながら黙読した。

「どうも御手数でした、ありがとうございます」

「こういう証文さえ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時まで蒼蠅く付け纏わられるか分つたもんじゃないよ。ねえ長さん」

「そうさ。これで漸く一安心出来たようなものだ」

比田と兄の会話は少しの感銘も健三に与えなかつた。彼には遣らないでもない百円を好意的に遣つたのだという気ばかり強く起つた。面倒を避けるために金の力を藉りたとはどうしても思えなかつた。

彼は無言のままもう一枚の書付を開いて、其所に自分が復籍する時島田に送つた文言を見出した。

「私儀今般貴家御離縁に相成、実父より養育料差出候については、今後とも互に不実不

人情に相成ざるよう心掛たくと存候」

健三には意味も論理も能く解らなかつた。

「それを売り付けようというのが向うの腹さね」

「つまり百円で買って遣つたようなものだね」

比田と兄はまた話し合つた。健三はその間に言葉を挟むのさえ厭だつた。

二人が帰つたあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を開いて見た。

「こつちの方は虫が食つてますね」

「反故だよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠へ入れてしまえ」

「わざわざ破かなくつても好いでしよう」

健三はそのまま席を立つた。再び顔を合わせた時、彼は細君に向つて訊いた。――

「先刻の書付はどうしたい」

「筆筒の抽斗にしまつて置きました。」

彼女は大事なものでも保存するような口振でこう答えた。健三は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める気にもならなかつた。

「まあ好かつた。あの人だけはこれで片が付いて」

細君は安心したといわぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたって」

「でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。もう来る事も出来ないし、来たって構い付けなければそれまでじゃありませんか」

「そりゃ今までだって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でも出来たんだから」

「だけど、ああして書いたものをこっちの手に入れて置くと大変違いますわ」

「安心するかね」

「ええ安心よ。すっかり片付いちゃったんですもの」

「まだなかなか片付きゃしないよ」

「どうして」

「片付いたのは上部うわべだけじゃないか。だから御前は形式張った女だというんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「じゃどうすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどほとありゃしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他ひとにも自分にも解らなくなるだけの事さ」

健三の口調は吐き出すように苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱き上げた。  
「おおい好い子だ好い子だ。御父さまの仰おつしやる事は何だかちつとも分りやしないわね」  
細君はこういいいい、幾度いくたびか赤い頬ほおに接吻せつぶんした。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにはしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ      2016年3月15日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘C室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---